

佐賀大学教育学部附属中学校 3 年

山口 悠希

兄は高校を卒業してアトリエに就職した。週五日、朝十時から昼の三時まで。少し短いけれど、長く活動できるものじゃないらしい。画材は筆ペンでとても不思議な絵を描く。私の似顔絵を描いてもらったけれど、鏡と違って全然可愛くない。でも、凄く上手な絵だった。

兄が給料をもらってきた。初任給だ。「高卒 初任給」で検索すると、十五万円くらいと書かれていた。中学生の私にとっては大金だ。でも、兄が自慢げに持ってきた「工賃支払明細書」を見てみると、一万三千百円と書かれていた。四週間で丁度百時間。兄の時給は、百三十一円だった。

兄は重度の知的障害者だ。上手に話すことはできないし一人でできることにも限りがある。兄は家から歩いて十分くらいの就労継続支援B型事業所で働いている。働いているというか、何人もの大人の手を借りて絵を描いている。それだけで一日に何万円もかかりそうなのに、兄は給料をもらってきた。私は不思議で母を尋ねてみると、兄の周りの大人達のたくさんの給料とほんの少しの兄の給料を支えているのは税金だと教えてもらった。

私にとって税金は払うものだった。お店に行くと消費税を取られるし、旅行で温泉に行くと入湯税を取られた。両親は所得税や自動車税について話していた。でも、兄を見て考え方が変わった。税金は水道や道路、年金など様々な公的サービスを運営するのに使われ、私達は健康で豊かな生活を送ることができている。医療も学校も兄も、どんな大金持ちでもその全てを支えることはできないけれど、一人一人が税金を納めることで一人ではできない大きな支え合いが生まれていた。納税は人助けなんだ。

私の将来の夢は医師だ。医師になって目の前の患者さんを救いたい。ただ、それだけじゃなく、その後ろにいる大勢の人達を納税で支えられる大人にもなりたい。

A五用紙に印刷された工賃支払明細書はとても小さくて書かれている金額は大きなものではないのに、国民全員の兄を応援する気持ちがこもったとても大切な手紙に見えた気がした。

普通じゃ考えられないかもしれないけれど、兄は時給百三十一円の仕事に毎日行きたいと言っている。一人では働けない兄がアーティストになるという夢を叶えられたのは税金のおかげだった。好きな仕事でもらう一万三千百円は兄にとっては大金だ。

福岡教育大学附属福岡中学校 2年

畑瀬 由衣

「レモネードはいかがですかー。」

アメリカで始まったレモネードスタンド。寄付を呼びかけ、協力してくださった方にレモネードを配る活動だ。私はこのレモネードスタンドで、約半年前からボランティアをしている。それは「福岡に『子どもホスピス』を作る」ため。子どもホスピスとは、小児がんや先天性疾患など重い病気や障がいを持つ子どもとその家族を支える施設である。決して死を待つような暗い場所ではなく、子どもの学び、遊び、やってみようことを一緒に叶え、家庭的な環境で豊かな時間を過ごせる「第二の我が家」だ。張り詰めた日々を過ごす家族にもひとときの休息がもたらされる。私は、大阪の子どもホスピスについて書かれた本でその存在を知った。「例え病気や障がいを持っていても、こんなに輝いて、親も子も心から楽しめる場所があるなんて」それからしばらく「子どもホスピス」という言葉が頭から離れなかった。私自身も私の家族も、重い病気にかかった経験があるわけではない。しかし、「重い病気と闘う子どもたちにとって、絶対に必要な施設だ」と確信した。それから私は「福岡子どもホスピスプロジェクト」でボランティアをするようになった。実は、病院併設型でない子どもホスピスは、日本には大阪と横浜の二か所しかないのだ。福岡にも子どもホスピスを絶対作りたい。あの本を読んでから、私のその思いは変わらない。

ただ、課題は山積みだ。特に費用面では、建設や運営に必要な億単位の費用を、全て寄付で賄う必要がある。「どうにかできないのだろうか……」インターネットで情報を集めていたところ、私の目にある記事が止まった。それは、横浜の子どもホスピスについて書かれた記事だった。横浜の子どもホスピスは、なんと横浜市が七二七平方メートルの土地を三〇年間無償で貸し付け、五年間は年五〇〇万円を上限に人件費を補助しているそうだ。衝撃だった。子どもホスピスは民間施設なのに、市がこんな助成をしてくれているなんて。

子どもホスピスを支える、その助成金は、国民が納める税金によって賄われている。税金が子どもホスピスを、そしてホスピスを利用する子どもたちを支えているのだ。このような税金の仕組みが、どれだけ建設から運営までの大きな力となったであろうか。もっと、当たり前のようにこのような優しさあふれることに税金が使われる社会になるべきだと思う。

私たち国民が、日常的に納める税金。税金を通して、納税者から、見えない誰かに、たくさんの優しさというバトンが繋がれていってほしい。誰もが笑顔で毎日を過ごせるように。税金が「優しさのバトン」であり続ける、そんな世の中にしていきたい。

これからも私は、レモネードスタンドに立ち続ける。プロジェクトの一員として、中学生の私でも、子どもたちのため、世の中のために、できることはたくさんあるはずだ。

ある日、私が冷蔵庫を開けるとそこには賞味期限が一ヶ月切れた納豆三パックが置いてあった。母に見せると母はすぐにゴミ箱にそれを捨てた。別の日、食卓にとうに賞味期限が切れ、酸っぱくなったキムチが出された。父が一口食べるとすぐにキムチはゴミ箱に消えていった。こんな風に私の家では手もつけられずに廃棄された食品が多々あった。

私は廃棄された食品を処理するのにどれほどの費用がかかるのかが気になりウェブで調べてみると、そこには衝撃の内容が記載されていた。食品ロスの発生場所は主に二つある。一つは小売店での売れ残りや、飲食店での食べ残し、規格外品の廃棄といった「事業系食品ロス」。もう一つは家での食べ残しや使わずに捨てられるなどの「家庭系食品ロス」。この二つ目の家庭系食品ロスの処理費用は私たちの納めている税金から年間八千億円使用されているというのだ。よく、周りの大人たちが「税金が上がるのは困る」「これ以上負担をかけないでほしい」と言っているのを耳にする。私はこんな言葉に疑問を持たずにはいられない。税金が上がる理由は少なからず私たちの生活が関係しているからだ。私は食品ロスの問題を取り上げたが、その他にも私たちの行為が税金に影響を及ぼしていることは多々ある。逆にいうと、様々なロスを減らすなど私たち自身が生活を見直すことで、その分の税金を別の目的に当てることができるのだ。

税金はいろいろな場面で私たちの生活が豊かになるように使われている。公立の小中学校の教科書やパソコンなどは税金によって買われている。また、医療費や消防、警察の活動、ゴミの回収、さらにはODAの活動や宇宙開発、科学技術の研究のためにも税金は活用されているのだ。税金がなくなれば、私たちは悪状況の中で生活しなければならず、世界が良い方向へと進化していくこともなくなってしまう。それほど税金は私たちの暮らしには欠かせない存在であるのだ。私の家ではフードロスと税金の現状を知ってから、買ったものはできるだけ早くに食べきり、スーパーやコンビニに売っている商品は前から取るようにしている。このように税金を守り、より社会のために役立てていくには、私たち一人一人の意識と少しずつの努力が必要だ。それにより税金を身近に感じ、税金が私たちの生活にもたらす利益もより深く知ることができると思う。

お茶の水女子大学附属中学校 3 年

高野 明

レイとは何か、ご存じだろうか。レイは花の首飾りのことで、ハワイで広く浸透している装飾品だ。お祝いや感謝の気持ちを伝える贈り物として、ごく一般的に用いられる。

幼少のころハワイで育った私にとって、幼稚園だったにもかかわらず、強く記憶に残っている経験がある。それは「バザーの出し物を作るのに、会社を作って実際に運営してみましょう」というものだ。何を作って売するのか、どのように売れば多く売れるか、どのようにお金の管理をするのか、儲かったら次は何をするのか、といったことを、全て子供たちに自主的に考えさせて議論の上で運営方針を決める、というものだった。アメリカではこのように小さいうちからお金に関する教育が行われている。

皆で話し合った結果、私たちはレイを作って販売することにした。幼稚園児たちの作ったレイは、バザーにて保護者や地域の住民が買って下さり、それなりの利益を得た。バザーのあとは、お祭りのような要素もあったので儲かったお金でハンバーガー・パーティーをして盛り上がった。

私の印象に残っているのは、お金の管理についてだ。使ったお金と儲かったお金が幾らなのか先生は子供たちに帳簿をつけさせる。今思うと驚いたのは、架空の会社であるのに法人税の概念が入っていることだった。さらに、売り上げの中からも一定の金額は消費税（アメリカでは売上税）として別に取っておくように言われた。幼少の子供相手にしてはかなり本格的だ。

パーティのあとに改めてお金に関する授業があり、会社が納める法人税や、消費者が支払う消費税は、最終的には幼稚園や小中学校の維持・管理費用にも使われている、という説明をしてもらった。いかに税金が子供たちの教育を支えているか、その社会的な意義を子供ながらに気づかされた。税金を払ってくれる人がいなければ幼稚園や小中学校は無くなってしまう、と子供心に心配したのを覚えている。そもそも税金というものがあることや、その税金が自分の身近なところで活用されていることを、小さいうちに知ったのは良い経験だったと思う。

日本の教育も税金に支えられて成り立っている。私は国立大学の附属中学校に通っているが、運営費の多くの部分は国から支出されている交付金によって支えられている。教育に使われる税金は公立学校の義務教育だけに留まらず、高校にも大学にも税金は活用されているのだ。

これから私が大人になるまで、様々な税金の恩恵を受けることになるだろう。今は税金という社会の仕組みに助けてもらいながら学校に通っているが、この仕組みが今後も健全な状態で続いていくことを願い、未来の子供たちが同じような恩恵を受けられるように、将来は良き納税者として社会に貢献したい。

命を守る税金

利尻富士町鴛泊中学校3年

西島 一樹

去年の冬の夜のことであった。テレビでは暴風雪のニュースが流れていた。居間でパソコン作業をしていた父が急におなかが痛いと言い出した。そのうち脂汗が吹き出て、母が、

「明日の朝まで我慢できそう？」

と聞くと

「できない」

と答えて倒れるように布団に入った。時間は深夜十一時、母は病院に電話をして、吹雪の中、母の運転する車で利尻島国保中央病院に向かった。

病院では先生が待機してくれていて、レントゲン撮影やCT検査の結果、状態が良くないことと、翌日からの悪天候では島から出られなくなる可能性があり、早く島を出たほうが良いとの判断になった。

島で急患が出たときは、旭川のドクターヘリや北海道の防災ヘリ、稚内の海上保安庁の船などが来ることになっているが、悪天候や深夜という条件が重なり父の搬送先や搬送手段はなかなか決まらなかったそう。

この気象下で、出動できるのは自衛隊のジェット機しかないということになり、千歳空港から出動した自衛隊機が利尻空港に降り立ったのは翌朝のことだった。父は利尻空港から札幌の丘珠空港を經由して救急車で市内の民間の病院に移送された。詳しい検査の結果、大動脈解離という血管の病気だったが、緊急手術の必要はないとされ、そのまま入院して経過観察となった。

父を救うために、大勢の人が動いてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。同時に我が家の出費が気になったが、その心配はいらなかった。

母はまず役場に行って「限度額適用・標準負担額減額認定証」という書類を発行してもらっていた。医療費が高額になる場合、ひと月あたり、一定の上限額を支払えばそれ以上の医療費の負担がなくなるというものらしい。

気になるのは自衛隊機の輸送費用だが、驚くことにこの請求はないそうだ。搬送に付き添って下さった医師の帰りの交通費や宿泊代の請求はあったが、これものちに町から助成された。最初にかかった利尻島国保中央病院は公立の医療機関で、医師も看護師も事務職員もみんな公務員だ。つまり父の急患にかかる費用はほぼすべて税金でまかなわれていたのだった。初めて税金の使われ方を身近に感じ、有り難いと実感した出来事だった。

このことをきっかけに、税金が離島の医療にも大きく使われていることを知った。最果てに住む我々が安心して暮らせるのは、税金という制度あつてのことだったのだ。

税金は、誰に、何のために払っているのかがわかりにくい、身近かなところでは、私は買い物に行くたびに消費税を払っている。この何気なく払っている税金がわたしたちの生活や未来を守っていたことになる。

税金は、人の命を守っているのだ。

税金という社会の力

札幌市立上野幌中学校2年 千葉 あかり

私には四歳の妹がいる。歌と踊りが大好きで、いつも外で遊ぼうと私の腕を引っ張ってくる活発な女の子だ。でも、そんな妹は先天性小腸閉鎖症という疾患を持って生まれてきた。妹は生まれた翌日に、生き延びるため大きな手術を受け、その後も集中治療室で、三ヶ月以上に及ぶ長い入院生活を送った。当時小学四年生だった私は、生まれた日に抱いたきりの小さな妹の姿を思い出しては、長く帰ってこないことを寂しく思っていた。退院後、妹は定期的な通院を重ねながら順調に成長し、今年の春には幼稚園に通うことができるようになるまで回復した。

中学生になった頃、ふと数年前の妹の治療費はどれくらいかかったのか気になり、母に尋ねてみた。母からの回答は、「子ども医療費助成制度のおかげで、ほとんどお金はかかっていない」という驚くものだった。母は当時を振り返り、「あの時、命が助かるか分からない、もし助かってもどこまで回復するか分からないという精神的に追いつめられた状況で、お金の心配をする必要がなかったことにはとても救われたよ。経済面だけでなく、気持ちの面でも救われた。」と語ってくれた。

母の話を聞いて、国の医療費の助成について興味をもったので調べてみることにした。まず、国の医療費の助成は私達が日々納めている税金が収入源であり、国の支出における社会保障の分野に属することが分かった。その中に、国民全員が加入する公的医療保険制度があり、それによって、私達は医療費の助成を受けられていることを知った。この国民皆保険制度がいつできたのか調べてみると、昭和三十六年に実現したことが分かった。私の祖父母が今の私と同じくらいの年頃の時のことで、意外にも最近のことなのだと驚いた。祖父母が幼かった頃、病院にかかるためにはたくさんのお金が必要で、今のよう気軽に病院に行くことはできなかったのではないだろうか。今の私達は具合が悪くなった時に、すぐに病院で必要な治療を受けることができる。それはとても恵まれていることなのだと改めて気がついた。私達の豊かで安心した暮らしは、税金に支えられているのだ。

妹のお腹には、今でも手術の大きな傷跡が残っている。それは彼女が頑張った証であると同時に、税金という社会の力が妹を救ってくれた印でもあるのだと思った。

社会は時代と共に変化していく。おそらく税金の在り方も時代と共に変化していくのだろう。でも、どんなに社会が変わっても、私の妹が救われたように、税金は私達の生活を守り、支え、社会をより良くするために使われていくことを願う。そのために、私には何ができるのか考え、行動していきたい。

曾祖母と「かなえおおはし」

宮城県仙台二華中学校2年 井上 妃菜乃

三年前に亡くなった私の曾祖母は生まれも育ちも気仙沼だった。東日本大震災があった三月十一日、曾祖母は地震の後に津波が来ることを知らず逃げ遅れてしまったが、それに気づいた近所の男性におぶわれながら目の前の小学校に駆け込んだそうだ。校庭、校舎の一階には津波が押し寄せ、階段を上がって助かった。

それから何年かして、曾祖母は建て替えをしてまた同じところに住んだが、少子化の流れで小学校は廃校になってしまった。そして、その土地には災害復興住宅が建てられた。津波の高さを考えて七階建てに建てられ、その地区では定期的にそこで防災訓練をするらしい。曾祖母はそこで行われるイベントなどにも積極的に参加し、災害から守ってくれるだけではなく、地域のコミュニケーションが図れることに感心していた。

私は見慣れた風景が変わり、悲しく思っている人が多いのではないかと思った。しかし、曾祖母は恐ろしい記憶をアップデートするかのように新しい風景と暮らしを前向きに捉えて生きていたのだ。気仙沼をはじめ、被災地では津波で家が流され、住むところを失った人がたくさんいる。復興はまだ道半ばではあるものの、この災害復興住宅により、自分たちの安心して住める場所を手に入れられた人も多い。そして、避難先としての機能も兼ね備えていることで、その地区に住む人々に安心感を与えていることも確かだ。

私はこのような災害復興住宅はどのようにして建てられたのだろうと疑問を抱き、調べた。すると、被災地の復興の多くは税金が使われていることを知った。復興税は、正式名称は復興特別所得税といい、東日本大震災からの復興財源に充てるため、通常の所得税に上乗せして徴収されている特別税である。主な使い道は、防波堤や高速道路の整備、災害公営住宅の建設など様々だ。働いている国民の大半から徴収されていることを知り、全国の人から応援されていると思い感謝の気持ちでいっぱいになった。

今年の五月に、気仙沼の祖父母の家に行った。その時に祖母から「かなえおおはしに行ってみたら。」と言われた。青空の中に真っ白な「かなえおおはし」が見えてくると、思わず家族で歓声をあげた。この橋は東北最長に作られ、これにより、物流の効率化や交流圏の拡大、救急医療体制の強化などが期待されている。私は様々なところで復興税が効果的に使われているということを実感した。

これらの経験を通して私は、税金は国民が助け合うために大切な役割を果たすものだと感じた。曾祖母は復興していく故郷をしっかりと見て笑顔で旅立った。これからの将来においても、予期できない自然災害はたくさん起こるだろう。前向きに立ち上がる人々のために、人々が前向きに立ち上がれる社会にするために、納税は大切な仕組みなのである。

安心を未来へつなぐ

舟形町立舟形中学校3年

石川 晋乃介

最後の中総体を来月に控えたある日の練習中、僕の右腰に激痛が走った。サッカーでケガの多いポジションでもあるキーパー。熱の入り過ぎた僕は、ボールに向かって飛び込みゴールポストに衝突してしまったのだ。これまでも、突き指や打撲など何度も経験している。しかし、今回の痛みはレベルが違った。地元の整形外科では、いつも同様に打撲と診断されたが、いくら安静にしても痛みが軽減することはなく、まともに歩くことすら困難になった。焦り、イラ立つ僕を見兼た母が総合病院に連れて行ってくれた。CTやMRI検査が行われ、医師から告げられた言葉は、「専門の病院を紹介します。痛みも強く、大会も近いようなので、早めに予約します。」目の前が真っ黒になった僕の肩を、母は無言で優しくポンポンと叩いた。母に背を向け、涙をこらえながら、これから治療や手術になったら中総体には絶対に間に合わないだろうという絶望と共に、隣に座っている、体調を崩し、職場復帰したばかりの母の負担にならないだろうか、ケガから一週間内で三つの病院を受診し、治療費や手術費はどのくらいになるのかと不安な気持ちでいっぱいになった。きっと両親は、僕に心配をかけないように本当の事は教えてくれないだろう。そうだ、兄に電話してみよう。昨年から警察官として働いている兄に救いを求めた。

「お前、毎年税の作文書く時、税金について勉強してるべ、なに心配してんだ。舟形町は診察だけでなく、医療費の自己負担分も、入院費も助成になるはずだぞ。心配しねえ、よっくどみてもらえ。俺の初任給で買ったキーパーグローブつけて頑張れよ。」

確かに、これまで何度も税金の使い道や、地元の舟形町の支援医療について調べた事があるが他人事で覚えていなかった。今回、当事者として、ホームページでサービス内容を確認すると新しい発見の連続だった。兄が学生だった頃、0歳から中学三年生までの子育て支援医療証は、現在十八歳までに拡大されており、病院での診察料や治療費、入学費や薬代、現在三回目接種を終えたコロナワクチンも税金によって助成されている。霧が晴れた。

検査の結果、『大腿筋の部分断裂』と診断された。怖くて逃げ出したかったが、局所ブロック注射も打った。主治医から、

「思いっきりプレーして来なさい。痛くて歩けなくなったら、僕が責任持って何とかしてあげるから。後悔しないようにね。」と言われ泣いてしまった僕。安心感と勇気を与えてくれた医師の言葉。金額を心配せずに治療出来た町の支援医療に感謝している。中総体の結果は残念だったが、出場出来た事が何より嬉しかった。コロナ禍で皆が不安や不満を抱えている時代だからこそ、将来、子供達に伝えたい。納税の意味について、そして、僕達大人が支えているから心配いらないよ、と。

身近な場所から「ありがとう」

福島大学附属中学校 3 年 片桐 美音

がれきだらけの教室、鉄筋がむき出しになっている天井。体育館は、「卒業証書授与式」とかかれた幕が掲げられたままだった。半年ほど前に、浪江町の請戸小学校に行く機会があったが、その一階部分は今でも震災当時のままに遺されていた。請戸小の至るところが津波の威力を物語っていた。私は、あまりにも悲惨な状況に言葉を失ってしまった。

浪江町は復興の最中で、小学校に来る道中、作業をする重機を何度も見かけた。まだ荒れている土地はあったが、復興は着々と進んでいるようだった。思い返してみると、請戸小の二階や展示スペースは綺麗に整備されていたし、途中の道の駅もとても新しく、お客さん達が買い物を楽しんでいて、それだけを見ると、とても被災した町とは思えなかった。

もちろん、無料で復興することなどできない。調べてみると、震災が起きてから、国の歳出に「東日本大震災復興特別会計」が設置され現在までにおよそ三十二兆円が投入されたらしい。国の歳入の六割は租税である。福島の復興は税金の上で成り立っていたのだ。私は改めて税金のありがたみを感じた。

そんな税金は、復興だけに使われている訳ではない。道路の整備や警察、消防費、社会保険や社会福祉など、様々な場面で税金が利用されている。社会のさまざまな活動を担っているのが税金であり、私たちの納税なのだ。

しかし、私たちはたびたび税金に嫌悪感を抱いてしまう。私はまだ中学生でたくさんの税金を納めている訳ではないが、それでも買い物の時、

「消費税が無ければ買えたのに。」

と思うことがしばしばある。納税は国民の義務であるが、悪く言えば強制である。そのため、納めたくないが納めなければいけない、とマイナスなイメージを持ってしまうのだろう。税金を「とられる」といった言葉も、そんなマイナスな気持ちが表れている気がする。

現在日本は少子高齢化が進んでいて、年金や医療費などで今後ますます歳入が必要になる。そのため、もしかしたらまた増税が行われるかもしれない。私はそのような時、嫌だなど考えるのではなく、身近な税金が使われている場所をさがしてみたい。そうすると、浪江町の請戸小学校見学の時のように、税金にありがたみを感じることができ、プラスなイメージを持てるだろう。たしかに、税金に対する嫌悪感を完全になくすことは難しいのかもしれない。しかし、税金について正しく知り、身近な場所からありがたみを感じることが、嫌悪感を無くす第一歩だと、私は思う。

私はこれからも、社会を支えるため、税金を「納める」ようにしたい。

「暑いよお。」と言わんばかりに木陰でぐったりしているのは、僕の愛犬だ。去年の秋に我が家に迎えて、初めての夏がやってきた。愛犬にとって生まれて初めて外で過ごす夏。だが、よりによって、僕が経験してきた夏を遥かにしのぐ暑さの夏が来てしまった。これも地球温暖化の影響なのだろうか。調べてみると、I P C C 第六次評価報告書に「人間の影響が地球を温暖化させてきたことに疑う余地がない。」と断言されていた。

地球温暖化を抑制するために、フィンランドやスウェーデン、オランダなどでは「炭素税」が課せられているそうだ。日本ではまだ導入されていない。炭素税は、化石燃料に対して課される税金で、排出される炭素の量に応じて税負担に差を付け、温室効果ガス排出を抑制することが目的になっている。僕は、そんな税金があることに、興味が湧いた。

地球温暖化は最近特によく耳にするが、僕たちのいない未来のことであり、僕たちに直接は関わらないことだと思っていた。でも、「もう始まっているんだ。」そう、全人類が直面している現実なのだと思い付いた。今年の夏は、各地で頻繁に発生した線状降水帯による洪水、連日の体温を超える気温の観測などが見られた。しかも、熱中症アラートによる部活動の制限もされた。もうすでに僕たちは地球温暖化の影響を受けていたのである。

炭素税は日本では本格的に導入されていないが、近く導入されると言われている。もし、炭素税が導入されたら、炭素に価格をつけて「見える化」するカーボンプライシングによって、排出量を抑える行動を起こすきっかけとなると思う。同じ目的の値段の違う二つの商品があった時、僕だったら今は迷わず安い商品を選ぶ。でも、その商品が環境に良いかどうかは分からない。もしかすると、値段が安い方は炭素排出量が多く、値段が高い方は生産コストはかかるが、環境に配慮されている商品かもしれない。しかし、炭素税が導入されると、税の上乗せによる値段の逆転が、環境に良い商品を消費者が自然と選ぶことを可能にさせるだろう。すると、企業も環境に配慮した商品の開発に取り組むことになる。まさに一石二鳥、僕も環境に良い商品を手にはしているはずだ。さらに、SDGs のゴール十二の「つくる責任、つかう責任」にもつながる仕組みになっていくと考える。

僕にとっての税金とは、余分にかかる、払わされているといった負の印象があった。しかし、よく調べて考えてみると、税金の「意味」が見えてきた。炭素税というたった一つの税金が、地球温暖化問題に向き合わせてくれ、色々と考えさせ、行動へと導いてくれる。そう、一つの行動の源となる、それが税金の「意味」なのではないだろうか。

地球温暖化は人間による「人災」だ。ならば、人間が止めよう。未来の地球、そして僕たち、愛犬を守るために。

未来の医療に向けて

茨城県立並木中等教育学校 3 年 角田 妃奈子

この夏、私はある大学の研究チームが主催する最先端医療技術の体験会に参加した。そこでは、装着型サイボーグHALといわれるロボットを装着して様々な動きを体験した。例えば、HALを腕に装着し、自分が行いたい動作を意識すると、脳で発生した信号をHALが検出して動き、肘を曲げたり伸ばしたりすることができる。同様に、腰に装着するとHALの動きで起き上がったり、立ち上がったりすることができる。これにより、身体が麻痺してしまった人でも、その人の思いで身体を動かすことができるのだ。これを繰り返すことにより、動作の情報が筋肉から脳へフィードバックされ、次第にHALを装着しなくても身体を動かすことが可能になる。このようなことから、HALは現在、医療現場、介護現場、作業支援を必要とする現場において広く利用されている。特に医療現場においては、神経・筋難病に指定されている疾患に保険適用され、今後、様々な疾患への保険適用が期待されているそう。私はHALの機能を実際に体験したことにより、その技術の素晴らしさに感動した。また、それと同時にHALが保険適用であることに安心した。

日本では、憲法第二十五条の定めに基づいて、社会保障制度が整備されてきた。医療保険は、その中の社会保険に含まれている。これにより私たちは病気やケガ、老齢などによる生活不安を取り除き、生活を安定させることができる。社会保障は、国の歳出のトップにある。つまり、私たちは医療保険を使用するにあたり、税のありがたみを意識する必要があるのだ。いくら素晴らしい医療技術が開発されても、その使用料が高額では多くの人に使ってもらえない。医療を支える上でも、税金は欠かせないものなのだ。

一方で、社会保障制度には課題がある。それは、少子高齢化の影響で高齢者の医療費が増大しているのに対して働き手が減少するため、国の収入が減ってしまうことだ。最先端な医療技術を使ってもらうためにも、社会保険は欠かせない。しかし、それでは国の財政も苦しくなる。では、私たちは一体どうすればよいのだろうか。私は一人一人が老後も健康でいられるように意識して生活することが課題解決へ繋がるのではないかと考える。例えば、一日三十分程度体を動かす、栄養バランスの取れた食事を心がけるなど、これだけでもかなり健康な身体を維持できるはずだ。健康でいるということはつまり、医療保険の給付を減らすことに繋がる。これにより、本当に医療が必要な人にだけ税金を使うことができる。私たちは、社会保障制度に甘え、当たり前のように医療保険を使っていないだろうか。未来の医療を支えていくためにも、医療に私たちの大切な税金が使われていることを深く意識するべきだ。私は、その一人一人の意識が、日本の医療の明るい未来に繋がっていくと信じている。

税金で恩返し

佐野市立常盤中学校3年 亀山 さくら

「税金」と聞くと、どんなことを思い浮かべますか。近年は消費税額の引き上げがあり、買い物とする度に「何だか損した気分だ。」と感じ、税金に対してマイナスイメージを持つ方もいるでしょう。私もその一人でした。あの出来事が起こるまでは。

二〇一九年秋のことです。私が住む地域は台風十九号により被害を受けました。連日の豪雨で勢いを増した濁流が道路を破壊し氾濫。当時通っていた小学校にも押し寄せたのです。学校は休業をよぎなくされ、私は友人に会うこともできず、変わり果ててしまった風景を目のあたりにして絶望感でいっぱいでした。

そんなとき、母から小学校と道路の復旧工事が始まったと知らされました。私はとても驚きました。被災してからこんなにも早く工事が始まるとは思わなかったのです。工事は着々と進み、完全に復旧された訳ではありませんでしたが、休業は二週間ほどで終わり、学校に行けるようになりました。休業明けの朝会で、校長先生が、

「この工事には、佐野市の税金が使われています。工事をしてくださった方々にはもちろん、税金にも感謝して生活しましょう。」

とおっしゃいました。私はこの話を聞いて、とても凄いことだと感動しました。調べてみると、今回のような工事には、公共事業関係費の中の道路整備事業費と、学校施設環境改善交付金などが使われているそうですが、それだけでなく、学校や交番、下水道整備などに使われている税金にも、もしかしたら自分が納めた税金が含まれているかもしれない、そう思ったのです。自分が納めたたったの一元や五円が、日本全国の人々が納めた税金と合わさって日本の地域社会を支えていると思うと、人と人とのつながりを感じて、とても嬉しい気持ちになります。

税金は、いわば水のようなものだと私は思います。水は、雨や雪として地上に降り、川となって海へ注ぎ、水蒸気に姿を変えて空へ戻りまた地上へ降るという循環の中で、地球を巡り動植物や私たち人間に様々な恵みをもたらします。人間にとって水は、飲まなければ三日で死んでしまうと言われるほど生存に不可欠なものです。税金は、そんな水と同様に、社会を巡る中で教育や公共サービスなどの多様な面から私たち国民を支援してくれているのです。税金とは、豊かな社会を築く上で必要不可欠なものです。

私の地域は、多くの人々と税金に救われました。一人ひとりが納めた税金が、誰かを救うことがあります。また、今の生活や社会は、税金がなければ成立していないでしょう。税金を納めることと、税金の恩恵を受けることは一体です。私は、税金の大切さやありがたみを理解し、税金をきちんと納めることで、助けてくれた人々や税金に恩返しをしていきたいです。

思いをつなぐバトンパス

群馬大学共同教育学部附属中学校 1 年 佐藤 陽

私達は「税金」と聞くと何を思い浮かべるだろうか。身近な消費税やガソリン税。馴染みの薄い所得税や法人税。税金には約五〇にも及ぶ種類があるそうだ。

また納税者には、「仕方なく税金を支払う人」と「社会に税金が必要だと感じて支払う人」がいる。同じ金額を納税しても、税に対する「思い」が全く違う。私は、納税者それぞれの味覚が違うように、それに対する感じ方が違う事は否定しない。しかし、私は税によって命を救われた。私は、税金が人命までも救う役割がある事を経験したのである。

そもそも、税金は「公共サービスの提供」や「社会資本の整備」に使われている。中でも、医療に対する恩恵は、誰もが平等に受けられる。幼少期の医療費無料や高齢者の一割負担などはその代表例である。仮に医療費に税金が使われず、全額自費診療であるならば病院に行くだけでも高額な費用が掛かってしまう。すると、貧富の格差により、適切な医療行為が受けられない。助かる命も金銭が工面できないが故に助からない。決して、人命は、貧富の格差で左右されるべきではない。

以前、私が四歳の時、肺炎を患った。四二度の高熱にうなされ、父と母は普段と違う様子に慌てふためいたそうだ。時間の経過に連れて、容体が悪化する中、深夜に父は救急車を呼び、病院で治療を受けさせた。私は治療を済ませ、一時帰宅したが、しばらくすると容体が再び悪化した。そのため、父は二回目の救急車を呼んだ。僅かな時間で、同日に二度も救急車を呼び、父は救急隊員の方に「すみません。すみません。何度もお願いしてしまって。子供を助けて下さい。」と涙ながらに訴えたそうだ。すると隊員の方が、「心配いりません。お子さんは必ず元気になります。」と動揺する父を励まし、嫌な態度をする事無く病院へ搬送してくれたそうだ。

その後、私は病院に一週間入院した。父も仕事が終わると毎日、病院の簡易ベッドと一緒に寝てくれた。入院中は医師や看護師も、優しく温かく接してくれた事を覚えている。幼い私が少しでも不安にならないように。

後日、母より、救急車を深夜に二度も呼んだにも拘らず、その費用が掛からなかった事や入院代も無料であった事を聞いた。その費用は税金で賄われており、私の命は税金で救われたと聞いた。この時私は、命を救ってくれた有難さ以上に、「自分も大きくなったら同じように苦しむ人を助けたい。税の力を通じて何か役に立ちたい。」と心に誓った。

税金は取られるものではない。税金は「未来に思いをつなぐバトン」なのではないか。それは、苦しんでいる人を助ける真の役割を秘めている。「ありがとう」と「どういたしまして」。私は、思いのこもったバトンをきちんと未来につなげる役割を果たしたい。

世界を支える税金

さいたま市立浦和中学校2年 串間 萌花

二〇二二年二月二十四日。これはロシアがウクライナ軍に侵攻を始めた日である。この日から今もなお、激しい戦闘が続いている。この終わりが見えない戦争の中、ウクライナでは国民総動員令によって男性の十八歳から六十歳までは出国の禁止を、女性は他国に避難を余儀なくされている。私たちにできることはないのだろうか。

日本ではウクライナの難民を受け入れ、支援をしている。ウクライナの難民の多くは、日本語を話すことができない。また、幼い子どもを連れて十分な身支度もできないまま、国外にやっと避難したという人もいる。そのような状況で、急に日本語で会話をされたり、生活費だけ渡されたりするのでは困るだろう。そのため、音声や写真で読み取った言語を翻訳できる機器の貸し出し、日本語教育や職業訓練、子どもの教育を行うなど避難してきた人が安心して生活ができるような工夫をしている。しかし、これらの取り組みには多額の資金が必要である。一体、どのように賄われているのだろうか。これらの支援は寄付金や「経済協力費」という税金によって成り立っている。自分たちのためだけでなく、他国の人のために使われる税金があるのだ。経済協力費は国の歳出額の内訳のうち0.5%、およそ五千百二十三億円が使われている。では、私たちが払っている貴重な税金を他国の人のために使ってもよいのだろうか。

日本は終戦のときに、他国から資金援助を受けている。また、食料や衣料、医薬品、日用品など、あらゆる援助物資を届けてもらった。そのお陰で日本は経済発展を遂げることができたのである。また、二〇一一年に発生した東日本大震災のときにも日本は世界各国から多くの援助を受けている。その中には開発途上国からの支援もあったそうだ。日本が今まで受けてきた恩恵を考えると、援助が必要な国に日本の税金を使うことは良いことだと思った。また、他国と助け合い、支え合っていくために、経済協力費は必要だと感じた。

ウクライナの人々だけでなく、世界には貧困や飢餓で苦しんでいる人がたくさんいる。日本では、開発途上国を助けるために、ダムや道路、病院をつくったり、薬や注射器を送ったりしている。このように使われる経済協力費は、世界中の人々のために大きな役割を果たしていると思う。

「情けは人のためならず」という言葉がある。これは、人に親切にすれば、相手のためになるだけでなく、巡り巡ってよい報いとなり自分に返ってくるという意味である。このように私たちが払った税金が他国の人のため、そしてやがて自分たちのためになると思うと、経済協力費は未来に繋がるとても有効な使い方だと思う。今、私は税金によって支えられている側であるが、大人になったら、納税者として社会に貢献できるようになりたい。

「見える化」がつくる日本の未来

川口市立上青木中学校 3 年 大関 もえの

『税金は必要ですか』と問われたら、NOと答える人は少ないと思います。それは私達国民は、生活を守る上で税金が欠かせないという事を理解しているからです。しかし、その一方で納税することに対し、前向きなイメージを持っている人は少ない様に思います。テレビのニュースを見ていても、増税に反対する声や、税金の無駄使いへの不満、公費の補償が行き届いていない事の指摘など、納税に対してマイナスの印象を持ってしまう事の方が多く取り上げられていて、逆に、税のおかげでこんな風に助かったという様なニュースがクローズアップされる事はあまりないというのも、その原因の一つだと思います。そこで私は、もっと国民誰もが税について正しく知り、また、納税をより誇らしく思えるようにするにはどうしたらよいかを考えてみました。

まず必要なのは、税の仕組みや重要性を幼い頃から理解する事、当たり前の事だと思えるようにする事だと思います。みんなが豊かで安心した暮らしをするためには、税金は欠かせないものです。でも、実際に自分の生活のどの部分が税金で支えられているのか、大人でもきちんと説明できる人は少ないのではないのでしょうか。小さい時にお店屋さんごっこで、物を買うためにはお金が必要だと学ぶような感覚で、安全な暮らしのためには税金が必要だと学べる機会がもしあったとしたら、税に対する意識も知識も、今とは変わってくると思います。

そこで私が考えたのは、GIGAスクール構想との連動です。今、私達児童生徒には一人一台の学習用端末が用意されています。これを上手く活用できれば、誰もが税金についてもっと詳しく知る機会を持つことができます。しかし、それには子どもでも理解できる方法で、よりわかりやすく税を学べるシステムが必要です。例えば自分達がどのような税金で守られているのか、また、将来納税した場合に、誰をどのように支えていけるのか、疑似体験しながら学べるアプリが学習用端末に入っていたら、学んだ先に明るい未来や安全な生活を思い描きやすくなるはずです。

また、これを応用し、よりリアルタイムにデータを反映させるシステム、つまり「見える化」する事ができれば、個々の税金が何に活用されたのかを誰もが知る事ができる様になり、国民の納税に対する意識の向上にも繋がっていくのではないかと思います。

納税は国民にとって義務であると同時に、自分たち自身の手で安全な暮らしを守っていくための権利です。これを、これからの社会を担っていく私達学生がしっかりと理解しておく事、そして今、納税している全ての人々が認識する事が必要だと私は考えます。税の「見える化」は、そんな支え合う明るい日本の未来への道しるべになってくれるのではないかと思います。

「税金か、できれば払いたくないよね。」

と言ったら、洗い物をしていた母の手が止まった。母は悲しいような怒っているような何とも言えない表情をして、鞆から何かを出してきた。それは小児慢性特定疾病医療受給者証とこども医療費助成受給者証だった。

「みんな普段いろいろな公共サービスを受けて暮らしているんだけど、その財源の一部は税金で賄われているよ。陽菜は今、医療費の面でとても助けてもらっているんだよ。」

私は今年の春、病気になった。体のあちこちが痛くなり入院した。病名は若年性特発性関節炎。この病気は小児慢性特定疾病の一つで、助成対象者は申請をすると医療費の助成を受けることができる。私は三週間ほど入院したくさんの検査や治療をしてもらったけれど、制度のおかげでとても助けられたそう。母と一緒にいろいろと調べてみた。

私の住んでいる新潟市では、小児慢性特定疾病の治療等を受けた時に次のような助成を受けることができる。医療費負担が一律二割となり、一か月の自己負担限度額に達したのちは負担がない。またこども医療費助成等の自己負担が低い場合は双方を比較し低い方の額が請求されるそう。私は退院後も二週間に一度点滴に通い、検査もいくつか受けている。実際にどんな感じで助けてもらっているのだろう。具体的にイメージするために、私は小児慢性特定疾病医療費自己負担上限額管理票と診療費請求書兼領収書を見ながら計算してみた。私は本来かかっている医療費の高さに驚いた。もし税金がなかったらと考えると恐ろしくなった。

私には医師になりたいという夢がある。しかしもし税金がなかったら、このような助成を受けることができず私の家は経済的に困窮してしまうだろう。病院にだって通いづらくなり、病気が悪化していたかもしれない。大学に入るところか、受けることだって厳しくなっていたかもしれない。そう考えたら、税金は私の夢を将来に繋いでくれる懸け橋に思えた。

私は病気になんてなりたくなかった。けれどこの経験のおかげで日常生活の一つ一つに感謝できるようになった。医療費と税金の関係について調べる中で、税金は医療以外にも様々な場面で使われていることを知った。学校へ行けること、病院で治療を受けられること、毎日を安全に過ごせること。今まで当たり前で過ごしていた日常が当たり前ではないことを知った。税金の使われ方を知ったら、毎日に感謝できるようになった。税金のおかげで夢をもち続けることができると考えたらもっと頑張ろうと力が出る。本当はこんなに素敵な社会なのに、気づいていない人がたくさんいる。だから私はもっと税金の大切さを周りの人に伝えよう。知ったらみんなもっと幸せを感じながら毎日を過ごせると思う。私がそうであるように。

税金を、すべての人のために。

飯田市立飯田東中学校3年 下平 彩葵

「税金」と聞いて思いつくもの。消費税、酒税、自動車税…。これらの税金は私たちの身近で役立っている。その税金の大切さを教えてくれたのは父だった。

私の父は公務員だ。いつも市役所へ仕事をするために出かけている。そんな父が税の作文を書こうとしていた私に言った。

「税金は、正しく使われなければ意味がなくなってしまう。」

父は昔、税務課にいたそうで、そこで税金について多くのことを学んだという。市役所で扱う税金の大部分は、市民から集められた市民のためのお金であり、間違った使い方は決して許されない。

税金について父からこうした話を聞いていて、私はふと、家の近くで行われていた道路の拡張工事のことが頭に思い浮かんだ。父いわく、これにも税金が使われていたらしい。私は驚いた。あの工事現場にも、税金が使われていたのか、と。

この他にも、税金は色々な場所で実は活躍していた、ということを知った。例えば、私の通う中学校。税金があるからこそ、お金をかけずに学校へ通えて、教科書を無料でもらえる。そして、勉強ができる。また、病院でも税金のおかげで、安く診察をしてもらったり治療を受けたりすることができるのだ。私たちから集められたお金が私たちのために使われ、役立っている。税金は、暮らしを支えてくれているありがたい存在だということがよく分かった。

では、税金がなければどうなるのか。父はそのことも話してくれた。日本中の多くの子どもが学校に通えず、子どもでも働いてお金を稼ぐ必要が出てくるかもしれないという。もしも自分がその身になってしまったら。そのことを考えると、怖くなる。中学生の自分に、本当に大人と同じようなことができるのだろうか。さらに、病院でも何万円と高いお金をかけなければならなかったり、普通私たちが乗っている車が通る道路も、それ自体が建設されなかったりするというのは。税金がなければ、私たちの「日常」が消える。その「日常」をつくる税金を、父が懸命に管理してくれていたと思うと、感謝の気持ちでいっぱいになる。父にとって税金は、市民のためという、重い存在だったのだ。

この作文を通して、税金の重要性や、父のような人の思いを知ることができた。そして、未来へ向かう今こそ、税金についてもっと学ぶべきだと思うようになった。私は大人になったら、必ず税金を納められるようにしたいと思う。その時になったら、この二つのことは忘れないでおきたい。

税金の正しい使い道を考えてくれている人がいること。そして、「税金は、すべての人のためにある」ということを。

九十分、三千五百円。この金額は、この夏私が塾に申し込んだ夏期講習の一回の料金です。一日に、二回を約二十日分。とても高額になることは、すぐにわかりました。

そうなると、毎日六時間授業を行なっている中学校の授業料はいくら払っているのだろうと、気になって親に尋ねました。すると、少しの教材費と給食費しか払っていないと聞き、とても驚きました。しかも、払った給食費は食材費だけで、調理員さんのお給料や調理のための水道光熱費などは税金で賄っていると知りました。

私たちのために一年間で一体どのくらいの授業料がかかっているか調べてみると、国の支出で『文教及び科学振興費』というのがあり、公立の中学生の一人当たりの負担額が約百万円とありました。つまり、私の中学の授業料はすべて税金から支払われていたのです。

そういえば四月に配られた教科書には「この教科書はこれからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」と、書いてあります。

小学校に入学してから今まで、自分が当たり前に使っていた百冊以上の教科書には本当は値段があり、それら全てが税金によって購入されていたのです。

私は今まで買い物をする時に消費税を払っていましたが、高いなあと思いながら仕方なく払っているだけでした。しかし、一年間に私がお小遣いで買い物をする程度の消費税では、自分の授業料を払うのも、教科書を買うのも充分ではなかったのです。

そして、その学校に毎日安全に通えるのも、信号機のある横断歩道やきれいに舗装された歩道や街路樹、いざという時に自分を助けてくれる警察や消防など、様々な公共サービスを提供されて過ごしていたことに、今さらながら気がつきました。

納税はすぐに何かを得られるわけではありませんが、そのお金で社会全体を支え合い、豊かにし、結果的には自分の日常も幸せにしているのだと思います。

若い世代一人一人が税金というものに対して意識を持ち、責任を自覚するためには、少しずつでも税の役割やしくみについて学ぶことも大切だと、この作文を通じてわかりました。

これからは、納税で私たちの日常を支えてくれる人に感謝の気持ちを忘れず、そして将来は、次の世代の子どもたちの幸せな暮らしを、自分の納税で支えていきたいと強く思います。

「大きな家族の輪」を繋ぐ税

習志野市立第五中学校 3 年 長尾 碧唯

まさか私が新型コロナウイルス感染症に感染するとは思ってもいなかった。PCR検査で陽性だと医療機関から電話連絡が入った頃には、家族にも症状が出ていた。私は二日で解熱し後遺症もなかったが、家族はそれから三週間ほど中等症と言われる症状に苦しむことになる。市から貸与されたパルスオキシメーターでの酸素飽和度の値が九十%を下回ることもあり、訪問看護の先生方が自宅訪問して点滴をしてくれたり、高濃度の酸素を排出する装置である酸素濃縮器を貸与してくれたりした。ちょうどその頃、私が生まれる前から飼っていたチワワが一五歳と一六歳で相次いで死んでしまったこともあり、悲しみのどん底にいた私は、家族も全員このまま死んでしまったらどうしようと不安でたまらなかった。そんな中で私を励まし、見守ってくれたのが、保健所の方々、訪問看護の先生と看護師さんたちだ。毎日健康観察の電話連絡をしてくださり、自宅訪問した際には数週間後に迫った期末テストの勉強をしている私に、頑張ってるね、えらいね、と優しく声をかけてくれた。食事でも市からの配食サービスと祖父母の支援により困ることがなかった。もし家族に何かがあった時も私はひとりじゃない、見守ってくれる人たちがいるという心強さと感謝の気持ちはこれから先、一生忘れることはないだろう。

私たちは検査に行くという行動しかしていない。それにも関わらずこれら全ての支援が連携されていて、しかも一円も支払うことがなかった。もし税金がなければ、身体も心も弱っているなかでお金の心配をしながら医療機関に連絡して、必要な医療機器を手配したり、宅配デリバリーを調べたりしないといけなかったのだろうか。考えるだけで不安に押しつぶされそうになる。税金のおかげで私は助けられたと身をもって体験した。

家族を安心できる人たちの集まり、安心できる場所と考えるなら、私を見守ってくれた地域の人たちがみんな家族のようだった。家族の輪を地球規模に大きくすると、日本は税金を使い、ODA（政府開発援助）をし、途上国に支援をしている。これによって途上国は負のスパイラルから抜け出せる可能性が出てくるという。地球上の家族という大きな輪を税が繋いでいて、みんなが安心して暮らせるように支えてくれているように感じた。

その輪の中にいる一員として私が今できる恩返しは、勉強に励み、将来社会に貢献できる人になること。そして、税金の種類や納め方、使われ方を学ぶことも大切だ。税金は種類も多く複雑で勝手に徴収されるからよく分からないでは済まされないことが今回勉強して分かった。少子高齢化が進む日本では限りある税金を正しく使うことが大切なのだ。そして、税金が繋いでくれた「家族」の優しさや心強さを知った人たちの輪は、次の世代にもしっかりと繋いでいってくれることだろう。

「薫習」～納税の想い～

山脇学園中学校2年 細貝 桃奈

「おばあちゃん、濃厚接触者になっちやったって……。」

毎日聞かない日は無い、未曾有の災禍、新型コロナウイルス……とうとう私の身内にも迫ってきてしまいました。さて、どうしよう。いつ家族が罹患してもおかしくない状況の中、心構えもしていたはずなのに、いざ連絡を受けると、とまどいしかありませんでした。離れて住んでいる祖母に何もしてあげることができない、会いに行くこともできない、無力な自分。私の家族が頼ったのは、行政サービスでした。そしてそれは税のおかげだったのです。ワクチン接種も新型コロナウイルスの治療費も自宅療養者への食料品の差し入れ、これら全て税金が担ってくれていたのです。

もし、日本から税金の仕組みが消えたら、を考えてみてください。交番が有料化するかも知れません。ごみの処理も高額となれば街にゴミが散乱するでしょう。すると、病気や怪我も多くなります。しかし、救急車は有料で病院の治療費は高額、となれば支払いできない人が多くなるのではないかと、思います。当たり前のように交通が安全に機能し、安心安全な暮らしはどこからきているのか考えれば、税金の仕組みの素晴らしさを再確認できます。

私はときどき、外国人の友人家族とオンラインで会話します。そのときに日本は街がキレイで安全だねと褒められます。その度私は税金のおかげなんだよ、と説明します。いつもとても嬉しく誇らしくなるので、今回世界の消費税について少し調べてみました。消費税率は日本が一番高いと思っていたのですが、国税庁によると日本は世界で九番目に高いそうです。日本の消費税率は高いという声をよく聞くので、一番消費税率の高いデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの二十五パーセントには仰天しました。あまりにも消費税が高いと困りますが、自分の為の納税と考えるなら、気持ちよく納税できるのではないのでしょうか。

仏教用語に「薫習」という言葉があります。先日知ったばかりですが、とても心に響きました。布に香りが残るように、時間をかけて願いや想いが他人に届くということだそうです。私の納めた消費税が必要とされるカタチとなり、いつの日か誰かに伝わる。まるで税金の仕組みのようだなと思いました。

若者は納税について無関心のように見受けられます。もっと幼少期から税についての知識を学ぶ機会を増やすべきだと思います。面倒くさい、分からないと言わず、誰かの為だけではなく自分の為に納税する気持ちを持つべきなのです。e-tax など便利な納税システムもあります。もっと気軽に、そして「薫習」に、税金が正しく有意義に使われて、より良い日本の未来へと発展していくことを期待しています。

税金は、私に明るい未来をくれた。

小学二年生のころ、私は病院で「思春期早発症」と診断を受けた。通常は 11 歳ごろから始まることが多いとされている思春期が、早く始まってしまうという病気である。何らかの原因で性ホルモンが早い時期から盛んに分泌されるようになり、低身長や嫌がらせの原因にもなることがある。小学二年生にしてすでに女性らしい体つきをしていた私は、「自分は他の子と違う」と不安を抱いていたし、そうやって周りとは比べる自分が何より嫌いだった。

そんな体の変化を受けて、母と一緒に病院へ行き、治療を受けた。リュープリンという性ホルモンの分泌を抑える薬を注射し、思春期の進行を遅らせるのだ。私は小二から始めて約四年間、治療を受けていた。

この治療はお金がかかる。月に一回、大きな総合病院でリュープリン注射と尿検査、三か月に一回のレントゲン検査と血液検査があった。他にも不定期にお腹のエコー検査をしたり、点滴を受けたりと様々だった。リュープリンは一瓶約二万八千円、一回で二瓶を注射していたので、ひと月に約五万六千円はかかる。四年間では約二百七十万円だ。その他検査にかかるお金を含めると、約三百万円にもなる。当時の父と母は、この金額に治療をあきらめようと思ったそうだ。

今、私は中学三年生だ。人より低い身長も体つきも含め、自分のことを大切にしたいと思えるようになった。治療を受け、だんだんと自分に自信がついて、様々なことに挑戦できている。

治療費は、医療費助成制度で大部分がまかなわれていたそうだ。本来私の両親が負担するはずだった三百万円を、国中の人々が少しずつ出した税金でまかなってくれた。私だけではない。あの総合病院には、たくさんの人がいた。待合室はいつも人であふれていた。そしてその大勢が、税金によって高額な医療費のかかる治療を受けることができ、今を明るく生きている。

当時の私に、医療費助成制度が自信と未来をくれたように思う。税金がなければ今の自分には出会えなかった。ポジティブな考え方で毎日を過ごすことはできなかった。私たちが国にあずけた税金は、明るい未来の支えになる。様々な人の優しさが形となって、誰かの未来をつくりだす。その未来は、優しさからできた明るい未来だ。

私もその優しさの一部となって、自分の、日本の未来を明るく照らしたい。納税を通して、誰かに自分の優しさを届けたいと思う。未来に向かってできることをする。そんな考え方が、この先納税を通してもっと広がってほしい。

最期の願いを叶えるために

調布市立第六中学校 3 年 市川 みらい

今年 3 月、祖父は最期の願いを叶え、天国へと旅立った。

祖父は 2 年前に末期がんの宣告を受け、余命がわずかであると知らされた。祖父は「大好きな自宅で大往生したい」それが最期の願いだと言っていた。そのため、自宅でがんの苦痛を和らげるための「緩和ケア」を受けながら残りの日々を過ごすこととなった。祖父母の家に来たケアマネージャーさんが、住宅医療も介護サービスも、税金で大部分をカバーできることを教えてくれた。だんだん不自由になってくる体を支える車イスや電動ベッド手すりのレンタル。介護ヘルパーさんの処置など体だけでなく、精神面も支えてくれるサービスに年金で暮らす祖父母はとても安心していった。自宅で治療と介護が受けられることで、祖父は一番の楽しみ祖母の手料理を味わうことができた。2021 年 5 月、祖父の誕生日には毎年恒例の庭でのバーベキューをすることもできた。祖父は少ししか食べていなかったが、とても楽しそうだった。車イスを使って公園を散策したり、ケアマネージャーさんと話したりする祖父はいつも穏やかで幸せそうで、その光景が私は好きだった。2022 年 3 月、祖父は大好きな自宅で眠るように息をひきとった。初めて家族を看取った私は目から涙があふれて止まらなかった。祖母は

「介護・医療サービスの助けがあったからお父さんの願いを叶えてあげられた。後悔のない見送りができた。」と感謝していた。

私はこれまで税金について深く考えたことがなかった。納税が「国民の三大義務」の一つと学んではいたが、なぜ納税は義務になるほど大切なのだろうか。今回、改めて税金について調べてみて分かったことは、税金は国民が安心して暮らせるための目に見えない支えであるということだ。

私たちが納めた税金が最も多く使われているのが、医療や介護、福祉などに使われる「社会保障関係費」だ。税金の 33.7%が使われている。

世界には祖父のように突然、病気の宣告をされる人もいるし、急に事故に遭い、体が不自由になってしまう人もいる。このように人生は何が起こるか分からない。そんな時、医療や介護サービスを受けると、とてもお金がかかる。祖父は何度も手術を受けていて、その手術代は 100 万円を超えることもあった。しかし、「高額療養費制度」という一定額以上の医療費を国が支給してくれる制度のおかげで、10 万以内の出費で済んだという。

税金がなかったら病気になった時「お金がないから治療できない」という人が出て悲しい社会になってしまうと思う。私たち一人一人が納めた税金は誰かを助けている。目には見えないけれど税金はみんなの助け合いの心が集まったものだ実感した。これからは目に見えない税金に感謝して暮らしていきたい。

家族の危機を救ってくれた税金

川崎市立橘中学校3年 奈良野 凌央

二〇二〇年三月、一人暮らしの祖父に膀胱がんが発覚し、五月、七月と二度の手術を行うことになった。新型コロナウイルスの感染拡大で緊急事態宣言が発令、外出が制限されていた頃だった。手術日の立ち会いは母一人に限定され、入院中も家族が見舞いに行くことができなかった。二度目の手術を行う為、大きな病院に移る前に、母は看護師の方から「今のうちに地域包括支援センターへ連絡を取って、退院後の生活について相談しておいてはいかがですか。力になってくれますよ。」と言われたそうだ。

地域包括支援センターは、高齢者の暮らしを地域でサポートしてくれる施設だ。介護・医療・保健・福祉それぞれの専門知識を持った職員の方が、外部機関とも連携を取り機能している。他県への移動が難しい中で、初めて介護に直面した私たち家族の相談に丁寧に対応してくれたことが心強くありがたかった。

二度の手術を終え、高齢の祖父は緩和ケアをすることになった。在宅医療をお願いした病院の居宅介護支援事業所に勤めている介護支援専門員の方が、今まで連絡を取っていた地域包括支援センターの方から引き継ぎ、ケアプランを作成してくれた。緊急時にコンタクトが取れるよう、二十四時間対応での医療活動だけでなく、現在は祖父の家に週一回、看護師の方が様子を見に訪問してくれている。隔週で病院の先生も診察に来てくださって、他愛のない会話で、祖父を精神的な面でも支えてくれている。祖父とはよく電話をするが、毎週の診察で安心して過ごせているのが分かり、元気を取り戻しているように感じる。

今年の夏、新型コロナウイルス第七波の影響で感染者数が過去最多となっており、日本は危険な状況にある。その中で、祖父が他県で一人で暮らすことができているのも、多くの公的サービスの支援によるものだと思う。祖父の介護支援を通じて、より税金を身近に感じ、それについて深く考えるようになった。

三年後には、日本人の五人に一人が七十五歳以上、三人に一人が六十五歳以上になるという、「二〇二五年問題」も提唱されている。少子高齢化や厳しい財政状況の中、豊かで安心して暮らせる為の社会保障が今後とも必要になると思う。税金は搾取される認識が強くあるが、高齢者も幸せに生活できているのは国民の税で賄われる社会保障制度のおかげである。支え合いに納税は欠かせないので私たちの生活と密接な関係にあり、その恩恵を今回の経験で強く実感した。持続可能な社会を目指す為、税の果たす様々な役割について中学生の自分が情報を発信していくことは難しいだろう。しかし、その一歩として税金に関する知識を蓄えた上で、税の在り方について考え、日本の姿を見つめることが将来を担っていく世代の一人としての義務だと感じた。

株の税について

藤沢市立羽鳥中学校3年 三浦 悠

私は、昨年から将来的に向けて有効的にお金を増やすためにお年玉やお小遣いを貯めて株式投資をお試しで始めている。通常であれば利益に対して、約二割の税金を徴収されるが私はジュニアNISAと呼ばれる将来に向けた資産運用のための制度を利用している。この制度は0歳から十九歳の未成年者が口座開設でき、年間八十万まで投資が可能で配当金や売買益を非課税で受け取ることができる。私はこのジュニアNISAの制度を使って少しずつ株の取引をし始めた。そのため、今年の初旬にニュースで流れていた、岸田総理の金融所得税の強化する考えを示したことでマーケット関係者の間では「岸田ショック」と言われるような賛否両論な見方が生じたことを知った。その発言の内容は、もともと株の売買に利益が出た場合に、二十・三一五%の税金がかかっていたが、さらに五%上げるという考えであった。個人的には、貯めているお小遣いやお年玉などを貴重な資金を使ってチャレンジしているリスクがあるため、悪いニュースだとしか感じなかった。私はこの株の税金についてより考える必要があると思った。

株は必ず上がるというわけでもないし、色々調べたりもするし、リスクや勇気を持って投資している。また、株主となり企業に資本参加するという社会的サポートでもある。さらに、売却益の中に復興特別所得税が含まれているのは、良い点だと思っている。今まで政府がNISA制度などで資産運用を推進したり、今後においても、学校での金融教育を推進するという指針を示しているのにも関わらず、このような発言があると株式投資をする人自体は結局増えるどころか減少したり、さらに、国内だけではなく、外国人投資家も日本市場から遠ざかってしまうのではないかと心配だ。少子高齢社会で日本は人口が減り、国の財源自体の確保が難しくなるのは目に見えている。今ある仕組みの中で、どこから財源を確保するというだけではない、根本的な変革を国のリーダーにはしてほしい。長期的視野で思い切った子育て支援や新しい産業を国内から生み出す仕組みこそが必要だ。でなければ、日本や僕ら若者の未来は真っ暗だ。日本に沈没してほしくない。

家族が利用している動画や音楽、映画などのサブスクリプションサービス、ネット通販のほとんどが米国サービスだ。そのように日本も日本国内の企業やサービスを育てて、国内だけでなく世界中から日本にお金が回ってくれば、企業から法人税も増えると思う。政府やリーダーが腹をくくって覚悟を決めて、最後の最後のチャレンジをすることがこの国の税を考える上での一番の解決策だと思う。

「ありがとう」これが約三年前から、私の税金に対しての気持ちだ。私には現在三歳の障害をもった従弟がいる。母親の胎内では順調に育っていたのだが、生まれるときに呼吸を上手くすることができず、脳に酸素が届かなかった。幸いにも心臓や肺は無事だったが、脳へは大きく影響したため、今でも口から食事をすることもできなければ、話すことも、歩くこともできない。多少は目が見えたり、耳も聞こえたりして、笑うような反応はあるが、よく理解できているのか分からない。でも、私にとってとても大切な存在であることは事実である。

従弟はそのため、胃から直接液体の栄養を点滴で摂ったり、毎日のようにデイケアに通所している。また、急に熱を出したり、入院したりすることも度々ある。相当なお金もかかっているはずだ。私は不思議に思っ、そのお金について母に聞いてみた。すると、国が援助をしてくれていると知った。そして、そのお金は税金から成り立っているということも。

私は興味を持って、税金について調べてみた。そしたら、税金には「事業税」や「贈与税」、「住民税」などというものがあり、今まで聞いたことのない税金が数多くあって驚いた。その上、普段気にも留めないところで税金との関わりがあることを学んだ。私は消費税や医療費の援助ぐらいしか身近に感じたことがなかった。しかし、こんなにもたくさんの税金が私たちの暮らしを支え、私のように大切な存在を助けてくれていたことを知り、感謝をするべきだと思った。

三年前、消費税が八%から十%となる「増税」が行われた。これに反対する声も多く、私自身も自分のお金が減ることに対して不満も感じた。だけど、今となっては必要だったことではないかと思う。税金の多くは「社会保障費」というものに使われる。社会保障とは、医療、年金、介護などを指す。つまり、私の従弟もこれによって生活の経済面が支援されているということだ。税金が増えることで不安なこともあるだろう。しかし、税金によって、人々の暮らしを支え、命を救うことができればどんなに嬉しいことだろう。一人ひとりが税金の使い道をしっかり理解することができれば、人々の税金を納めることへの姿勢は前向きに変わってくるのではないかと思う。

私たちが当たり前生きていくためには、税金が欠かせない。私も大人になっていくうちにもっと多くの税金に触れていこう。そのときには、しっかりと税金の使い道を理解し、建設的に納めたいと思う。医療、障害介護が必要な人も含め、社会全体として人々が暮らしやすいために。

税金が支える「復興」と「復幸」

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校3年 向出 英ノ介

その日の雨は、「部屋の窓が割れてしまう！」そんな心配が募る強さだった。建物から外に出ようとしても、しっかり踏み込まないと雨の勢いで押し戻されてしまうほどの豪雨は、僕の故郷を被災地に変えた。

石川県加賀地方に激しい雨が降った。今年八月。僕が暮らす小松市は、降水量が観測史上最大を記録し、市内の住宅約一五〇〇棟が浸水、一級河川である「梯川」は半世紀ぶりに氾濫して地区が泥の海の様になった所もあり、警戒レベルが最も高い「緊急安全確保」が初めて発令された。中でも甚大な被害を受けた「中海町」は、小学生の時にバスケの練習で毎週のように通った思い入れのある町だ。

被災後、僕はボランティアに参加するため中海町を訪ねた。「梯川」と支流の「滓上川」が合流するこの町では、川から溢れた水が稲を倒し、田んぼの中にはあるはずのない車が浮いていた。安全に留意して川に近づくと、道路や堤防は崩れ、ガードレールは原型を留めておらず、濁流が水しぶきをあげながら倒木を飲み込んでいた。流れついた材木を運んでみると、水を含んだその重さに驚いた。中海町の町長は、記録的な大雨で、川の氾濫が起こりやすくなったことを危惧していた。上流から土砂や岩が運ばれ、川底が一メートルほど上がってしまったからだ。町長は、

「今後、少量の雨でも氾濫水位まで上がってしまう。九月は台風シーズンなので、早く川底をさらってもらいたい。」
と悲痛な思いを語っていた。

再建には、多くのお金がかかる。その費用はどう賄われるのかと考えた時に、「税金」が浮かんできた。東日本大震災では、防潮堤や住宅・道路などの整備に「復興予算」が充てられ、そのおよそ四割は所得税や住民税に上乗せされた「復興増税」だ。中海町はどう復旧を進めていくのか。市役所の道路河川課に電話をして聞いてみることにした。担当者は、今回、消費税や所得税などを活用する「災害復旧事業費」という予算を使うことを教えてくれた。川底にたまった土砂や岩を撤去する作業は緊急性が高いため、すでに重機や資材・人材が現場に投入されていた。地域の安心安全を一刻も早く取り戻そうと、税金が生かされているのだ。南加賀土木総合事務所によると、今後は川幅を広げたり、堤防を高くするなどの計画も立てられていると言う。

これまでは、税金が地域の役に立っているという実感があまり湧かなかった。しかし、たったの一日で見慣れた風景が様変わりするほどの被害を受けた僕の地元を、税金が助けてくれることを学んだ。税金は、町を立て直す「復興」だけでなく、住民の心まで立て直す「復幸」のための大切な資金だ。小松市のインフラ整備に継続して取り組んでもらえるよう、また、自分の記憶も風化させないよう、「税金」を支払うことで、被災者の「復幸」に寄り添える大人になりたい。

森林環境税、森林環境譲与税という税金を耳にしたことがあるだろうか。消費税、住民税といった税金は日頃耳にすることはあるが、このような税金を納めることを自覚しているのだろうか。

森林環境税は、令和 6 年度から国税として個人住民税に年額千円上乗せされて、市町村から徴収される。これは、東日本大震災の復興税が終わった後に、そのまま継承される形になる。なぜ今「森林」なのか私は不思議に思った。調べて見ると、地球温暖化による昨今の山地災害の防止に向けた取り組みであることが分かった。また、森林環境税と対になっているのが、森林環境譲与税である。これは、令和元年度からスタートされており、間伐や人材育成、担い手の確保そして、木材利用の促進や普及啓発等の森林整備およびその促進に関する費用に充てることとされている。

私の曾祖母は山を持っている。先日、木が倒れかかっていたため、近隣の住宅に被害を及ぼす前に木を伐採してもらった。チェーンソーを使用して木を伐採していたが、私がイメージしていた切り方とは違っていた。このように、決められた伐採方法の基、指定された服装で伐採する必要があることに同時に驚きも感じた。危険と隣り合わせな職業に就きたいと考える若者はどのくらいいるのだろうか。

森林について調べて見ると、全国森林組合連合会が取り組んでいる「緑の雇用」という事業があった。林業の担い手確保の一環で、未経験者でもフォレストワーカーを目指すために、必要な技術を学び、講習や研修を支援してくれる。日本は世界屈指の森林王国である。そして、森林は、二酸化炭素の呼吸源でもあり、地球温暖化防止にも大きく貢献している。今、戦後に植林された木が育ち、利用できる段階にきているが、森林の手入れが遅れがちになっている。よって、森林で働く担い手確保が必要なのである。

自然災害は突然やってくる。間伐がされていない山の地表は日光が届かず、草木の根が張らないため、土が痩せてしまう。このような状況で大雨や台風などが発生した場合、根が水を吸いきれず土砂崩れが発生しやすくなってしまう。先日、大雨の影響で、福井県南越前町が未曾有なる被害を被った。嶺北と嶺南が遮断されるという大被害である。父の友人宅も床下浸水になり、車も水没してしまった。父は、被災した住宅に手伝いに行った。一瞬にして奪われた、建物、家財、そして車。明日からの希望も無くなるくらいひどい情景だったと言っていた。このような、異常気象により土砂崩れが起きないためにも、森林整備は急がれている問題だ。そのためにも、森林環境譲与税を、林業従事者や林業の育成事業に活用してほしいと思った。林業は、日本にとっても、なくてはならない職業の一つであることを考えさせられた。

税金は希望のバトン

岐阜市立岐阜中央中学校 3 年 杉村 蓮里

「無償の教科書をもらう子どもたち」という白黒写真、社会の調べ学習をしている中で見つけた。先生から教科書を手渡されて嬉しそうな男の子。後ろにならぶ女の子もじっと教卓の上に積まれた教科書を見つめている。一九六七年の古い写真だが、その光景にはなじみがある。令和のこの時代も毎年四月新年度スタート時には同じ光景が見られるからだ。しかし教科書をいただくときの中学生の表情はどうだろう。当たり前のように受け取っているではないか。教科書無償配布は五十年ほど続いている。もし個人で教科書を買わなくてはいけなかったら、その半世紀の間に平等に教育が受けられなかったこどもたちはどれほどいただろうと思う。教科書は大人が納める税金でまかなわれていることを知ったのは、教科書の裏に小さく書かれた、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」という文章だ。教科書無償配布は、差別をなくし貧困問題に取り組む第一歩にもなったと思う。こども一人一人を大切にするための税金なのだった。無償の教科書はとても有難い。感謝の気持ちをもって大切に教科書を使いたいと思う。

小学六年生の時、コロナ感染予防のため緊急事態宣言が出され突然休校になった。卒業式目前だった。そしてしばらく休校は続き、中学校の入学式は六月になった。夢を叶える希望に満ちた中学校生活スタートのはずだったが不安に包まれてしまった。そんな中、岐阜市では、市内の小中学校と特別支援学校の生徒全員にタブレットを配布してくださった。高価なものを一人一台、端末の数は市内で約三万二千台だったと知って驚いた。待たずして、すぐ用意してくださった。税金のおかげで私たちに希望の光が差した。教科書が初めて無償配布された時の子どもたちと同じ気持ちだと思う。子ども一人に一台タブレットを個人で準備しなくてはならなかったら、かなりの負担になったことだろう。タブレットのおかげでコロナ感染が拡大した場合も家に持ち帰りオンライン学習に活用し、映像によって先生や友達に会うことができる。普段の授業や学校生活もより充実した。学びを保つことができるのは、すぐにタブレットを準備してくださった行政の方々、税金のおかげだと実感した。

白黒写真のこどもたちは大人になって税金を納め、現在のこどもたちを支えている。そして支えられて私たちは勉強に励み成長していく。次は私たちが大人になって未来の社会を作る。税金は希望のバトンだ。私たちが嬉しそうにタブレットを受け取っている写真も将来、社会科資料集に掲載されることだろう。

「幸せな生活を支える税金」

名古屋市立大曾根中学校3年 宮本 莉瑠

私の家は母子家庭なので母と私の二人暮らしです。私は中学三年生で、働いているのは母だけなので一般的な家庭と比べると少し貧しいかもしれません。ですが、毎日三食お腹いっぱい食べることもできて、学校に行って授業を受け友達と楽しく学校生活を送ることができています。今、私は毎日とても幸せな気持ちで過ごしていますが、なぜ母子家庭の私が父親のいる家庭と同様に何不自由なく生活ができるのか疑問に思ったことがあります。そこで私は母に家のお金の問題について思いきって聞いてみることにしました。

話を聞いていくと、私の生活は税金によって支えられていることがわかりました。私が学校に行くためにはたくさんのお金がかかると思います。しかし、市からの税金の一部が使われている就学援助をうけ、今のように学校へ行けているのだと母が教えてくれました。他にも、税金によってがんの検診や予防接種が無料になったりなど、日々の健康面でも支えられているということがわかりました。

また、私は母子家庭や父子家庭の子供たちが集まる学習会に参加しています。そこでは中学生・高校生が大人のサポーターさんに勉強を教えてもらったり、みんなで楽しく遊んだりしています。私はそこで、私と同じような環境で育った友達ができ、今まで怖くて誰にも話すことのできなかった母子家庭になる前の話をサポーターさんやそこでできた友達に打ち明けることができました。共感してくれる人がいて、私は「私だけではなかったんだ。」を自分の過去の経験としっかり向きあうことができました。そんな私を安心させてくれる唯一の場所に私は無料で参加しています。学習会の会場では、軽食もでるし、トランプなどのカードゲームもあるし、会場を借りるためのお金も必要だと思いました。不思議に思いサポーターさんに聞いてみると、これにも税金の一部が使われていることがわかりました。

私はこれまで当たり前のように健康で過ごしたり、毎日学校に行けたり、ましてや、自分のつらかった過去を受け入れてくれた場所も税金で支えられていることを知りました。これまで、自分とは無縁だと思っていた税金と、こんなにも関わっていたのかと驚きました。私には自分と似たような環境で育ってきて、悩みを抱えている子供たちを一人でも多く助けるという夢があります。その夢を叶えるためにも、一人一人が税金を納めることが大切なのだとわかりました。私が働いて稼げるようになったら、恩を返す気持ちで税金を納めたいと思いました。

愛の中に産まれる

名古屋市立はとり中学校2年 樋口 暖心

私の両親は、私のことをとても愛している。私の写真をスマホの待ち受け画面に設定するのは当たり前だし、毎晩、寝る前には「ハグをさせて」と迫ってくる。私も、もう十三歳になったので、さすがに恥ずかしい気持ちがあり、小学生の頃のように全身で愛情を返すことに二の足を踏むと、二人は少ししょんぼりしてしまう。

父と母は結婚当初、医師から「子どもを授かりづらい」と言われていた。そう言われた時はショックだったようだが、絶対に子どもが欲しかった二人は、迷わずに不妊治療を決め、治療と努力の結果、私が産まれた。妊娠できるならと、一風変わったご神体が祀られた、子宝成就で有名な神社にお参りに行ったと話を聞いたが、やはり医師の診察、診断、指導のもと行われた治療のおかげで授かることができたと言っている。無事に産まれた私を、腕に抱けた瞬間はそれまでの苦労を忘れてしまうほどに嬉しかったと、二人は今でも涙ぐんで話す。

不妊治療の大変さは治療だけではなく、治療に掛かるお金も相当なものだと、以前にテレビで観たことがある。総額で数十万から数百万も掛かる場合があると言っていて、まさに目玉が飛び出るくらい驚きの声を上げたのを覚えている。しかし、その状況に変化があったようだ。二〇二二年四月から、不妊治療が保険の適用対象になったのだ。前述の通り治療には、かなりの金額が必要だった為、子どもが欲しくても諦めないといけなかった人も沢山いたと思う。だけど、これからは窓口での支払いが原則三割負担で済むのだ。これにより経済的理由から治療に踏み切れなかった人達も、前向きに考えることができる。

医療費と言えば、海外では高額になることが珍しくないが、日本では高い水準の医療が保険適用で受けられている。さらには、私が病院に掛かった際にはお金を支払っていない。「子ども医療費助成制度」という制度により私の住む名古屋市では十八歳に到達した年度末まで医療費が無料なのだ。これらの制度は全て、私達が払っている税金によって成り立っている。私はまだ自らの力でお金を稼いでいないので、直接的に納税はしていないけれど、お小遣いで本を買えば消費税を払う。これも納税だ。正直に言うと、今までは「消費税の分だけ安くなっていたら嬉しいけどなあ」と少し邪魔臭く思っていたが、病気や怪我で大変な時に、社会保障制度の恩恵を受けていると考ええると、未来の自分に安心をプレゼントしているような気になれる。

父と母も、不妊治療の保険適用化をとても喜んでいる。妊娠、出産を望む夫婦にとって、金銭的支援は、心の支えでもあると知っているからだ。私はこのニュースを通して、日本の社会保障制度に誇りを持てるようになった。それは同時に、父と母の子どもに産まれた喜びでもある。私も二人のことを愛している。

私は、まだ働いたことがないので、税金を納めたことがない。しかし、これまで見聞きした内容から分かることは、世の中の人々は税金を納めたくないということだ。節税や脱税といった十分耳なじみのある言葉も人々が税を少しでも納めたくない気持ちの表れであろう。「喜税」のような言葉が存在しないことからその証拠だと思う。このように、私のこれまでの人生で、税金というもののイメージは「嫌われ者」であった。

しかし、今までに一度だけ「税金を納めたい」と言っている人を見たことがある。それは寝たきりになっている障害がある人のテレビドキュメンタリーだった。寝たきりなので働いてお給料をもらった経験がないため、当然税金を納めた経験がない。その人が将来の目標を尋ねられたときの答えが「働いて税金を納めてみたい」というものだった。私の税金のイメージとは真逆の回答が、私の中に新鮮な驚きを呼び起こした。その番組で描かれていたのは「人の役に立ちたい」という障害を持つ当事者の切実な思いであった。自分の存在意義を他者の役に立つということに見出したい。それが重い障害があっても、介護されたり助けてもらったりするだけでなく、自分も働きたいという願望を抱く大きな理由であった。そして、人の役に立つということを単純明快に証明する手段の一つが税金を納めるということなのだ。

私は、この当事者の思いを目の当たりにして、「はたらく」ということに対する新たな視点を得ることができた。これまで仕事をして働くということは「嫌だけどお金のためにすること」だったり、夢を叶えた場合では、「好きなことをしてお金を稼ぐこと」だと認識してきた。しかし、簡単には就労することのできないほどの障害を抱えた人にとって、「働く」ということは、自分の存在によって人に喜んでもらうことであり、その他者の喜びを自分の幸せとして感じることなのだ。そして他者の役に立っていることを端的に認識することができる「しるし」が納税なのである。国家というのは国民の集合体なのであるから、国家に対して税金を納めるということは国民に貢献していることと同義だからだ。もちろん、だからといって納税していない人は他者の役に立っていないというわけではない。納税はあくまで「自分が役に立っている」ことを認識するための手段の一つに過ぎないからだ。ただ、納税する本人にとって、非常に完結明快な手段なのが納税の長所である。

働くことによって社会とつながり、人に喜んでもらい、そのことを納税という手段で認識できて自分も幸せになる。なんだかすぐたくなるようなキレイごとに聞こえるが、でもこれを厳然たる事実として感じている人がいるのだ。何とも素敵な感覚ではないか。私も将来仕事をして納税するときには、このような気持ちで臨みたいものである。

日本は幸せな国だと思う。そして、今回作文を書くのにあたって、この住みよい環境を支えているのが税金だということを知った。

例えば、教材の無償提供。ゴミの処理や警察・消防などの公共サービスの充実。教育も当たり前のように受けられ、道路や交通機関も整備されている。

このように、普段の生活は私たちの納める税金によって支えられているといえるだろう。

しかし、日本では税率が上がることに對して不満に思う人が多いように感じる。中にはお金を持っても滞納する人もいる。

ではなぜ、日本では様々なサービスが充実しているのにも関わらず、増税に對してあまり良い印象が持たれていないのだろうか。

そこで、消費税が二十四%と世界的に見てもかなり高いのに、「世界幸福度ランキング」で五年連続一位を獲得しているフィンランドについて調べてみた。

消費税が二十四%と聞くと今の日本の消費税の約二・五倍で不満を持つ人が多いように感じるが、フィンランド人のおよそ八割が高税を納めることに納得しているようだ。

フィンランドでは、大学までの学費や医療費が無料で失業保険や子育て支援が充実しているうえ、国民に税金の使い道が明確に示されているので、負担が大きくてもメリットが感じやすくなっている。なので、負担率が高くても不満が出にくいと思われる。

では、どうすればフィンランドのようにみんなが税金を気持ちよく払えるのか考えてみた。

まずは税金の使い道や増税する理由を国民が知れるようにすることだ。こうすることによって、税金の使途が透明化し、安心して税金を納めることができると思う。そのためには、国が税金について国民に広く知ってもらうように取り組む必要がある。だが、何よりも大切なのは私たち自らが税金について積極的に知ろうとすることだと思う。

「これ以上の増税はきつい。」「税金なんかなくなればいいのに。」といった不満を口にする前に、なぜ今回増税が行われたのか、何のために税金を納めなければならないのか、自分なりに考え、調べる。このことによって、税金を納めることに對して前向きになり、これまで自分自身が税金によって受けてきた恩恵に改めて気付くことができるのではないだろうか。

今回税金について調べて、国と国民が信頼関係をより深めていくことで、誰もが日本は幸せな国だと言えるような社会になればいいなと思った。

私の中学校では、二学期から公民の授業が本格的に始まる。責任と義務を果たし、社会に貢献できるような大人になるために税金についてしっかり学んでいきたい。

おいしい？ふるさと納税

同志社女子中学校3年 齋喜 亜佳里

毎月定期便でお米が届き、肉やハンバーグ、いくらなどが冷凍庫に保存してある。北海道へスキーに行った時は、スキー場で割引券を使った。これらは全てふるさと納税のお礼の品である。

故郷ではなくても好きな自治体を選んで寄附をすることができる制度、ふるさと納税。手続きをすれば、実質自己負担額二千円のみで、その地域の名産品などをもらえる、とてもうれしい制度である。つまり、たった二千円で米や肉を食べられ、スキーのリフトに乗ることができたということだ。

なぜ、こんなにおいしい思いができたのだろうか？

ふるさと納税とは、二〇〇八年五月から開始された、地方と大都市の格差是正・人口減少地域における税収減少対応・地方創生を主目的とした寄附金税制の一つである。手続きをすると、一定額の所得税の還付や住民税の控除が受けられる。さらに、寄附のお礼として、その地域の農産物や工場がある企業の製品、その自治体で使える旅行券・宿泊券などが送られてくる。そうすることで、農産物などの販路を広げたり、雇用を拡大することにもつながっている。

このお得感が話題となり年々受入額、受入件数は共に大幅に増加している。地方では税収が増え、寄附する側は寄附先を自由に選べて、好きなお礼の品をもらうことができる。Win-Winの関係に見えるが、本当にそうなのだろうか。実際には、地方を応援するという意識よりもどのお礼の品を欲しいか、という点を重視しているのではないか。その結果、自治体間でのお礼品競争が激化し、大きな格差が生じることにもなった。

さらに、本来納められるはずであった自分が住んでいる自治体では税収が減少してしまい、東京などの都市部では、行政サービスの低下につながりかねないという危惧されている。

おいしい特産品を食べることができても、日々の生活の基盤となる行政サービスを受けられなくなっては、元も子もない。

もちろん、地方と都市部の格差是正も必要なことであり、それぞれの自治体がアイデアを出して魅力的な特産品を紹介することも大事なことだと思う。

しかし税とは社会保障や公的サービスを受けるための財源であり、寄附とは違う。

日本は欧米と比べて「寄附」の文化が根付いていない。今後は、ふるさと納税の制度を利用しつつ、地方にも興味や関心を持って応援し、地方の抱える問題を理解しなければならない。

ふるさと納税ができた二〇〇八年は私が生まれた年であり、来年で十五年になる。何が「おいしい？」のかということを納税者自身がきちんと理解して、本来の目的を再認識する時になっているのだと思う。

今回税の作文を書くにあたり、数年前父が私に話してくれた言葉を思い出した。私の父が仕事でカンボジアを訪れた話だ。父が世界遺産のアンコール・ワットを訪れると、小さい子どもが手作りのキーホルダーを見せながら、日本語で「こんにちは。買って。買って。お願いします。」と話しかけてきた。父は日本語が話せることに驚愕した。その子どもは日本語だけではなく、英語、フランス語、イタリア語、中国語などで観光客に話しかけていた。この子は10カ国語を話せるという。現地のガイドの方の話によると、家計を助けるために観光客を相手に商売しているという。私は、この父の話聞いて衝撃を受けた。こんな小さな子どもが働き、仕事のために語学を独学で勉強するとは、日本の子どもたちはどれほど恵まれているのだろうか。日本では中学を修了するまでは義務教育であり、税金のおかげで誰もが学校に通うことができる。こんな当たり前のことが、当たり前でない国があることに、私は改めて税の大切さを学んだ。

日本は国として政府開発援助（ODA）を行っている。例えば、道路の舗装、学校の設立、医療支援などがあげられる。こういった支援の原資は、私たち日本人が納めた税金や公債だ。なぜ他の国のために自分達の大切な税金が使われているのか、疑問に思った。しかし東日本大震災のとき、日本は世界中の国からあらゆる支援を受けた。中には、一年分の国家予算の半分もの寄付をしてくれた国もある。だから、日本が他の国のために税金を使うことは必然である。税金は日本と他の国とを繋ぐ大事な役割であるといえる。

日本は現在、カンボジアの最重要課題である地雷や不発弾の撤去を支援している。カンボジアには、地雷や不発弾が世界で一番埋まっている。そのため、地雷に巻き込まれて命を落とす被害が後を立たない。カンボジアの国民が一刻も早く安心して暮らせる日々を送るためにも、日本だけではなくもっと世界の国が協力して支援する仕組みができれば良いと私は考える。これからも日本は、世界中から受けた恩恵を忘れず他の国の支援に積極的に税金を使ってほしい。

私は将来社会に出て働くようになったらきちんと税金を納め、国民の三大義務の一つである納税の義務を果たしたい。そして、私が納めた税金が少しでも困っている国の援助に使われてほしい。私もあと三年で選挙権を持つことができる。実際に税金の使い道を決めるのは、国の代表である国会議員だ。つまり、ちゃんとした国会議員を選ぶためにも、一人一人がもっと税金に関心を持つべきだ。そう考えると、選挙に行ききちんと投票する事は私達国民の大切な役割である。

学べることのありがたみ

枚方市立第四中学校3年 有田 果乃子

毎日、仲間と切磋琢磨し勉強に取り組めることがあたりまえだと思っていませんか。私たち中学生の年間教育費は、一人あたり約百万円以上。三年間で三百万円以上にもなります。日本では、義務教育である小・中学校の九年間、税金のおかげで無償で授業を受けることができます。これはとても幸せなことであり、決してあたりまえではないのです。

二〇一四年にノーベル平和賞を受賞された、パキスタン出身のマララ・ユスフザイさんという方がいます。彼女の住むパキスタン北部のスイートでは、武装勢力による自爆テロや襲撃が繰り返されていました。そのため子どもたちは学校へ行きたくても生活のために働かなければならず、十分な教育を受けることが出来ませんでした。そんな中、「自由に学校へ通いたい」という思いを訴え続けたのがマララさんだったのです。

日本の子どもたちに「勉強は好きですか。」と質問しても、「好き。」と答える子どもはあまり多くないと思います。しかし、パキスタンに住むある少女は、この問いに対し「大好き。」と即答したそうです。私はこの話をきいて、私たちがあたりまえのように学校へ通い勉強できているから気付かないだけで、自由に学ぶことが出来る場があるということは、とても幸せなことなんだと感じました。

子どもたち一人一人に配られる教科書、全員分きれいに並べられた机や椅子、快適に学習できるよう様々な設備が整った教室など、教育のために年間五兆円以上の税金が使われています。こんなに多くの税金は、どうして教育のために使われるのでしょうか。その答えは、教科書に書かれている「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」というメッセージに隠されていると思います。これから日本のリーダーとなっていく私たちへの期待をこめ、現在のリーダーである大人の方々が納めてくださった税金が、こうして形となって私たちの元へ届くのです。私はこのことから、教育に使われているたくさんの税金は、これからの日本をつくっていく私たちへの「投資」ではないかと考えました。

勉強をしたくても出来ない状況に置かれている人もいる中、こうして毎日勉強に取り組めることは、とてもありがたいことです。私たちは、税金に助けられながら教育を受けられるこの環境に、感謝しなければなりません。

私は今回教育に使われている税金のことや、外国の教育について調べたり、考えたりする中で、今後私たちがすべきことを二つ考えました。一つは、税金のおかげで使うことができる教科書や学校の物を大切にすることです。そしてもう一つは、私たちが税金を納める立場になったとき、未来の子どもたちへしっかり投資できる立派な大人になることです。そのために、学べるありがたみを感じ、様々なことに挑戦していきたいです。

明るい未来のために

加古川市立浜の宮中学校3年 毛利 優那

私たち中学生が税金と聞いて、正直ぱっと思ひ浮かぶのは、「消費税」くらいかもしれない。なぜなら日常生活の中で、私たちにも大きく関わっているからだ。今は、駄菓子一つにも税金がかかる。少ないお小遣いの中から支払うことになるのだから、消費税が上がるというニュースを聞くと、私にとっては一大事である。しかし、知らなかった。税金がこんなにも私たちに身近なもので、こんなにも日々助けられていたことを。税について調べるまでは。

「二年半、よく頑張ったね。お疲れ様でした。」

主治医にそう告げられ、この夏私は一つの区切りを迎えた。

真新しい制服に身を包み、二年前の春私は、市内の中学校に入学した。全てが新鮮で、少し大人になったという照れくささと、これから始まろうとする中学校生活に期待と、不安で胸がいっぱいだった。そんな中、私が一番気になっていたのが部活動。先輩方が、グラウンドで一生懸命汗を流している姿を見て、陸上部へ入部することに決めた。種目は投てき。身長が高いわけでもなく、一見小柄に見える私であったが、練習を重ねるたび、記録がどんどん伸びていき毎日の部活が楽しくて仕方なかった。いつも通り、シューズを片手にグラウンドへ向かい、アップを始めたその時、腰に違和感があることに気づいた。その違和感は日に日に強くなり、ある日歩くことさえも、できなくなった。母親に連れられ病院に行き、私に下された診断名は、「分離症。」MRIで詳しく調べると、腰二ヶ所にひびが入っていて、その日から八か月の運動停止をよぎなくされた。

「日に日に記録も伸びてきたのに、なんで…」

目の前が真っ暗になった。週に一度のリハビリと二週間に一度の診察、さらに高額なコルセット、今まで気にしたことはなかったが、先の見えない治療に、子供ながらに高額な医療費がかかるのではないかと心配していた。しかしその一部には税金が使われていることを知った。ほとんどの医療費は国が負担してくれているため、いざという時、救急車を利用してもお金がかかることはない。医療費だけでなく、教育費、生活環境費、都市の整備費など、私たちが生きていく中で普段気にしない、当たり前だったことのほとんどが、税金によって私たちの暮らしを支えてくれているということが分かった。一人一人ができる、わずかなことで救える命もあるだろう。

今は、私たち中学生には数百円にかかる消費税しか貢献できないが、それでも私たちができる大きな社会貢献の一つだと、私は思う。そして、大人になったときにはしっかりと税を納め、一人でも多くの人を支える社会人でありたい。これからの明るい未来のために。

教育は大事だ。

例えば、数学の問題に苦しんでいるとき、「ハッ!この問題はこういうことを問うているのか」とグンと問題の本質に迫ることがある。そして、この本質を捉える力は人生のあらゆる局面でそのパワーを発揮する。壁にぶち当たっても、壁の本質を見抜くことで、壁に勝つことができるからだ。そうやって、人は成長するのだ。勉強する理由はここにあると、今の私は考えている。

ただし、教育とは何も勉強に限ったことではなく、学校以外でも行われる。子供にお箸の正しい持ち方を教えることや、様々な芸術に触れさせて豊かな感受性を育むこともまた、教育だ。

つまり、人に物事を「教」えることによって人間を「育」てるのが教育であり、教育無くして安定した社会は無い。教育は社会の基盤なのだ。

では、教育はどのようにして成り立っているのか。税金である。税金で教科書を作り、学校を建て、教員を雇う。税金に支えられているのは公立学校だけではなく、私立学校にも補助金が投入されているそう。教育の重要性が窺える。教育施設は学校だけではない。図書館や博物館にも税金が使われていて、老若男女誰でも教養を得ることができる。家で赤ちゃんを育てる場合はどうだろうと思い調べてみると、子育てにおいてもやはり、児童手当や児童扶養手当をはじめとするあらゆる家庭の形に対応した給付金があった。子供の成長に税金が役立っていることは確かだ。

納税は義務であるが、義務というどうしても「無理やり、否応なしに」というようなマイナスのイメージが先行してしまう。しかし、納税することによって、教育ひいては人間の成長に貢献できるのだ。なんと魅力的なシステムだろうか。もっとも、税金の使い道は教育だけではないが、自分の納めた税が社会にプラスにはたらくことは確実に、世のため人のため自分のために、納税は必須だ。

「相続税はなんで払うんかわからへん」と母が言った。相続税とは、不動産や現金を相続した際に払わなくてはならない税である。私も、亡くなった方がせっかく遺したお金から税を徴収するなんておかしいと思い調べたところ、相続税は資産の再分配のためにあるということがわかった。すなわち、特定の人間や一族に財産が集中することを相続税によって防いでいるのである。相続税は別に理不尽ではなかった。私は自分の無知を恥じた。そして、「なぜ税金を払うのか」だけでなく「なぜ課税対象なのか」ということも理解すべきで、そうすればより納得して税金を納めることができるのではないかと思った。

私も大人になれば、今よりずっと多くの税金を納めるだろう。そしてそのとき思うだろう。「自分がここまで成長できたのは、家族と、先生と、友達と、税金のおかげだ」と。

鯨とともに生きる私たちと税

太地町立太地中学校 3 年 森本 健星

あるがままの豊かで美しい自然に囲まれる、和歌山県太地町。先代から現代に受け継がれてきた「くじら」と共に生きるこの町は今、堅実に前進している。

少し前に父が、太地町の今とこれからについて話してくれた。これまで「くじら」を中心とした観光に力を入れてきたが、数年前から、クジラの学術研究都市として「太地町くじらと自然公園のまちづくり」構想を推進しているというのだ。最近、町の中で変わっていくところを見るたびに不思議に思っていたが、そういうことだったのかと理解した。続けて父は話した。このように町の事業を成り立たせるためには、多くの人の支えが必要だと。

多くの人の支えとはどういうことなのか、その時、僕が真っ先に思い浮かんだのが「税金」だった。僕自身、これまで税金といえば、消費税や所得税、たばこ税といった「取られる税」ばかりイメージしがちであった。それは、自分や身のまわりの人達が税金を納めるところは多く目にしてきたが、その税金がいつ、どこで、どのように使われているのかを、意識して見ようとしてこなかったからだと思う。

父の話を聞いて以来、この町の税金の「使い道」について考えるようになった。あらゆるところに設置されたベンチや街灯、綺麗に舗装された道路、鯨の学術研究都市の主要施設である日本鯨類研究所の支所の建設、湾での鯨類飼育の環境整備。町を見渡せば、諸所に税金が使われている。税金が社会保障に多く使われているのはよく耳にするが、ここまで税の力が行き届いているというのには感銘を受けた。税の使い道を少し意識してみるだけでも、至る所でありがたみを感じる。

父の話を聞いてから、この町の伝統を守りつつ、これからの事業を展開していくためには、多くの人の支え、「税」が大切だと考えるようになった。「太地町くじらと自然公園のまちづくり」を進めていくためには、これからも多くの時間と協力が必要になる。これまで何気なく支払ってきた消費税も、この町に限らず、日本のどこかで役立っているかもしれないと思うと今では誇らしく思える。

これまでの伝統とこれからの地域社会を守っていく税。くじらと共に生きるこの町で、日々税のありがたさに感謝し、地域に貢献できるような人になりたい。

どれにしようかなあ。ふるさと納税の返礼品を見るだけで、顔がにやけてくる。これも美味しそうだし、あっちもいいなあ。

ふるさと納税で寄付をすると、その自治体からお礼の品が届く。返礼品の種類も豊富だし、返礼品を見ているだけで特産品も分かり地理の勉強になる。

いつものようにふるさと納税のサイトを見てみると、「返礼品なし」の文字が目に入った。

「お母さん、『返礼品なし』のふるさと納税があるわ。」

「へえ、だったらそこに寄付したら。」

「えー、だって返礼品ないんよ。」

「いいじゃない。誰かの役に立てるんだったら。家族みんなで出し合い、寄付しようよ。ほら、お年玉の残りがあったでしょう。」

私は気の進まないまま、貯めていた千円札を出した。あーあ、千円あったらあのお菓子も買えたのになあ。

千円の後悔を忘れかけていたある日、学校から帰ると机の上に封筒が置いてあった。

町役場？ふるさと納税係？

中を見ると、町長さん直筆の手紙が入っていた。そこには寄付をしてくれたお礼に加えて、台風被害の復旧に活用させていただく、と書かれていた。

ふるさと納税を選ぶとき、「自分で決めなさい」と母に言われ。返礼品がないのなら、行ってみたい所にしようと綺麗な海の島を選んだっけ。その町役場からだ。町長さんの手紙には、島の透き通るような海の写真もそえられていた。

私は、その手紙を何度も読み返した。これまでもらったどの返礼品よりも、あったかい気持ちになった。納税をした自分が、ちょっぴり大人になれた気がした。

納税は国民の義務と習ったが、税金は思いやりの心ではないだろうか。自分が納めたお金が、誰かの支えになっている。誰かが笑顔になってくれる。

町長さんの心からのメッセージ。「美しい町の姿をお見せできるよう、全力で復興に取り組んでまいります。」

私もいつかこの島へ行き、綺麗になった海や自然と触れあいたい。そのときは、自分の税金が復興に貢献できたことを誇らしく思うだろう。

一人が納めるお金は少なくても、みんなで協力すれば大きな力になる。

誰かのためにお金を使うこと。それで一番嬉しくなるのは、きっと自分だ。相手が喜んでくれることで、自分の心が一番温まる。

私は次のふるさと納税に向け、お金を貯め始めた。買うお菓子を減らすかな。

「何に使うの？」と母に聞かれたが、「いいこと！」だけ言っておいた。貯金箱に貯まりつつある千円の使い道は、私以外誰も知らない。

税金に守られているもの

岡山県立岡山大安寺中等教育学校 3年 相川 煌

私の祖母は難病患者です。難病は治療方法が確立しておらず、長期の治療を必要とすることで大きな経済負担を強いられます。その中でも国が「難病の患者に対する医療等に関する法律」に基づいて医療費助成制度の対象としている難病は「指定難病」と呼ばれます。祖母はペースメーカーをつけているので、制度を受けることができ、受診などによる自己負担額は月額千円だけで済んでいます。これは税金によって賄われているおかげです。

私は税金について興味を持ち、調べてみました。使われている例として、学校や公園などの公共施設をつくるためや警察や救急、災害復興などなどと、数えきれないほどのものに使われているのだと知りました。そして同時に「私たちの生活はこんなにも税金によって支えられているんだな、税ってほんとに偉大だなあ。」と感じました。

税金を払っているのに、サービスを受けているという実感がわからないと言う人たちもいます。脱税したり、支払いをしない人もいます。もし、国民にこのような人が増え、税金がなくなってしまうたらどうなるのか考えてみました。まず警察を例にして考えてみます。警察がいないと犯罪を防ぐ人がいなくなり、治安がどんどん悪くなってしまいます。次にこの状態で災害が起こったとします。すると、ケガ人の救助、壊れた建物の修理もできません。道路に亀裂が入っても直す人はいません。もし税金がなくなってしまうたらと考えるだけでゾッとします。

このように、私の生活や安全は税金によって守られています。普段当たり前のように受けているサポートも目には見えないけれど、税金のおかげなんだということを心にとめておきたいと思います。

世の中が沢山の税金で成りたっていて、納税が必要となっていますが、その一人一人の税金によって、誰かの助けになっています。そして自分自身も巡り巡って支えられています。実際に私の祖母も税金によって助けられています。私はまだ子供なので、税金に守られている側ですが、いつか大人になって日本を担っていけるよう、税をしっかりと納められるような仕事につける人になりたいです。そのためにも今は様々なことを学び、勉学にはげみたいと思います。

これから先も日本で暮らす人たちの安全と楽しい生活、そして笑顔を守りつづけるために、税金への感謝を忘れず、日々の有意義な生活を送りたいです。

税金で救われた兄

広島大学附属三原中学校 2 年 西川 颯祐

去年の暮、税金のありがたさを実感する出来事があった。僕の大好きな兄が急病のため救急車で搬送されたのだ。兄には持病があるため最寄りの病院では対応できず、広島市にある病院まで救急車で運んでもらった。もし救急車がなければ痛みに苦しみながら自家用車で広島市の病院まで行って、それからさらに待ち時間にも痛みを耐え、後遺症が残ってしまう可能性があった。救急車で搬送されることにより痛みを耐える時間が最小限となり、後遺症も残らずに数日で退院することができたのだ。母が救急車に同乗したのだが、後から話を聞くと、救急車で走行中、道路にいる他の車がすぐに道を譲ってくれて感動したといていた。救急車でなければこんなことはできないと思う。本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

このように、兄を救ってくれた救急車にかかる費用は税金で賄われている。この出来事により、普段は意識していないが実は僕たちの生活はかなりの部分が税金によって支えられていることに気づいた。身近なところでは僕たちが受けている義務教育もその一つだ。医療費については、僕の住んでいる自治体には乳幼児医療という制度があり、中学生までは医療機関で受診する際、一日の負担額は最大五百円だ。それを超えた部分は主に税金で賄われている。他にも消防署や警察、ごみ収集など挙げればきりが無い。このことを知ってから、税金は嫌なものではなく自分たちを支えてくれる大切なものだということに意識が変わった。

僕たちが当たり前だと思っているこれらのことは、当たり前なのではなく、ちゃんと税金を納めている納税者のおかげで成り立っている。しかし、現在どんどん少子高齢化が進んでいる。このままいくとどんどん一人への負担が大きくなり今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなくなるかもしれない。そうならないためにどうすればよいか？ 僕が考えたのは、消費税率を現在の 10% からもう少し引き上げることだ。消費税は特定の世代に負担が集中せず、皆で平等に負担ができるし安定的な税収が見込めるからだ。だが、最近は色々なものが値上がりしていて、もし消費税が上がったら、消費者がものを購入しなくなり、かえって税収が減ってしまうかもしれない。単に増税すれば問題が解決するわけではなく、色々なバランスを考えなければいけないのだと思った。これ以上は今の自分では経験と知識が足りなくてよい解決策が思いつかない。しかし、これからしっかり勉強し、知識を得て色々な人たちと話し合うことによって、この幸せな生活が続くようにできるかもしれない。そのためには当事者意識をしっかりと持って考えたいと思う。

これからの社会を支えるのは僕たちで、そのために今税金を使って勉強させてもらっているから。

夢と希望を支えるシステム

今治市立大西中学校 3 年 阿部 花恋

小学校のときから、私は病気で通院を続けていたのですが、中学生になる直前に突然、手術をすることが決まりました。覚悟を決められない私は、姉に連絡しました。

当時、姉は大学に通うために、県外で一人暮らしをしていました。小学生の頃から看護師になりたいという夢を持ち、そのために一生懸命に勉強を続け、志望する大学に合格したのです。大学でもさらに、厳しい勉強の毎日が続いています。自分の夢を叶えるために、頑張る姉はとても誇らしく、姉の夢の実現を家族中が応援していました。その姉が、私からの連絡を受けて、母に電話をかけてきました。姉は医学の勉強をしているので、私がこれから受ける手術がどれだけ大変で痛みを伴うのか、そしてどれだけ高額なものであるかを理解していました。そして、「私は妹のために何もしてあげられないけれど、これから家計が大変になるだろうから、私への仕送りはもういらないからね」と、母に言ったそうです。両親からの仕送りは最低限だったため、姉はアルバイトをして生活費を補っていました。今でも勉強との両立は大変なはずなのに、「アルバイトを増やしてお金を貯めるから大丈夫、それよりも、妹に十分なことをしてあげてほしい」と、母にお願いしたそうです。その電話のときに私は側にいたのですが、母は大粒の涙を流していました。

そんな時でした。病院で検査を受けた後、事務の方からお話がありました。育成医療についてでした。十八歳未満の身体に障害がある児童が、指定機関で入院・手術・通院した時の自己負担分を、公費で負担してくれるというのです。母はすぐ姉に連絡し、これまで通りの生活で大丈夫なことを伝えました。

あれから二年が経ちました。姉はこの春、晴れて看護師となり、一生懸命働いています。そして私は、手術のおかげで自分でできることがどんどん増えて、将来の夢も持ちました。もしも、あの制度がなかったら、姉は大学で勉強を続けることが困難になっていたかもしれません。私も、家族に負担がかかると知れば、素直に手術を受け入れることができなかったでしょう。税金が、国民の生活を維持するために、さまざまな所で使われていることは知っていました。しかし、ほんの一部の困っている人のためにも、救いとなる制度が整っていることに、感動と感謝の気持ちでいっぱいです。予期せぬ突然の困難に見舞われたすべての人に柔軟に対応するために、税金は使われているのです。多くの人の目には触れていないところでも、税金は確実に一人一人の夢や希望をつなげる役割を果たしています。つなげた夢や希望は、人をさらに育て、社会をさらに豊かにします。希望をつないでもらった私も、一生懸命に勉強して、社会の一員としてしっかり生きていきたいです。

白いイチゴと父から学んだこと

須崎市立朝ヶ丘中学校3年 馬詰 里心

ある日、我が家に白いイチゴが届いた。きらきら輝く純白のイチゴを初めて目の当たりにした私は、驚きと嬉しさで胸がいっぱいになった。でも、赤いイチゴを買ったはずなのにどうして白いイチゴも入っているんだろうとふと不思議に思った。それを父に聞いてみると、

「このイチゴはふるさと納税の返礼品ながやけど、生産者さんが、送るのが予定より遅くなってしもうたき、そのおわびで白いイチゴをおまけでつけてくれたがよ」

という事だった。この時初めてふるさと納税について身近に感じた。ふるさと納税という言葉は以前から聞いた事はあったが、詳しくは知らなかったので調べてみる事にした。ふるさと納税とは、国民が好きな自治体を選んで寄付ができる制度で、税額控除の額が大きく、なおかつ自治体から返礼品を受け取ることができるため、納税者にとっても自治体や生産者にとっても非常にメリットの大きい制度という事を知った。私の父も海産物の会社を経営しているので、ふるさと納税を活用しているのではないかと考えて話を聞いてみた。すると、本当に活用していて、マグロやイカを始め、井ぶり等を返礼品として届けているそうだ。活用している側としては、一万円の寄付金の場合自分達には三千円、二千円が配送料や運営サイトへの手数料、約半分が市に納税され、自分達にも商品を知ってもらえたり買ってもらえるとといった得があるし、市としても最初は二百万円だったのが今や二十億円を超える寄付金が集まりPRにも繋がるといった得がありとても素晴らしい制度であると感じているそうだ。また、利用している側としては、実質二千円負担で様々な地域の特産品を手に入れる事ができるし、サイトによっては、返礼品＋ポイントがもらえたりととても嬉しい制度が沢山あるのでこれからもどんどん利用していきたいそうだ。

私達の生活には、消費税や所得税、法人税等沢山の税金が密接に関わっている。税金がある事で公共サービスが利用できたり、学生には必要不可欠な教科書等学習に必要な物が使えている。だから税金は大切だと思うし、私も大人になったらもっとしっかり納税すべきだと思う。また、白いイチゴや父の話から、ふるさと納税を沢山の人が利用する事で、納税額が増えるし、生産者さんの仕事が増えるので、今のコロナ禍で大きな影響を受けている農林漁業者や食品関連事業者等へのダメージが減ると思うし、経済活動がより良く活発になると思う。“ウィズ・コロナ”の為に誰にでもメリットの大きい納税もしていく必要があると私は考える。

まだ中学生の私にできる事は少ないけど、正しい経済活動や税についての知識を身につけ、大人になった時に上手に活用できるようにしていきたい。

祖母が伝えた「みんなのお金」

福岡県福津市立津屋崎中学校 3 年 古木 凜音

夏休みの宿題のテーマが税の作文と聞いて正直わからないことだらけだった。この日本で、人々が公平に暮らしていく手段として、「税」があるわけだが、どこに使われ、どんな人の役に立っているのか、私は詳しく知らなかった。

私の祖母は、ファブリー病という難病を患っていた。そのため心臓が悪く、ペースメーカーを入れていた。それでも毎日、仕事場である大学に通い、休日に会いに行くと一緒に遊んでくれた。とても優しい祖母だった。そんな祖母は「タクシー券」というものを市から支給されていたのだが、毎回それを市役所に返していた。「タダでタクシーに乗れるのに、どうして返すの？」と私は祖母に尋ねたことがある。すると祖母はこう言った。「ばあばは、自分で歩いて電車に乗ることができる。みんなのお金だから、本当に困っている人にそのお金を使ってほしいのよ。」と。幼かった私は、その時祖母が言った「みんなのお金」という意味がさっぱりわからなかった。

祖母の胸元に入っていた小さな四角いペースメーカー。このペースメーカーを入れる手術も、全額祖母が負担するのではなく、大きな医療費がかかる場合に使われる高額医療費制度というものに、私たちの税金は使われていたのだ。祖母は治療の為に二週間に一度、大きな病院へ点滴に通っていた。この治療費の七割は税金によって支えられていたことを知り、私はとても温かい気持ちになった。

祖母はとても強い人だった。いつも笑顔で優しく、そして周りのことをよく考えることができる人だった。心臓が悪い中、毎日通勤するのは正直きつかったと思う。通院にタクシーを使えば、少しは楽ができたかもしれない。でも、「自分より困っている人がいるから。」と、人を思いやることを忘れなかった祖母を私は尊敬する。一人分のタクシー券を返却しても何も変わらないかもしれない。そんなこと言わずに黙って使えばいいのに、と言う人もいるだろう。しかし税とは、この「思いやり」の上に成り立っているのだと思う。

人は誰しも明日も健康でいる保証などない。自分が払った税金は、めぐりめぐって自分を助け、人を助けている。医療ではなくとも、どこかで誰かの役に立っているのだ。そしてそれは祖母の言う通り、困っている人の為に使われてほしい。

祖母は 60 才で亡くなった。心臓発作だった。さよならを言えなかったこと。ありがとうを伝えることができなかったこと。祖母の家に置かれてある焦げてしまったペースメーカーを見るたびに今でも悲しくなることは多々あるけれど、祖母の言った「みんなのお金」の意味が十四歳でわかりなんだか誇らしくなった。

ばあば、私もばあばのように、「みんなのお金」を大切に使い、人の役に立てる大人になるよ。

税金は何のためにあるのか

筑陽学園中学校3年 和智 マリン

税金には様々な用途がある。その中でも税金の一般合計歳出総額で最も割合が高い社会保障と私たち中学生にとって身近な税金の使い道である文教及び科学振興に着目したい。社会保障とは、私たちが安心して生活していくうえで必要な公的サービスのことである。具体的には、病院で手当てをしてもらうとお金がかかる。かかった金額の一部に税金が使われる。文教及び科学振興では、教育や科学技術の発展のために使われている。具体的には、公立小・中学校の教員の給与や教科書の配布などに使われる。

国語の授業で平和とは何かを考えた。その時に出した私の答えは、平和とは安心して今日を過ごせて安心して明日を迎えられることである。安心して今日を過ごすためにはできるだけ心配事がない方がよい。その点において、税金が使われている社会保障は私たちが怪我をした時の不安を軽減してくれる。安心して明日を迎えるためには戦争があってはならない。なぜなら戦争は保障された明日がないからだ。戦争を明日、そしてずっと遠くの未来で起こさないためには明日、そして未来を担う子どもの教育は欠かせない。戦争の残虐さや戦争でもたらされる悲劇を知り想像する力は税金が使われている教育によって養われるからである。

税金は何のためにあるのか。その一つの答えは平和のためだと私は考える。平成三十一年十月一日に消費税の税率は八パーセントから十パーセントへと引き上げられた。その理由として主に社会保障の安定的な財政確保のためなのだそう。ただ、私は、これは社会保障制度を維持することだけを意味するものではないと思う。社会保障を受ける納税者の私たちが安心して日々を送れるようにするための増税でもあるのではないだろうか。今までの私のように日本の平和の実現のために力になりたいと思っているが何をしたら良いか、何ができるかわからない人がたくさんいると思う。納税は平和を実現する第一歩である。つまり、税を納めることが平和への力になっているのだ。

正直、消費税が引き上げられるとニュースで知ったとき、税金を今より多く払うのは嫌だなと思った。私が税金を納めるという行動だけに目が向いていて、税金への理解が十分ではなかったからだ。このように、納税という行動で止まっている人にとっての税金への理解のきっかけに私の作文がなれたら嬉しい。

二つの祖国と税～母との会話を通して～

竹田市立竹田中学校 3 年 廣末 啓樹

蛇口をひねれば普通に、きれいで安心な水が出る。これが当然の毎日にいると、それがどれだけ幸せなことか、つい私達は忘れがちになってしまう。税について考えてみたが、買い物時の「税込み」「税抜き」価格の消費税の体験くらいしか、ほとんど思いつかなかった僕は、母に助け船を求めることにした。すると母から、「啓樹ハ、学校トカ病院ニ、アタリマエニ行ケテルヨ。ダカラ、トテモ恵マレテルヨ。」と返ってきたのだった。

僕の母親は、フィリピンの出身だ。十九歳の時、家族を少しでも支えて楽にしたいと、仕事を求めて単身来日した。後に父と出会い、今も二人して毎日頑張ってくれている。そんな母が生まれ育った祖国は、人口に対して雇用が少なく、日々、仕事探しに追われる人、学校に通えるお金が無くて、道端で物売をしている子どもが沢山いたと続けた。僕も幼い頃に一度、母の久しぶりの里帰りに一緒についていったことがある。首都マニラからは、バスで片道六時間程かかる田舎町が母の故郷で、市場が沢山出て賑わっていた記憶がかすかに残っている。母には弟妹が多く、飲み水やシャワー、洗濯など、家族が使う水を汲みに、日に二十回以上も、家と井戸を何度も何度も往復していたこと、ゴミは近くの空き地に埋めるか、もしくは乾かした後に燃やすか、処分一つとっても、手間暇がとてめにかかったこと、主要な道路以外は未舗装で、雨が降れば直ぐにぬかるむこと。普段は全く意識することなどなかったけれど、こうして僕の二つの故郷を比べてみると、同じ田舎でも随分違う。僕の身の回りには、学校もあれば、教科書も無償だ。警察署や消防署の公共サービス、図書館、公園、ゴミ処理場、上下水道といった公共施設など、税に関係するもので溢れ、豊かな毎日を過ごさせている。これも税のお陰なのだと実感した。税が僕達を様々な危険から守り、社会をより良くする機能だということがよく分かった。税制と分配が整ったこの国に生まれたことを、感謝したいとも思えた。水道のように、税のあまりの身近さに、その恩恵が見えなくなっているのだと、気付かされたような気がした。

数年前にフィリピンでも、義務教育は無償となったようだ。でも、まだまだまともに通えていない子どもが少なくないらしい。一方、僕の暮らす町は年々、人口が減少し、産業や医療もやがて衰退すると不安視されている。そこで、総合学習の授業で、“故郷のお役に立とう”、“未来の故郷で起業しよう”という課題に今、挑戦中だ。もし、県内一を誇る基幹産業の農業分野で人手不足が心配されるのならば、国家間レベルの経済支援も大事だが、仕事を必要とする母の祖国の人々を、働き手を求める父の祖国に招く民間レベルの協力は出来ないか。働くという人間本来の喜びと、納税という社会貢献への誇りのために。僕も二つの祖国に役立てる担税者にいつかきっと。

祖父母が喜ぶデジタル確定申告

宮崎市立東大宮中学校 3年 実広 侑馬

私の祖父母は、私の家から車で十分ほどのところに住んでいる。私は父と毎週のように図書館へ行くので、帰り道にある祖父母の家へも顔を見せに行くのだが、その時に祖父母が私によく聞いてくれることがスマホやパソコンの使い方だ。内容は、雑誌で知ったアプリの使い方やネットショッピングのやり方、迷惑メールの対処法など。スマホやパソコンを使いこなそうと色々なことを聞いてくる。私にも分からないことがあれば、代わりに検索して教えてあげることもある。最近では、機種変更した祖父のスマホの初期設定やデータ移行を私が代わりにしてあげた。

そんな祖父母が、毎年冬休みが明けたころによく聞いてくれるのが確定申告のことだ。数年前、パソコンで確定申告書を作るために、祖父母が申告書作成ソフトの使い方について聞いてきた。使い方を教えると、祖父母は手順に沿ってどんどん書類を作っていった。一年分のたくさんの書類を見ながら所得や控除の金額を計算し、パソコンに入力していく。そして出来上がった書類をプリンターで印刷する。あわせて、マイナンバーの通知カードと運転免許証をコピーする。それらを封筒に入れて税務署へ持っていく。この一連の作業を祖父母は当たり前のようにこなしていたが、私にはとても面倒で難しそうに見えた。

ところがその翌年、確定申告の手間が少し楽になった。「マイナポイント」をもらうためにマイナンバーカードを作った祖父母へ、私はオンラインで確定申告書を提出できることを教えてあげたのだ。紙に印刷して税務署へ持っていく必要はなく、スマホでマイナンバーカードを読み取るだけ。祖父母は、税務署まで行く手間がなくなり、還付金が振り込まれるのも早くなった、と喜んでくれた。

しかしまだ、書類を作る手間は残っていた。医療費控除を受けるため、病院や薬局でもらった一年分の領収書を集めて表にまとめる、生命保険料控除を受けるために、保険会社から送られてきた書類を用意するなど。提出は簡単になったものの、控除を受けるための作業はまだまだ面倒であったのだ。

しかし、最近私はあることを知った。次回の確定申告からは「マイナポータル」を使えば書類作りも簡単になるという。詳しく調べてみると、一度設定をするだけで、自動で医療費や保険料などのデータが集められて控除額が計算され、申告書に入力されるそうだった。

祖父母にこのことを伝えれば、きっと喜ぶだろう。ポイント目的で作ったマイナンバーカードのおかげで、毎年の確定申告がとても楽になるのだ。私は、年が明け確定申告の季節がやってきたら、祖父母にぜひこのやり方を教えてあげたいと思った。加えて、私が確定申告をする年齢になったとき、どのように便利になっているだろうか。想像すると、とてもワクワクする。デジタル化の進んだ未来での確定申告を、私は楽しみにしている。

妹を守ってくれてありがとう

末吉中学校 1 年 安庭 楓華

私の妹は、知的障害とレノックスガストー症候群という難病を患っています。一日に何回もてんかん発作を起こして転倒するので、頭を保護するヘッドギアをかぶっています。このヘッドギアは特殊な帽子なので、値段がとても高いです。そこで、母が市役所に相談すると一割の金額で買うことができました。残りの九割を誰が支払ってくれているのだろうと疑問に思い、父にたずねると、税金がもとになっていると教えてくれました。また、妹は、自閉症スペクトラムという障害も、もっています。初めての場所に行ったり、人に会ったりすると不安になり、外や店でパニックを起こすことがあります。周りの人は最初、驚いていますが、ヘルプカードやヘッドギアを見ると、障害のある子だと理解し、優しく手助けしてくれます。ヘルプカードも税金でできているそうです。

他にも、税金は医療にどのように関わっているだろうと興味が出て調べてみました。

税金は、私たちの医療費にも使われているそうです。私が、病院に行ったとき、毎回受付で保険証と一緒に出すピンク色の紙は何か以前から不思議に思っていました。よく見てみるとその紙には、「曾於市子ども医療費助成金受給資格者証」と書いてありました。私の住んでいる曾於市では、十八歳までは支払った医療費が払い戻しされます。このお金も税金です。おかげで病気やけがを早く発見し、治療をすることができるので、とてもありがたい制度だと思いました。

また、妹の医療費についても調べてみました。妹のような重度の障害者には、重度心身障害者医療費助成制度があり、十九歳以降も医療費が助成されるそうです。妹は、てんかん発作をおさえるため、毎日多くの薬を服用しています。だから、多額の医療費がかかっています。しかし、この制度のおかげで医療費の負担が大幅に減り、とても助かっているそうです。

次に、障害者の福祉施設についても調べてみました。妹は、保育園のころから療育施設を利用しています。現在は、養護学校に通いながら放課後は、子ども発達支援センターに通所しています。この福祉施設も税金が使われています。この施設を利用することで、妹は放課後も安心して安全な場所で過ごすことができます。これからも、成長と共に色んな福祉施設にお世話になることと思います。

もし、税金がなかったら、妹は、今のように元気に楽しく過ごすことは難しいだろうと思います。税金の大切さやありがたさをとても強く感じました。私は、明るくて素直でみんなを笑顔にしてくれる妹が大好きです。これからも、ずっと守っていきたいと思います。

誰もが、安全で幸せに過ごせる世の中であるために、これからも税金が、みんなのために大切に使われることを心から願います。

私の祖母は視覚障害を持っている。目が見えないので祖母が一人で行動できる範囲は私達と比べて大幅に狭まってしまう。家での娯楽や外出が限られてしまう祖母にとって、祖父は大きな存在だったと思う。しかし祖母にとって一番大切だった存在の祖父は三年前に亡くなった。いつも明るく元気だった祖母はそれをきっかけに暗く、静かになってしまった。また、仕事や家事をしつつ、祖母のことを手伝い、支えている母もとても大変そうだった。

そんなとき、母が同行援護という視覚障害者を対象とするサービスを見つけ、祖母はそれを利用するようになる。同行援護は一人で移動することが困難な視覚障害者が外出する際に職員の方が同行し、移動に必要な情報の提供や移動の援護等を行ってくれるものだ。利用者が決めた時間に利用できるため祖母の好きなタイミングで外出でき、母などの身内の負担も軽くなった。最近ではロービジョンケア施設という。視覚障害者が集まって様々な作業や活動をする施設も利用しており、以前より活発的になり笑顔が増えたと感じる。私は祖母や母を救ってくれたこれらのサービスに興味を持ち、調べてみた。するといくつかの条件に当てはまる人はこれらのサービスを無料で利用できることがわかった。なぜこのようなサービスが無料で利用できるのか母に聞いてみると、税金が関係しているとわかった。

税金は大人から子供まで様々な形で納めており、商品を買った時やサービスを受けた時に納める消費税や個人の所得に対してかかる所得税など色々なものがある。それらの税金は道路などの整備や科学技術の発達のために使われている。数ある使い道の中で最も多くおよそ三十四%を占めるのは、私達の健康や生活を守るための社会保障費である。年金や介護・福祉などの公的サービス、祖母が利用している同行援護も社会保障費で成り立っている。しかし、なぜそれらに対しての税金の使用割合が多いのか私は疑問に思った。調べてみると、日本では「障害者総合支援法」という、地域社会における共生の実現に向けて障害福祉サービスの充実等障害者の日常生活や社会生活を総合的に支援するという目的で創設された法律が定められていることがわかった。税金や法律のおかげで沢山の人が支えられているのだと実感し、私は感動した。もしも税金がなかったら、公共サービスの面では高齢者、障害者向けの施設や医療機関の整備などが不十分になってしまう。普段何気なく納めている税金は、沢山の人を支えている。税金を通して沢山のひとと繋がることができる。そう思うと、納税はとても誇らしいことだと思った。

祖母の笑顔を取り戻してくれた税金への感謝の気持ちを忘れず、私も国民としての自覚を持ち、しっかりと税を納めていきたい。

私が小学四年生の十月に父が亡くなった。もう今年で五年が経った。父が亡くなった原因は進行がんによるもので誰にも想像がつかなかった。父が亡くなる三日前に父は、私に悲しい表情をしながら「もーも、誕生日祝ってあげられなくてごめんね。」と言った。私は父の腕に数え切れないほどのチューブがまとわりつくのを見ながらただ、頷くことしか出来なかった。父が亡くなりバタバタとした日常が始まった。私は今起きている現実が信じられず一カ月は放心状態だった。そんな私に母は、笑顔で「大丈夫、何とかなるよ」と励ましの言葉をかけたが、私は母の瞳の奥にある悲しみや苦しさという感情が伝わってきて逆に泣きたくなった。私は現在、公民の授業で税について学んでいる。税の仕組みはなかなか難しいため、高校生の兄に税について聞いてみた。「税って本当難しい。自分たちの生活は多くの税金によって支えられているからしっかり学んで感謝しないと。」そう言って兄は、私に動画を勧めた。「ご案内します アナザーワールドへ」というタイトルの動画では、世の中から税がなくなったら…というもしもの世界が描かれていた。道路は整備されることなく穴だらけ。警察や消防車を呼ぶのもすべて有料。急ぐ場合は高額だったりする。全員が学校に通えるわけではなく、日中から働く子もいる。私達が当たり前だと思って安心して暮らせる毎日がその世界にはなかった。その夜、母に動画での話をすると、税によって支えられている今の暮らしについて詳しく話してくれた。父が入院していたときの入院費や手術費は、健康保険のおかげでほとんど賄われ、莫大なお金を払わずにすみ、現在の子供医療費助成制度では中学三年生までが対象で医療費が免除され母は、とても助かっていると言っていた。来年から私は高校生になり、高校に通う。自分の目指す夢に向かい、勉強に専念できるという恵まれた環境に感謝しなければならない。国民の納める税金は私たちの暮らしを支える大きな柱となっていると実感した。今の私は、税によって支えられる側にいるが、社会人になったらしっかりと働き、税金を納め、日本の社会に貢献できる大人になりたい。皆が安心して暮らせるより良い社会のために税は必要である。この動画を見て税についての重要性を知る機会をくれた兄に感謝している。

私達に欠かせないもの

室蘭市立室蘭西中学校 3 年 篠崎 未来

なぜ「税」は欠かせない存在なのか。それは、税によって国民一人一人がより豊かで、安全・安心な暮らしを成り立たせるためだ。このことを知ったのは、税金の大切さが身に染みてからだった。

「見てごらん。大きいばあちゃん、デイサービスでこれ作ってきたんだよ。」大きいばあちゃんとは曾祖母の呼び名だ。デイサービスに行っては、様々なものを作って私に見せてくれた。そんな曾祖母は私の祖父母の家に住んでいる。そこには、玄関やお手洗いにいくまでの廊下に手すりがある。足が悪い曾祖母だけで出来る物事を増やそう、と取り付けたものだ。祖父は「この手すりは介護保険のおかげで、安く取り付けられたのだよ」と言っていた。とても驚いた。こんなところにも税金が使われているなんて。

これをきっかけに、税について関心を持つようになり、図書館で税の事を調べてみた。手すりを取り付ける補助金は、国の支出の三分の一を占めている、社会保障というものと分かった。社会保障は、年金を支払うための費用や医療費などに使われている。また、[公立中学校の生徒一人当たりの年間教育費]という身近なものを調べた。その額なんと約百万円だそうだ。とてもありがたく感じる。一部の外国は、戦争や紛争に税を費やしていると考え、ぞっとする。そう考えると日本は、新品の教科書が無償で頂けたり、ICTを利用した教育も整っていたりと、充実した環境で学んでいるのが分かる。税金を知ることによって、様々なものを多方向から考えられると、自分の知識が増えていくようで心嬉しい。税について色々と調べていくうちに、新たな疑問が浮かんだ。自分のまちで使われている税金にはどのような使い道があるのだろうか。

夏休み期間中、子ども議会に出席するため、市役所へ行く機会があった。そこで、日頃夜道が暗くて困っていたので、街路灯について伺った。市道など比較的大きい道路の街路灯は、市で管理をしていて、住宅街などの街路灯は町内会で管理をしているという。そして、町内会が町内に街路灯を取り付ける際、市は設置額の三分の二となる補助金を交付してくれる制度があることも初耳だった。税金で賄う補助金によって、明るいまちになる。更に、税金を納めることで、自分や地域・国での生活を豊かにし、互惠関係を築く足掛かりとなっているのだ。

今ある日常は、当たり前のように当たり前ではない。税があるからこそ、世の中は発展し、経済の充実と安定にもつながる。まさしく、税金は暮らしに欠かせない大切な存在なのだ。その上、税の制度は互いに支え合い、助け合うことができる。そのためにも、税金を納めるだけでなく、税金の使い道を知ることが重要だ。私にはまだ知らないことが多くある。社会に貢献するためにも学び続けたい。

白線が消えかけ、ガタガタとしたコンクリート上を、歩いている。ふと顔を上げれば、散乱したがらくたから放たれる異臭が、鼻をつく。町の方を見下ろすと、年季の入った建物が、疲れた顔で並んでいるように見える。あの学校も、病院も、消防も。自分にとって関係のないものだ。教育や医療、災害への対処などはすべて、お金持ちのためにある。大金がはらえない自分たちに、それを利用する権利など、ない。犯罪が、日常に紛れ…

こんな世界を、どう思うだろう。おかしい。ありえない。考えられない。そう、税がない世界とは、私たちにとって考えられもしない世界なのだと、私は知った。

私は、「税」を身近に感じたことがなかった。唯一思いつくのは、消費税。10%に引き上げられ、ちょっと損をしている気分になるくらいだった。税が何かの役に立つ、とわかってはいても、実感がわかなかったのだ。

私が税について考えるようになったのは、自分がコロナウイルスに感染したとき。心の中は、不安でいっぱいだった。私の祖父は、肺が強くない。入院したこともある。絶対に、祖父にうつしたくなかった。感染した自分が悪い者のように思えて、部屋に閉じこもるようにしていた。一人だけの静かすぎる空間は、私の気もちを一層暗くした。そんなある日、家に大きなダンボール箱が、いくつも届いた。中に入っていたのは、大量の支援物資。日用品や食品が、隙間なく詰めてある。予想以上の量に、家族そろって目を輝かせた。外出ができなくても安心できる。心まで落ちつくようで、嬉しかった。しかし、一つ疑問もあった。コロナ陽性者が増加する今、その全員にこんなサポートができるのだろうか。そのためのお金は、どこから出るのだろうか。

調べてみると、国民が納める税の存在があった。それは支援物資以外にも、医療体制や感染拡大防止の整備、薬の開発など、コロナ禍において重要な役割を果たしている。私はその事実を知って、自分が国から応援されているような気がした。一人じゃない、悪者じゃない、と思えた。税金はその他にも、さまざまなことに使われている。例えば、警察や消防、道路や水道などの公的なサービス、年金や医療、福祉、教育など。身近に税を感じなかった自分は、身近すぎるほどの税に気がついていなかったただけなのだ。学校で学ぶ。ケガをしたら、病院へ行く。警察や消防が、安全を守る。私達の日常は、税によって豊かさを維持していると言えるだろう。

近い将来、私も税を納める一人の国民になる。それだけで、私が支える社会、私が支える未来ができる。そんな、明るさとあたたかさに包まれた世界を創る、社会に貢献できる大人になりたいと思った。

納めることは治めること

村山市立葉山中学校 3 年 佐藤 恭佳

「あー、税金税金！水を流すってことはお金が流れてるってことなんだからな。」

これは私が小学生の頃、学校で水が出しっぱなしになっていたときに担任の先生から言われた言葉です。当時の私は、学校のお金は村山市の税金が使われていることは知っていたけれど、税金に関して、詳しいことは何も知りませんでした。

「税金なんて、大人が納めているもの。学校で使われているくらいでしょ。私達には関係のないこと。」

そう思っていました。

あれから 3 年がたち、私は今中学 3 年生になりました。今では税金のありがたみをひしひしと感じています。

私のはじめて税金が大きな役目を果たしているを知ったのは、兄が高校に入学するときでした。私は、教科書は税金によって無償で給付されることを小学校の先生から聞いていたので、高校では自分で教科書を買わなければならないというところに驚きました。そして、何よりも驚いたのがその教科書の値段でした。その値段が当時のわたしにとって、とても衝撃的だったのを今でも覚えています。自分が使っている教科書を全額負担している税金のありがたみを知る事ができました。

そしてその一年後、私が中学校に入学するときにも税金のありがたみを知ることになりました。それは村山市で行っている、入学応援金です。中学校に入学する村山市の生徒全員に一人あたり五万円の入学応援金が支給されました。私が今着ている制服はそのときに頂いた応援金で買ったものです。

今の日本の税金は、教育はもちろん、医療費の負担や子育て支援、介護費、公共施設の運営など、様々な形で私達に還元してくれています。もし、今の日本に税金がなかったら。お金がなくて学校に通えない子どもが出てくるかもしれないし、病院に通えず、病気が悪化して亡くなってしまう人がいるかもしれません。そうならないために形を変えて、税金が活用されていることが分かりました。

そして、国民から集めた大切なお金だからこそ、大切に使うてはいけません。七月に行われた参議院議員選挙では、各候補者、政党は公約を掲げました。よく考えてみると、それらの公約の多くは財源なくして実現しません。私たちの生活に直結する税を考えることは、政治に興味を持つことにつながると感じました。

税金は人々の暮らしをより豊かにし、居心地の良い国にするために使われています。政治を行う上で重要になる税金の使い方。しかし、私達が納めなければ、こんな議論になることはありません。私たちは選挙を通して、政治に参画しますが、実は納税こそが政治に関わる第一歩なのかもしれません。税金を納めること、それはすなわち国を治めることに繋がっていると思います。

「登校前にゴミを出す」僕の日課だ。家庭内の溜まったゴミを捨て更には自分の役割を果たし気持ち良い一日がスタートする。ゴミ収集車はほぼ毎日来て、曜日替わりに粗大ゴミから小さな電池まで多種類のゴミを引き取ってくれる。もし、この様な行政サービスが無かったら家庭や公共施設、街中がゴミだらけになり想像を絶する世の中になると思う。

では、どこからゴミ収集車を稼働するための資金が出ているのだろうか？調べて見ると、僕達がスーパーなどで購入するゴミ袋代や市に納めている税金から使われている事がわかった。そして、ゴミ処理費用だけではなく公園や道路、図書館や住宅環境整備、災害復旧など僕達にとって多くの身近な場面で税金が使われている事を知り、無駄にせず大切に使うって欲しいと思うようになった。

また八月三日からの山形県を襲ったバケツをひっくり返した様な記録的大雨は県内に大きな被害をもたらした。最上川が氾濫し道路が陥没、住宅への浸水、鉄橋が崩落、車が流され行方不明者も出た。更には断水が続き自衛隊が災害派遣された。自然災害の恐ろしさを他人事ではないと感じ怖かった。そして翌日には、山積の災害廃棄物が映し出された。日常のゴミだけではなく、復旧が必要な道路や鉄橋、行方不明者の捜索や自衛隊派遣、泥だらけの廃棄物処分にも税金が使われている事も知った。

税金は、被災した後の住民の生活再建や街の復興など人々の命を守り安心して暮らせる社会づくりを担っている。誰かが納めた税金で僕達は支え合い守られている事も知ることができた。

以前は、「消費税が十パーセントも取られて高いなあ、無かったらいいのに。」と思うことがあった。もしかすると多くの人が同じように思った時があるかも知れない。なぜなら納めた税金がどのように使われてどう自分達の生活に結びついているのかを実感するのが難しいからだと思う。僕達国民は、憲法第三十条で納税の義務が定められている。納税とは納めるものであって取られるものではないのだと気づかされた。税と僕達の日常生活との深い関わりを知り納税の大切さを知った。税金は納める事によって僕達の暮らしを支えより良くしてくれる。だからこそ、国民全体で負担しなければならない。そして、限りある税金を有効活用し国民みんなが健康で安全に安心して暮らせる明るい社会になってほしいと願う。

税金は、日本の社会情勢の変化に伴い様々な課題を解決したり、未来の国づくりを考えて歳出されている。今だけではなく、将来の国民生活も豊かにするために税金は持続可能な社会づくりに必要不可欠だと思う。

僕は、今は一生懸命学び、将来はしっかり働き納税の義務をきちんと果たせる人間になりたいと思った。

兄の命と私達の生活をつなぐ税金

白河市立白河第二中学校 3 年 本田 侑樹

私の兄と家族が、笑顔で過ごすことができるのは、日本の税金が病気の治療に使われているということ、母から聞いたからでした。

兄が六歳の時、体の具合が悪いので、病院に行くと言ったあの日から、兄は何ヶ月も家に帰ってくることができませんでした。診断は、腎臓病。腎臓は、臓器の中でも、一度悪くなってしまうと、元に戻すことができないと言われており、腎不全になってしまうと、透析や移植が必要になるそうです。兄は、まだその段階ではなかったものの、一度悪くなってしまった腎臓は、薬を使って、今の状態を一生保っていかなければならず、何がきっかけになるかはわからないものの、いつどこで状況が変わるかは、わからないと言われていました。まだまだ幼い私は、兄と急に離れ離れになったことや、病院の付き添いに母が行ってしまう寂しさに、祖母や父には相当迷惑をかけてしまったようで、泣いて、兄に会いたい、母に会いたいと、夜も眠らず、よく目を腫らしていたそうです。私より治療に耐える兄の方が、よほど辛かったはずなのに、大好きな兄に関する、悪い情報しか届かない家の中では、重い空気を感じ取ってか、よく泣いていたといいます。そのような状況下でも、私たちの生活水準は何も変わることがなく、治療費が家計を圧迫するということはありませんでした。その理由が税金にありました。私たちが暮らす地域では、十八歳を迎えて年度が終了するまでの医療費が、無償化だということです。兄に関する、入院費や治療費も無償でした。

消費税は、私もよく知る税金です。唯一、私でも目に見えて支払うことができる税金なので、物を買う時には、この税金が困っている誰かの役に立ちますようにと思いながら支払いをしています。所得税、住民税、健康保険税など、一般的な家庭の私たちが支払う税金を調べてみると、何のための税金なのか、その税金で何ができるのかなど、明確になっていき、自分たちの暮らしに大きく関わっていて、支払っている自分たちも、助けられているということがわかりました。特に兄の病気に関して、治療費が無償化とはいえ、どれだけの入院費や検査費、治療費、薬代がかかっているのか、調べてみると、正直、私たちの生活は成り立ちません。税金をどのような形で役に立てるかは、それぞれの地域で違うと思いますが、子供育成に関して、私たちの地域では多くの税金が活用されています。その一つが、子供医療費助成でした。

兄の命は、税金によって助けられ、また私たちの生活も、その兄を助けてくれた税金によって成り立っていたのです。こうして命をつなぐことができるのも、税金が私達の生活の中で活きているからです。これからも、兄や困っている人を助けることができる税金に感謝し、私も、しっかり納めていきたいと思っています。

私達と未来を繋ぐ架け橋

茨城県立土浦第一高等学校附属中学校 2 年 吉村 咲樹

近年、環境問題が世界的に深刻化し、特に地球温暖化は急速に進みつつある。それらを抑制するため、国内ではプラスチック製買物袋の有料化や 3 R の促進など様々な取り組みが行われてきた。そしてまた税金も、環境を守るための大切な役割を担っている。具体的には、「地球温暖化対策のための税」がある。これは、原油やガス、石炭など全ての化石燃料に対して、二酸化炭素排出量に応じて課される税金で、税収は省エネルギー対策、再生可能エネルギー普及、化石燃料のクリーン化や効率化などのために使われる。この課税により燃料費が上昇したことでエネルギー需要が減少し、二〇十九年度の二酸化炭素排出量は前年度に比べ約三二〇万トン減少した。これは二五メートルプール約三二〇万個分に相当し、今後もさらなる二酸化炭素削減効果が期待出来そうだ。また、イギリスのロンドンでは、「コンジェスション・チャージ」と呼ばれる税金がある。この課税により、ロンドンでは交通渋滞が約三〇パーセント緩和された上、交通量の減少に伴い自動車の排気ガスも減少し、大気汚染が軽減されたという。このように、私達は税金を通して環境保全に携わっているのである。

また、税金は環境問題だけでなく、私達の生活環境を整えることにも貢献している。例えば、私達が当たり前のようにお風呂やトイレを使ったり、安全な水を飲むことが出来たりするのは、税金によって上下水道の整備がされているからであるし、通勤や通学に使う道路の整備も税金でまかなわれている。他にも、駅のホームドアや視覚障害者誘導用点字ブロックの設置にも補助として税金が使われており、地域のバリアフリー化に役立っている。

今までの具体例から分かったことがある。それは、税金は環境にも人にも優しいものだということである。つまり、税金はよりよい地球環境と人々の生活環境を支え、豊かな未来を築いているのだ。私は今まで、税金は生活環境の改善のためだけに使われるものだと考えており、環境問題の抑制に関わっていることなど思ってもみなかったし、正直税に対してあまり肯定的な見方をしていなかった。しかし、今回税についての作文を書いたことで、税の新たな在り方を知ることが出来たと同時に、税に対する考え方を改める必要があると感じた。なぜなら、税金は住民の理解がなければ成り立たないものだからだ。税金は、私達と、豊かな環境や輝かしい未来との架け橋となるということをよく理解し、未来へのバトンを繋いでいく必要がある。そのため私も、この機会だけで終わらせず、これからも税金に関する知識を積極的に取り入れ、理解を深めていきたい。そして、今後、税金に対してこうした積極的な姿勢をとる人が増えていくことを切に願う。

「支える人になる」

宇都宮大学共同教育学部附属中学校 1 年 岩佐 葵

私の祖母は約二十年、一人暮らしをしていた。近くに住む同年代の方が次々と転居されたこともあり、「誰とも話さない日が多く寂しい」と言うようになっていた。そんな祖母に容赦なく病が忍び寄っていた。認知症である。診断を受けた時にはすでに脳が萎縮し始めていたが、祖母は必死に生きた。しかし、急に怒り出す、ほんの少し前のことを覚えていない、など祖母は次第に別人のようになっていった。祖母の対応に追われる父母もまた、疲弊していった。しかし、どうすればよいのか答えが見つからない。真っ暗なトンネルをずっと彷徨っているようだった。

そこに光が見えたのは、介護保険制度のおかげだった。それまでは介護保険という言葉を知っていたが理解はしていなかった。父の給与から介護保険料としてそれなりの金額が引かれており、勝手に徴収されているという認識だった。祖母の病気をきっかけに当事者となったことで、改めて介護保険制度について調べてみた。介護保険制度は市区町村が保険者となって運営しており、四十歳以上の住民が加入者となって保険料を納め、介護が必要と認定されたときに費用の一部を支払うことでサービスを受けることが可能となる仕組みである。一人暮らしは難しいと思われた祖母だったが、ケアマネージャーさんのアドバイスをもとに訪問介護や通所介護を組み合わせ、多くの人に支えられてもらいながら生活することができるようになった。祖母が受けたサービスは多岐にわたったが、自己負担額は非常に少なく実際にかかった費用の一割であった。では、残りの九割は誰が負担しているのか。それは、半分を加入者からの介護保険料、残りの半分を国や都道府県、市区町村などが負担している。つまり税金だ。税金制度によって、祖母は最期まで穏やかな生活を送ることができたのだ。

超高齢化に突き進む日本では社会保障費が増大し続けている。財源となるのが保険料と消費税であるが、今後も現在と同様の社会保障制度を維持していくためには消費税や自己負担額の引き上げも考えられる。もちろん、無駄な支出を減らし貴重な財源を有効活用することが求められるが、納税者としての私たちも税金に対する考えを改めなければいけないのではないだろうか。義務としてしぶしぶ納税するのではなく、納税によって私も社会を支えているのだと誇りに思うべきなのだ。そして、その税金は現在の生活を維持し、より豊かな未来を創り出す根幹となる。私も数年後には社会人となり本格的に納税する立場となる。祖母の介護をきっかけに税に対して理解を深め、祖母や私たち家族が支えられてきたように、しっかりと納税することで誰もが安心して穏やかに暮らせる社会を支える人になりたいと思う。

私は一一五九グラムで生まれ、低出生体重児（極未熟児）のため、大学病院の新生児集中治療室に約三ヶ月間、入院をした。無事に自分で生きていけるようになるまで治療が必要だった。この時の入院費は、無料だったことを母から聞いた。それを聞き、医療費の制度に感謝の気持ちでいっぱいになった。

しかし、私だけでなく、六年前に私の祖父も大きな手術をし、高額医療費として、医療機関の窓口での支払いを負担の上限額にとどめてもらう事により、一度に用意する費用が少なくて済んだ。

健康保険税を払っていたおかげで、入院や通院の自己負担額は無料になったり、とても少なく済んだりした。なんてありがたい制度なんだろう。私はこの税の作文を書くにあたり、改めて税の事をより深く知る事が出来た。

税金を納めるといって国民の義務ではあるが、快く払う人はいるのだろうか。しかし、税を納めるといつかは自分に返ってくるという考えが広まり、税金の制度を快く受け入れ、理解を持つことが大切なのだと感じた。

また、税の理解は日本の税を知るだけでなく、他国の税を調べてみると見えてくるものがたくさんあった。

海外では、病気にかかってもきちんとした医療が受けられない人もたくさんいると聞く。

日本で救急車を呼ぶ時には、無料だが、アメリカや中国、ロシアなどの国は有料だということが分かった。

教育に関して言えば、日本では中学校まで義務教育なので、無料で教育が受けられ、当たり前にもらっている教科書も、有料の国があるのだ。教科書には、さまざまな情報、絵、写真などが載っている。教科書一冊を作るのにどれだけの人達が携わっただろう。たくさんの会議、審議などを重ねて作られている。いろいろな職業の人達が、未来の日本を担う今の子供達のために協力してくれている。私達は、その人達に支えられている事を頭に入れ、一生懸命に勉強し、生活していかなければならない。そして、次は私達が将来の日本を支えられるよう、もっと意識していかなければならないのではないだろうか。

税金は、私達の暮らしを支えてくれている。健康で豊かな生活をしていくために、国や地方公共団体が行う活動の財源となっている。住民税、消費税、所得税などを払っていく必要があるが、全て私達の生活を便利にしてくれているのだ。私達は一人では、生きていけないのだ。

私は、税に関していろいろ勉強してみて、改めて今出来ることは、社会に役立つ力を身につけ、納税を通して、支え合いの心、相手を思いやる心を持つ事だと思った。

有効に使われることで、たくさんの人が幸せになれる税金。自分の納められる税をしっかりと納め、将来の日本をもっともっと豊かで住みよい社会にしていけたらいいなと思う。

「いつか真心納税を」

蓮田市立黒浜中学校3年 植木 涼太

青空に日差しがまぶしい八月。薄緑や黄褐色の丸々した梨が市内のあちらこちらで目に留まる。ぼくの住む町は埼玉県でも有数の梨の産地で、その瑞々しさをたくさんの農家が披露してくれる果樹あふれる緑豊かな町だ。

そんなある日の事、家の食卓に傷だらけの梨が数個置いてあった。母に入手方法を聞くと馴染みの梨農家から頂いたとの事であった。話によると、六月初めに降雹と強い風による大きな被害があり、今年は収穫量が見込めないとの事で目の前の梨は選果から外れたかわいそうな梨なのだそうです。

ぼくは農家の方が心配でこの降雹について調べてみた。この降雹等による埼玉県の農作物被害総額は三十八億円あまり。特別災害に指定され、県と対象の市や町（十八の市と町）にて支援を分担する事が決まった。被害（三十%以上）のあった特定農作物については農薬、肥料、代替作等の購入費用等が補助対象になる。ただ、被害状況がかなり大きかったようですべての被害を把握するには時間を要するとのことであった。

支援金はすぐに農家の方へ届くのだろうか。もしかしたら待っている間に被害にあった木々や農作物が病気になってしまうのではないかな。もう少し早く別の方法で助けてあげられないのだろうか。その時、ふるさと納税でクラウドファンディングするのは…と、思いついた。ふるさと納税とは、生まれた故郷や応援したい自治体に寄付ができる制度だ。寄付金のうち二千円を超える部分については所得税の還付、住民税の控除が受けられる。自分自身が寄付金の使い道を決める事ができ、その地域のお礼の品や名産品を返礼品としてもらえたり、もしくは返礼品無しを選ぶことのできる仕組みになっている。

ぼくは早速、インターネットで埼玉県のふるさと納税サイトを調べてみた。

「あった！」

たくさんの農家がふるさと納税経由で寄付金を募集している。梨やぶどう、キウイフルーツ、野菜や建物そのものにも被害が出ている事がその画面から直に伝わってきた。そして、多くの農家は残念ながらこのような状況の為返礼品はありませんとサイトに書いてあった。返礼品を楽しみにしているふるさと納税者はたくさんいるはず。返礼品無しの寄付者は現れるのだろうかとぼくは心配した。そして被害にあわれた各クラウドファンディングに寄せられた寄付額を見て、ぼくは驚く事になる。

たくさんの真心がそこに表れていた。自分の故郷、応援したい土地を思い真心を届けられた方の人数が多くその気持ちが温かかった。ふるさと納税とは、ただ地域の返礼品を選び楽しむだけではない。例え自分に縁もゆかりもなくとも、誰かを思って思いを届ける事のできる「真心納税」と呼べるだろう。

この温かい真心は必ず誰かを笑顔にする。近い将来、この真心をぼくも必ず届けよう。

先日、母が開業した。連日にわたり開かれるリモート会議や、全国各地で行われる勉強会など、積極的に参加した末、実現したことだ。そのおかげか、まだ事業を開始したばかりだが、客足は著しく増加している。これまでの母は、何においても私を優先しているように見えた。昔から多趣味な母だったが、父と共に、私のやりたい事を一番に考えてくれていたからだ。私が自分で道を切り拓けるようになってきた今、母が一人の子供の母親としてだけでなく、一人の個人事業主としての人生を謳歌していることが嬉しい。

さて、個人が事業を開始した際、義務として税務署に出さなくてはならない書類がある。「個人事業の開業・廃業等届出書」いわゆる「開業届」というものだ。その開業届を提出するため税務署に行く母に、このような機会は滅多にないと思い私も付いて行った。「開業」や「税務署」という聞き慣れないワードにとらわれ、複雑な手続きを何時間もかけて行うのかと想像していたけれど、それは大間違いだった。専用の書類に必要事項を記入し、受付に提出するだけの簡単な作業だったのだ。母が書類に記入をしている間、私は税務署内に貼ってあるポスターを見て回っていた。しかしふと、なぜ開業届を税務署に提出するのか疑問に思った。開業する事と税にはどのような関係があるのだろうか、そう思い帰宅後すぐに調べてみた。すると、個人事業主は主に所得税・住民税・事業税・消費税の4つを払う必要があるとわかった。また、土地や家屋を所有している場合には固定資産税がかかり、国民健康保険の保険料も納めなければならないそうだ。事業と税は密接に結びついており、切っても切り離せない関係にあるのだと気づいた。それから税務署で行われる業務や税務職員の方々について興味を持ち、さらに調べてみた。

まず、税務署内には総務課・徴収部門・個人課税部門など、いくつかの部署が置かれており、それぞれ業務内容は異なるとわかった。個人課税部門では所得税や個人事業主の消費税を扱っているので、母はここに多く関わるだろう。

次に税務職員の方々について知るため、税務署で頂いた国税庁のパンフレットを開いた。そこで私は、「税務署のファンを増やしたい。」「社会に貢献したい」「税の知識を普及したい。」という税務職員の方々の切実な思いを目にし、感銘を受けた。

義務とは、国民が自分達の未来を自分達で築くためにあるのだと思う。納税は代表的な国民の義務だ。だから当然、ほとんどの人が関わる。その人達全員で、前述のような税務職員の方々の思いに応えられるよう、正しい申告と納税を行い、安全で豊かな生活を送り続けていくことを、私は一番理想としている。その理想を現実にするため、私自身「社会に貢献している」と胸を張れる大人になりたい。

忘れかけていた税金の存在

川口市立芝西中学校 3年 中村 佳鈴

私は次の三月で中学校を卒業して、四月から高校生になります。つまり、学習に関する物の大部分を税金で支えてもらっていた九年間の義務教育を終える事となりました。これに伴い、今まで当たり前のように受けていた授業に対する授業料、無償で頂いていた教科書、学校の備品等、今後は自分で全て支払っていく事になります。高校に進学するにあたり、税金のありがたさを再認識し、今更ながらとても感謝しています。それまで当たり前すぎて忘れかけていた、この感謝の気持ちをあるきっかけが私に思い出させてくれました。

そのきっかけとは姉の大学進学です。姉は四月から私立大学の医学部に通っています。姉の子供の頃からの将来の夢は医師になる事でした。姉が中学生の頃までは軽い気持ちで応援していた両親も、高三になり、その夢にだんだんと現実味が増してくると、両親は反対する様になりました。医学部進学には多額の授業料がかかるからです。私は何一つ不自由のない生活を送らせてもらっていて、とても恵まれた環境にいます。しかし、それでも、一般家庭には医学部の学費は払えない現実があります。幼い頃からの夢を反対される姉も可哀想でしたが、金銭的な問題のせいで娘の夢を応援できない両親はその何十倍も辛かった事と思います。そんな中、何とかして娘の夢を応援できないかと両親が探していると、埼玉県の手紙で「埼玉県医師育成奨学金」というものを見つけました。これは、医師不足解消と将来埼玉県の地域医療に貢献する医師を目指す方の受験の機会を広げる為、埼玉県が貸与する奨学金です。更に、この奨学金は一定期間、埼玉県の医療に貢献すれば返還が免除されます。この制度に後押しされて、両親は姉の夢を心から応援できる様になりました。姉が国公立大学だけでなく、私立大学進学も視野に入れられたのもこの奨学金のお陰です。奨学金を借りる事で、姉は将来の夢へと大きな一歩を踏み出せました。もし奨学金がなければ姉はかなり悔しい思いをして、進学そのものを諦めていたかもしれません。しかし今、姉は大学生としてキラキラと輝いて見えますし、何より一度は反対された医学部進学を叶える事ができ、とても幸せそうです。こんな風に誰かを笑顔にできる、今後の人生を変える力を持っている奨学金は本当に素晴らしいと思いました。また、その基となっている埼玉県の税金には頭が上がりません。

この出来事を通し、私は忘れかけていた税金の存在を再び思い出しました。学生の私は消費税位しか貢献できないのに、それさえも嫌だと思う事が正直ありました。しかし、今はそんな思いは一切ありません。私が今、貢献できる金額は少ないですが、今も誰かの為になっていると思うと誇らしいです。そして、今日まで充実した学習環境を整えてくれた納税者の皆さんと同様、私も未来の子供たちの為に立派な納税者になりたいです。

税の架け橋

新発田市立猿橋中学校 3 年 大滝 裕理奈

「じゃあ、またね。元気でね。」

お盆とお正月に会いに行く祖母に手を振ってふと思う。あと何度祖母の笑顔を見ることができるだろうか、と。どんなに健康で元気に見える人でも半年の間にこの世界から姿を消してしまうことだってある。祖父や曾祖母のように。けれど、姿が見えなくなっても一定期間は記憶として残る。祖父や曾祖母を知る人は二人のことをいつも誇らしげに語る。自分の持つ記憶を精一杯言葉にしようとする。時に父は、警察官であった祖父をいつも誇らしげに語った。私は、祖父が具体的にどんな仕事をしていたのかは知らないけれど父の話をたくさん聞いて、祖父は強く優しい人であるという印象を持っている。

ある日ふと思った。警察官の給料はどこから出ているのだろう、と。父に尋ねると、警察官を含めた公務員の給料は税金から出されていることを教えてくれた。私の身近なところでも税金が役に立っていたことに気がついた。私たちが税金を払う。それが警察官の人たちの生きるためのお金となる。警察官は世の中の人々が安心して生きることができるようにする。私も警察官がいるから安心して生きられる。つまり、税金を払うことは自分以外の人が安心して生きることにもつながり、自分自身が安心して生きることにもつながるということ。そう考えるとなんだか嬉しくなった。

ところで、私は中学三年生になってから租税教室というものを受けた。そこでは、税金が老後の安定した生活や健康で文化的な社会を実現するための費用として使われていることが分かった。具体的には、医療機関や介護福祉施設を整備することなどに使われているのだが、高齢化社会と呼ばれる今、働き手の給料が低いことや働き手不足、そもそも国民一人当たりの負担が大きくなっていることなどが問題となっている。これらを知った時、私は危機感を覚えた。このまま高齢化が進めばお年寄りが安心して生活できなくなってしまう。彼らの助けとなっている人たちの生活が危うくなってしまう。私は考えた。私たちに何かできることはないか。答えはすぐ近くにあった。それは、まず今まで通りに税金を払い続けること。次に、医療機関や介護福祉施設などについて、そこで働く人々について知ること。最後に、身近な人に親切にすること。家族や親戚、近所の人などと関係を持っていることが日々の安心につながると思う。

私たちは税金を払うことによって自分の目の前にはいない、どこかの誰かと繋がっている。私はそれがすごく嬉しかった。私も少しではあるけれど誰かの役に立っているのだ。この世界ではみんなが誰かの役に立つことができるのだ。そして祖父はその人たちをつなぐ架け橋となっていたのだ。そんな祖父をいつまでも記憶の中に少しでも残しておきたいと思う。

税金でつなぐ親切のバトン

松本市立清水中学校 3 年 高野 雫

私はこの作文を書くにあたって税について調べました。すると税は私たちの暮らしをととても豊かなものになっているということがわかりました。私は、税は消費税しか知りませんでした。税は約五十種類もあり直接税と間接税や国税と地方税など税金の納め方や納める場所にも違いがありました。私は病院に行った時にいつも料金が五百円なのはなぜだろうと思っていましたが調べてみるとそこにも税金が使われていました。私が通っている学校の校舎もプールも体育館も教科書までもが税金でまかなわれているものでした。

私は自分が生まれた時からすでに百円のものには五円の消費税がついていたので二〇一九年に消費税率が十パーセントに引き上げられても百円の物が百十円にかわるだけだと思っていました。額が増えると当然私たちの負担も増えます。それは国民にとって嬉しい事ではないので反対する人ももちろんいました。これからの日本は少子高齢化がますます進みます。そうなると消費税はこの先も確実に上がります。私はこれは悪い事だとは思いません。

私はコロナウイルス流行前にアメリカに旅行に行きました。一度は行ってみたいと思っていた国なのでアメリカのことをたくさん調べてから行きました。アメリカについて調べているときに私は「Pay It Forward」という言葉を初めて知りました。それはとても美しい親切のバトンでした。欧米では誰かから親切にしてもらった時にその人に恩返しするのではなく別の人に恩を送ることで親切のバトンを渡す「Pay It Forward」という取り組みがあります。例えばコーヒーを買う時に自分の後ろに並んでいる人のコーヒー代を払ってあげる。そしてその親切に対して払ってくれた人にお礼をするかわりにその人も自分の後ろのお客さんのコーヒー代を払ってあげるというものです。この取り組みはコロナウイルスが流行したことで再注目されているそうです。去年の十二月にミネソタ州ではドライブスルーでこの取り組みが行われなんと約九百台も時間にして二日と半日続いたそうです。私はこのことを知って驚き税について学んだことで気付いた事があります。

この「Pay It Forward」という素晴らしい取り組みは私たちが税金を納めることに似ていると思います。私たちは税金を納めますが納めた税金が将来自分に必ず帰ってくるわけではありません。他の誰かのために払ったお金がどこかの町や病院で使われどこかの誰かを救うのです。そして逆に自分だけがお金を払っているのではなく国民全員が誰かのために税金を納めそれが自分の周りを豊かにしているのです。どこからか来た税金があなたの周りの人を笑顔にしているのです。アメリカで九百台続いた取り組みのように私たちは税金を納め親切のバトンをつなぎ続けることで優しい社会が続くと思います。

現代日本における消費税の重要性について

松戸市立牧野原中学校 3 年 林 知直

税の中で、私たち中学生が日常で最も関わることが多いものと言えば、もちろん消費税でしょう。百円ショップに行って物を買おうとしても、実際に支払わなければいけない金額は百十円で、上乗せされた十円が消費税です。では、この税金は、どのようにして生まれたのでしょうか。

日本では一九八九年、竹下登内閣によって導入されました。導入当初は三%でしたが、一九九七年に五%に増え、二〇一四年に八%、そして二〇一九年に現在の十%まで増税されました。推移をみると、わずか三十年あまりで三倍以上にまで膨れ上がっています。

こんなにも消費税率が引き上げられた理由は、消費税を導入するにあたって施行された法律である「消費税法」にあります。そこには、「年金、医療及び介護の社会保障給付並びに少子化に対処するための施策に要する経費に充てるものとする。」とあります。つまり、今や社会問題になっている「少子高齢化」が関係しているということです。例えば年金は、主に労働力として働いている人々が担い、足りない分は消費税などが財源となる「社会保障関係費」として国から支払われています。ですが、現在の日本は、少子高齢化により労働人口が減ってしまっています。そのため、税金で賄わなければいけない社会保障の費用が増えてしまい、その分消費税を増やさないといけなくなったのです。

私の祖母も老齢年金や介護で消費税の恩恵を受けています。独居している祖母は、日常の買い物や通院にも常に介助が必要な状態ですが、その介護は子供である母と母の妹が祖母の家に通いながら行っています。わずか二人で介護を行うことは困難だと常に母から聞いています。そのため、祖母の様々な要望にきめ細やかに対応できるよう、それらをお願いできるヘルパーさんや、日常生活を維持するために様々な計画を立ててくれるケアマネージャーさんの助けが必要だと感じました。しかし、ニュースなどでは介護従事者の人の重労働低賃金の問題をよく耳にします。この問題を解消するためにも、消費税を財源とする社会保障費が十分になることで、エッセンシャルワーカーの方の労働に見合った適正な給与が支払われ、介護する側もされる側も安心して過ごせる社会になると良いと思いました。

国の社会保障は全ての国民を守るものですから、所得税のように働く人だけが徴収されるのではなく、消費税のように買い物をする人全員が負担し、より多くの人に分散される方が良いと思いました。これから、さらに少子高齢化社会が進みます。将来自分が介護されたり、年金をもらったりするような立場になった時に、十分な介護サービスや年金が受けられるよう、消費税を財源とする社会保障の充実がますます必要だと感じました。

普通に暮らせることのありがたさ

習志野市立第六中学校3年 大竹 柊里

私には大切にしている言葉がある。それは、「普通に暮らせることのありがたさ」だ。これは、小学四年生のときに父から言われた言葉であり、それ以来、苦しいとき、辛いとき、また、調子が良いすぎて浮かれてしまいそうなときにも、この言葉を自分に言い聞かせている。

私は小学四年生のときに、ある血液の病気になった。その病気は非常に稀な病気で、治療してもらえる病院が全国でも限られていたため、私はその病気を治すために、自宅から遠く離れた大阪のこども病院に入院した。

この入院生活の中でとても印象に残っている思い出がある。それは病院の先生から初めて外出許可をもらい、両親と一緒に病院近くのスーパーに買い物に行ったときのことである。このとき私はスーパーで特別なことをした訳ではなかったが、そこで目にした商品、店内の音楽、食品の匂いなど、すべてが新鮮に感じて、まるで初めて遊園地に連れて行ってもらったときのような興奮を覚えたのと同時に、そのひときは神様がくれたプレゼントだとさえ思ったのであった。

その後、私は入院中に行ったさい帯血移植が成功し、退院することができた。そして自宅に戻ったときには、入院前と同じ生活ができることに何十倍も何百倍もの幸せを感じることができた。

そんなとき父から、「普通に暮らせることのありがたさを大切にしてほしい。」と言われた。それを聞いた私は、父の言葉の意味が、自らの入院生活を通じて感じた気持ちのことなのだとすぐに分かった。しかし、父が伝えたかったのはそれだけではなかった。父は続けて、「入院中にはたくさんの人に助けられた。そしてたくさんの制度に支えられた。社会には困っている人に手を差し伸べてくれる制度がある。そんな社会に支えられて、私たちの今の幸せがあるのだ。」と教えてくれた。母からは、私がさい帯血を提供してもらえたのは、さい帯血バンクという仕組みがあったからであり、輸血ができたのは、全国各地で行われている献血のおかげであると教えてもらった。さらに、私の治療にかかった医療費は、小児慢性特定疾病医療費助成制度という自治体が高額な医療費を補助してくれる制度により、金銭的に大変助けられたのだとも教えてくれた。そしてこれらの制度や様々な公共サービスは、人々の善意や税金によって支えられているのだと知った。

日々の何気なく過ごしていく中で、普通に暮らせることが当たり前だと思いがちだが、実は、普通に暮らせることはとてもありがたいことである。私は周りの全ての人々が明るく前向きに、そして笑顔で暮らせる社会であってほしいと思う。そしていつか、そんなすばらしい社会に貢献できる大人になりたい。

日本の税金について考えたこと

新宿区立西早稲田中学校 3 年 内藤 義人

今日のウクライナ情勢により、原油などの資源価格が上昇し、加えて日米金融政策の方向性の差異による急速な円安が、日本経済に大きな影響を及ぼしている。こうした中、今年七月の参議院選挙では、野党各党が家計を豊かにするために、消費税の減税や廃止を国民に訴えていた。減税をすることによる影響は何があるのだろうか。「わたしたちの生活と税」などの資料で調べてみた。

私達は、誰もが皆、日常生活で様々な社会資本や公共サービスを利用している。例えば、電気、ガス、水道、道路や交通信号、小・中学校、警察や消防、公園や図書館、医療費、年金等々だ。これらの多くは、国などによって提供されている。

私達は、当然のように、これらの公共サービスを無料で、または安く利用している。国は、これらの財源をどこから得ているのだろうか。それは、基本的に税金や社会保険料として私達から得ているのである。したがって税金が不足すると、これらのサービスの提供は困難になり、私達の健康で豊かな生活は保障されないことにもなりかねない。

それでは、減税をすることでどのような効果が期待できるのだろうか。まず、家計の「収入」が増えることが第一に考えられる。食品などの生活必需品が値上がりしている中で、家計の「収入」が増えることは大切なことだろう。だが、その代償があまりにも大きすぎないかと思う。

令和四年度の一般会計予算は約百七兆円。そのうち税金が占める割合はたったの六割だ。残りの四割は公債金、要するに借金だ。そして、借金を返すための債務償還費は二割にも満たない。借金を一年間で返済しきれていないのだ。この状況が三十年間続いた結果、令和四年度末の公債残高は一千兆円を超えた。このような状態で減税したらどうなるか。簡単に想像がつくことだろう。公債は増え、状況は確実に悪化するに違いない。

借金はいつか必ず返さなければならない。その財源は何か。それは私達及びその子供達が将来支払う税金だ。私達が成長し、社会人になった時、税率が今とは比べものにならないくらい跳ね上がっていても文句は言えないのである。軽々しく減税や税の廃止という人は、未来のことを何も考えていないのだ。

では、私達にできることに何があるだろうか。それは様々な公共サービスが借金に頼っている現状を知ることだと思う。無知は悲劇を生む。現状を知らないことには何も始まらないのだ。また、税率の上げ下げだけでなく、税金の取り方を負担の感じにくいものに変えることもこれからの財政には必要だと思う。私達は将来のことを見据えて、税負担の状況や私達が負担した貴重な税金が必要な公共サービスに使われているかどうかについて、高い関心を持つべきだ。

回れ、回れ、税金

新宿区立落合中学校 3 年 香川 和花

私の祖父母は石川県に住んでいる。そのため、私は石川県へ行くことが多い。その石川県内にある金沢駅に、「もてなしドーム」と「鼓門」があるのを知っているだろうか。

これらは二〇〇五年に税金を使って作られた駅舎である。作られた当初は「税金の無駄使いだ」などといった批判が多かった。しかし、私は「もてなしドーム」などは良い効果を生み出していると考える。

直接的なものでは、「もてなしドーム」のおかげで雨や雪にあたらずに移動できるようになった点だ。『弁当忘れても傘忘れるな』という、天気が変わりやすく雨の日が多いことを意味する格言があるほど雨が多い金沢。金沢に長く住んでいた母は「もてなしドームができたから、雨や雪の日に荷物が多くても移動が楽だね」と話してくれた。税金のおかげで金沢駅が便利になったのだ。

また、観光客の増加による効果も考えられる。実際、二〇一五年に北陸新幹線が開通してから「鼓門」を訪れると、写真を撮っている人や立ち止まって見ている人がたくさんいることが分かる。さらに金沢駅は世界で最も美しい駅十四選に選ばれたこともあり、コロナ禍の前は外国人観光客が多かった。数値を見ても、二〇〇四年から二〇一三年で約三・七倍になっている。外国人観光客に限らず、金沢市などを訪れる観光客の数は増加の一途をたどった。

観光客の増加と税金は、一見、関わりがないかのように思えるが、実は違う。宿泊税という、旅行でホテルや旅館に泊った時にかかる税金が存在するからだ。それは、東京都、大阪府、京都市、金沢市を含むいくつかの場所でのみ課される地方税である。私は大阪にも京都にも旅行で行ったことがあるが、宿泊にかかる税金があるとは全く知らなかったのもとても驚いた。金沢市では歴史、伝統、文化など固有の魅力を高めるとともに、市民生活と調和した持続可能な観光の振興を図る施策に要する費用に充てるために宿泊税があるそうだ。それによって「旅行代が高くなってしまう」と思う人もいるかもしれない。しかし、私は旅行した場所の伝統など魅力を高めるのに貢献できる、素晴らしい税金だと思った。

税金によって作られたものによって税金が納められる。そしてそれが税金を払った人たちの生活を豊かにするために使われる——。このように、税金は社会を回っていると感じた。私も税金を回す一員になりたいと思う。

普通の日常を支えてくれる税

杉並区立松溪中学校3年 千葉 拓人

僕が小2の夏、父に不治の病が見つかった。毎年検診を受けていても発見や治療が難しい病気だった。僕には六歳上の兄、四歳上の姉、三歳上の兄、そして五歳下の弟がいる。父の病気が分かった時、母は、既に就寝していた子どもたちを起こして「お父さんは、頑張っても一年ちょっとしか生きられない。もう、終わった。これから本当に大変だ」と言っていたらしい。「お母さんが泣いているのに拓人が寝ぼけていて、みんな泣きながら笑っちゃったんだよ」と、姉からよく聞かされた。

そして一年二カ月後、父が亡くなった。でも今、僕は普通の日常を過ごせている。ぜいたくをしているわけではないけれど、毎日おなかいっぱいご飯が食べられて、元気に学校に通い、小一からやっている大切な剣道も続けられている。テレビを見て笑うこともできる。生活のために母も働いているが、父がいた時よりも収入は減ったはずだ。母は、「社会には助け合いの仕組みがあつてすぐ支えられているんだよ」とよく言っている。

父の闘病では多くの医療費がかかった。だが健康保険が適用される治療の場合、一定の自己負担限度額を超えた分が払い戻される高額療養費助成制度があり、助かったそうだ。

弟は杉並区立の保育園に通っていた。五人兄弟が学校に通う費用もあるし、けがをしたり体調を崩したりして病院にかかったこともある。その家庭の所得によって、保育料や就学にかかる費用に補助が出て、負担が軽減されるという。また、杉並区では、中学三年生まで健康保険適応の治療を受けるときに自己負担なく受診できる医療費助成制度がある。母が体調を崩したときも、ひとり親家庭への医療費助成制度のおかげで、自己負担額が少なく受診でき、心強かったという。杉並区の「ひとり親家庭休養ホーム」制度を利用し、少ない費用で関東の施設に一泊旅行をできた経験もある。とても大きな思い出だ。

これらの支援制度は税金で成り立っている。財務省の「消費税の使途に関する資料」の図解を見て、国や地方の消費税込の中から、「社会保障目的税」として、年金・医療・介護・少子化対策に充てられているお金があることは、何となく分かった。税金とか社会の助け合いの仕組みとか、正直、あまり関心がなかった。でも、だれにでも思いがけない生活の変化や不安が訪れる可能性がある。そんなときに、社会の助け合いの仕組みで支えてもらうことができるのだと知った。

僕は今、社会の中で支えられているだけだけれど、どんな大人になりたいか考えると「自主自律」を目指したい。剣道を続け、警察官になり、人を支えられる人になりたい。今住んでいる場所とは違う土地に住むこともあるかもしれない。自分が暮らす土地で、税金がどんな形で助け合いの役割を果たしているのかも考えてみたい。

税金を有効化する

川崎市立川崎高等学校附属中学校 3 年 村松 里桜

私の姉は今年新成人だ。七月十日に行われた参議院議員選挙に姉は参加した。そのため、家族の中でも選挙への関心が高まった。家に届いた候補者の新聞やテレビの選挙結果を見るなど、私に選挙権はないがこれまでよりも選挙に興味を持っていた。その中でふと、選挙のためのお金はどこから出ているのだろうと疑問に思った。調べてみると、「税金」だった。

前回の参議院議員選挙にかかった費用は、なんと約六百四億円。有権者数をもとに考えると、有権者一人あたり、約五百七十円のお金がかかっていることにある。最近では約半数の人が選挙に行っていないことが社会問題となっている。しかし、考えてみると、その人たちは一回の選挙あたり六百円近く、そして全体で見れば、単純計算で約三百億円の税金を捨てていることになる。日本国民がせっかく納めている税金は、これほど無駄になり、日本国民が無駄にしているのである。

また、今回国民が参議院議員を決めたことで、その人は六年任期を務めることになる。ある記事には、国の年間予算を組み合わせると、参議院議員選挙の一票には六百十一万円の価値があると書いてあった。つまり、一人のその一票がそれほどの税金の使い道を決めることができるということなのだ。しかし、増税のとき不満を持っている国民がいることや、議会で寝ている議員がいることを取り上げているテレビ番組もあった。それに対して税金の無駄だと言っている人もいた。このような社会や政策にしたのは、議員ではなく、それを選んだ国民なのである。自分たちの意見をしっかりと伝えられる「選挙」という機会が設けられているのにも関わらず、それに参加しない。という税金の無駄遣いサイクルができてしまっているのである。

私たちが安心して生活を送れているのはまぎれもなく税金のおかげだ。教育を受けられるのも、安全な水を飲めるのも、税金がなかったらとても難しいことだ。ではその税金のために私たちにできることはあるのか。短期的にも長期的にも税金を無駄にしないために選挙に参加すること。また、私のように選挙権を持たない人の場合は、まず「税金」についての正しい知識を身につけること。正しい知識は税金について考えるうえでの基礎なため、必ず必要なことだ。そして、自分が、どのようなことに税金が使われてほしいかを考えておくことが大切だと思う。このように一人一人の税金に対する意識を高めることで、税金が有効化され、よりよい社会を構築することができるはずだ。

感謝、そして繋いでいく

横須賀市立長沢中学校 3 年 丹羽 舞苺

私は今年の六月に腎生検のため入院しました。腎生検とは腎臓の組織の一部を採取し、顕微鏡で直接観察する検査です。

私の腎臓に初めて異変が見つかったのは小学五年生の尿検査でした。自分だけが受け取った再検査用の封筒がなんだかとても恥ずかしく、すぐにランドセルにしまった事をよく覚えています。二次検査でも要精密検査の結果が出て、母と病院へ行き、詳しく調べてもらいました。その後数年間は近くの病院に通院し経過観察が続きましたが、尿たんぱくと潜血の数値が高い状態が続いたため大学病院に入院して検査することになりました。

学校の尿検査で見つかるまで腎臓に病気があることにまったく気が付きませんでした。ある調査によると小児期に発症する腎炎の約七十～八十パーセントが、私のように学校検尿で無症状のうちに発見されているそうです。日本では一九七四年に世界で初めて学校検尿が開始されました。日本の小児末期腎不全の患者数の割合は世界で一番少なく、学校検尿が行われていないアメリカの半分以下というデータもあります。学校検尿で早期に発見された腎炎はむくみや食欲不振などの自覚症状が起こってから診断されたものに比べて病変が明らかに軽いことが分かっており、適切な生活管理や治療を行うことで将来腎不全になる子どもたちを減らすことができます。

尿検査を含め学校で受けられる健康診断は本来なら費用がかかるものであるにも関わらず、毎年当たり前のように無料で実施されています。それは未来ある子どもの健康のために税金が使われているからです。もしも個別での申込制や費用が掛かるとなったら、全員が受けるでしょうか。病気や健康についてまだ考える機会の少ない子どもたちが、経済的な理由に影響させることなく全員公平に受けられることのありがたみを、私は身をもって感じました。無料というものの意味をはきちがえることのないよう、税の役割や意義を理解し感謝の気持ちを忘れないようにしなければなりません。

私は小さい頃から看護師という職業になんとか憧れを抱いていました。通院や入院で看護師さんにやさしく接していただくうちに、単なる憧れは明確な目標に変わっていきました。まずは見つけてもらった病気をしっかり治し、将来は一人の社会人として一生懸命働き、税金をきちんと納められるようになりたいです。一人でも多くの子どもの健康を守るための手助けができるよう、様々な角度から恩返しをしていきたいと思っています。

税金のあり方を考えること

山梨市立山梨南中学校 3 年 石井 裕乃

私は山梨県に住んでいます。山梨県には良いところがたくさんあります。自然がとても豊かで、特にミネラルウォーターは全国シェアの四割を占める一大生産地です。他にも桃やぶどうが豊富に採れたり、富士山も綺麗に見られたりします。そんな山梨県ですが一つ不便な点があります。それは公共交通機関が少なく、車がないと生活が成り立たないことです。中学生の私はどこか遠出するのに不自由な思いをすることがあります。では、なぜ山梨県は公共交通機関が少ないのか。それは人口が少ないため集められる税金も少なくなってしまうからです。このことを知り、私は山梨県の税金について調べてみようと思いました。

私たちの健康で豊かな生活は、水道や道路などの社会資本整備、年金や医療などの社会保障福祉、教育や警察、消防といった公的サービスによって大きく支えられています。しかし、このサービスの提供には多額の費用がかかります。こうしたサービスを誰もが公平に受けるためには、私たちが納める税を財源とする必要があります。みんなが互いに支えあい、共によりよい社会をつくっていくためには、この費用を広く公平に分かちあうことが大切です。そんな「社会の会費」となるものが税金です。

そんな税金の集め方は様々ですが、今、山梨県で話題となっているのが「ミネラルウォーター税」というものです。「ミネラルウォーター税」とは山梨県で導入が発案されている課税制度であり、県内でミネラルウォーターを採取している業者への課税を行おうというものです。ミネラルウォーター税を導入することのメリットは長年にわたって厳しい状況が続いていた山梨県の財政が、安定して税収を確保することができます。そうすることで、山梨県の歳入総額の八・七パーセントを占める県債を減らすことができるかもしれません。デメリットとしては、ミネラルウォーター税による課税分が価格に転嫁することが行われ、販売価格が上がることにより、間接的に私たち消費者に影響を与える可能性があることです。

少子高齢化が急速に進み、私たちは新たな税のあり方を考えることが求められています。そこで私は、歳出面を見直すとともに消費税や所得税などの固定観念にとらわれない税の歳入構造を考えていくことが大切だと思います。山梨県のミネラルウォーター税のように地域の特色を活かした税を導入し、これからの税の課題に向きあっていくべきだと思います。今の日本の税について知り、今後のあり方について考えを深めていくことが、次の世代を担う私たちの責務であると思います。

未来の環境を守るための税

藤島中学校 1 年 上藤 青葉

今年の六月、母が、「ニュージーランドで『げっぷ税』の導入が検討されているそう。家畜のげっぷには、温室効果ガスの一種であるメタンガスが含まれるから、家畜に課税をして、げっぷが出ない飼料などの研究費にあてるみたい。ニュージーランドは環境保全先進国だから。」と教えてくれました。これを聞き、日本にも環境保全を目的とした税があるのか気になって調べてみました。

日本には、「地球温暖化対策のための税」があり、化石燃料の利用に対して課税されていることが分かりました。この税について、私は全く知りませんでした。しかし、電気やガソリン、灯油などに課税されているので、私たちの生活にとって、とても身近な税です。

地球温暖化が大きな問題になっている現在省エネに気をつけて生活しなければいけないことは分かっています。しかし、少し暑いと冷房をつけ、時には電気をつけながら寝てしまうこともあります。また、自転車で行ける範囲でも、親に車で送ってと頼むこともあります。しかし、地球温暖化対策税を自分も払っていることを知った今、電気や車の使用を控えることで、家計への負担が減らせるのであれば、今まで以上に環境に優しい生活を送ろうと思うようになりました。

さらに分かったことは、地球温暖化対策税による効果は二種類あることです。一つ目は私が思ったように、国民が課税による出費を減らそうとすることで二酸化炭素の排出が抑えられる効果です。もう一つは、税収を二酸化炭素排出抑制対策の財源として使うことができることです。また、二〇二四年から森林環境税という新しい税が導入され、森林を整備することで、地球温暖化防止や災害防止に役立てることも分かりました。これについても聞いたことがなかったのですが、税施行前の今から、国民に目的や必要性を周知することで、国民の環境に対する意識をより高めていくとよいと思います。

環境に関した税は、課税だけではなくありません。最近、母が車を買換えて、ハイブリッド車にしました。自動車重量税や自動車税が減税になったそうです。他にも、家を建てる際に、二酸化炭素の排出を抑える対策が取られた「低炭素住宅」と認定されれば、税金が優遇されることも知りました。

私はこれまで、税金は、現在の私たちが健康で文化的な生活を送れるように集められて使われるものだと思っていました。しかし、今回環境に関する税について学ぶことで、税には、未来の環境を守るために、現在の私たちの意識や行動を変える手助けをするという別の目的もあると考えるようになりました。環境に悪いことには課税し、逆に環境に良いことには減税や免税を行うことで、今後私たち国民一人一人の環境に対する関心が高まることを願います。

怪我から学んだ税のこと

富山市立北部中学校 3 年 野村 桃花

私が税金について興味をもつようになったのは、足の怪我がきっかけだった。今年の春、私の不注意でガラスで怪我をしてしまった。傷が深かったので病院に行き、縫合して薬をもらった。縫合の治療をし、薬ももらったので、かなりお金がかかったのではないかと両親に申し訳なく思い、

「あのときっていくらかったん？」と母に尋ねると、

「富山市は中学生まで医療費の自己負担が無料なんだよ。」と言われた。

そこで、この作文を書くにあたり、いろんな種類の税がある中で医療費に使われている税が気になり、調べてみることにした。

私の住んでいる富山市では、中学三年生まで医療費が助成されている。母は、この制度はとても助かっているけれど、子供のいない人はこの制度をどう思っているのか気になると言っていた。私は、自治体単位で助成を受けられる金額や年齢に差があることが気になった。

医療保障は全員に平等に必要なだ。だからこそ、税金が担っている役割は非常に大きいものだと思う。医療は私たちにとって欠かせないものだが、調べていくうちにその医療に使われる税について問題があることが分かった。

まず、救急車の出動件数が増加していること。その主な理由の一つが緊急性が低いと思われる傷病者の増加であった。軽い症状でも救急車を利用すると、救急車の運用に使われる税金が増えるだけでなく、本当に救急車が必要な人への救急車の到着が遅れることになる。救える命を救うためにも救急車を適性利用する必要がある。

近年は少子高齢化で、使う金額は増えているのに、入ってくる金額は減っているため、今のままでは日本の財政は厳しい状態になるのも大きな問題である。

調べを進めるうちに、私はこれからの未来が不安になった。医療費に充てられる税金が減ると、自己負担が増える。また、救急車の有料化等により、緊急性の高い病気に対して救急車を呼べない人や、そもそも病院に行って治療を受けられない人が増えるかもしれない。

今まで税金に対し、ただお金を払っているだけという悪いイメージが強かったけれど、税金は、なくてはならない存在であることに気付かされた。税金の意味や目的をもっとたくさんの人に知ってほしい。私はまだ中学生で税を払うことに関わる機会は少ない。けれど、調べたり、知ったりすることで、税に関わることができる。消費税を払うことも今なら、私も国を支えている一人になっているのかな、と誇らしく思える。そうやってまずは調べたり、考え方や見方を変えてみたりすることが、よりよい日本をつくっていく第一歩になると思う。

より良い社会であるために

静岡市立清水第七中学校 1 年 菅原 佳奈

私は、これまで税金のおかげで色々なサービスを受けてきた。中学生の私が国に納めてきた消費税の金額では、到底このサービスを受けることはできない。しかし、私が知らないたくさんの大人により、困っている人がサービスを受けることができるように負担をしてくださっている。国の収入の中で、税金は六割を占める。毎日たくさんの大人が様々な種類の税金を納め、高額な税金が国に入る。そして、私たちのために大半が使用され、毎日の安心安全な暮らしがあることに、感謝の気持ちでいっぱいになった。

国の支出金額の中で、健康や生活を守るために使用される割合が三三.七%あることがわかった。私はこのサービスを今までたくさん受け、制度のありがたさを実感してきた。生まれつき首から指先までアザがある私は、生後三か月から東京で治療をしている。生まれたときに病気がわかった両親は、精神的にとっても不安だったと思う。しかし、日本では治療後に区役所に申請するとわずかな自己負担金で治療を受けることができる。この制度のおかげで納得いくまで治療ができ、子供を助けた親にとっては、とても嬉しいことだ。両親は税金にとっても感謝をしている。

そして、この夏休みに驚いたことがあった。私は学校の健康診断で指摘を受け、夏休みに病院での再検査を受けることになった。幸い結果は安心できるものだったが、会計で検査費用をお支払いする母に病院側がこのように言った。

「自己負担金はありません。」

私も母も驚いた。精密な検査をしたのに、無料なのだ。これも税金で負担されている。私たち中学生の未来の健康もたくさんの大人が守ってくれている。税金は未来への希望でもあることがわかった。

また、道路の整備などにも税金が使用されている。私が通っていた小学校の正門前は、交通量が多く、朝の通勤時の大人と、通学する小学生がたくさんすれ違う。その中には、自転車を使用する人もいて、歩道の中で危ないと感じていた。ある日、歩道に歩行者と自転車が区別されるラインがひかれた。毎朝、学校の先生、交通指導員の方、旗振りの保護者が、交通事故がおきないように見守ってくださるが限界がある。それが、税金で歩道が区別されることにより、小学生が事故に巻き込まれる機会を未然に防ぐことができたのだ。とてもよい税金の使い道だと感じた。

これから訪れる高齢化社会により、若い納税者が減っていき、国の税金収入が減ると予測される。その時に、困った人にも今と同じく手を差し伸べる社会でありたい。だから私は、今から税金の知識を深め、仕組みや使い道について、もっと学習をしていく。将来、しっかりと納税できる大人になるために。

「なぜ国はこんなにも消費税を上げてくるのか。」と考えていた自分は変わらなくてはならない。そう思わせてくれたきっかけは、まだ幼い頃の自分だった。

私は元気に生まれてきた。両親も大喜び。そして、大きくなるまで変わらず健やかに成長した。という生活を望んでいた。だが、実際には違う。私は生まれてくる前から一つ、そして生まれて間もないときに一つ、心臓に関わる大きな病気を抱えていた。

私の家はお金持ちではなかった。手術代などには多額のお金が必要となる。さらに、一年に一回の検診にも行かなくてはならなかった。全額を家族が負担するなんて到底考えられなかった。

そんな中、私を助けてくれた一つが、税金。福祉医療費だった。福祉医療費助成制度というのは、重度の心身障害者、乳幼児、一人親家庭の人が使うと病院へ払う自己負担額が安くなるというものだ。私もこの対象者となり、直接的にはではないものの、多くの手助けをしてもらった。そして、現在に至るまで、病気などなかったかのように過ごすことができた。

日々のニュースを見る。「消費税の税率が 8 % から 10 % に引き上げ」、「増税による物価上昇」…。そこで思ってしまう。「なぜ国はこんなにも消費税を上げてくるのか。」と。しかし、こうも思う。なぜ増税するのか、自分が一番わかるのではないだろうか。自分が一番、わからなければいけないのではないか。そして、今思う。私が今、健康に生きられているのは税金というものがあつたからなのだと。岐阜県の人々、国民の方のおかげといっても過言ではないだろう。

私の今までの税金に対するイメージ。高い、何円かかるか計算することが面倒くさくなる。今の税金に対するイメージ。自分自身だけでなく、他に苦しんでいる人を助ける一つのアイテム。税金はもちろん医療関係だけに使われるものではないが、少なくとも自分の中で税金に対するイメージはそう変わっただろう。

税金に対していい考えをもたない人はどこにでもいると思う。何てったって自分のお金だし、直接的に関わって寄付をしているわけでもないから実感もわからない、義務だから何となく払っているだけ。そんな方にぜひ伝えたい。実際にその税金によって助けられた人がいます。負担を減らすことができた家族がいます。私はそれを身にもって体感することができた。だからこそ、税金というものに感謝の気持ちをもたなくてはならない。私はまだ中学生で税金についての知識も浅い。ましてや働いてもいないため自分で税金を納めているわけでもない。だけど、自分のように税金によって助けられている命があることを理解することは大切だ。私が将来、働いてお金が得られるようになったら、税金の意味、そして救われている命を考えて支払っていきたい。

祖父と私

高島市立マキノ中学校3年 落川 愛心

私が身近に感じている税金と言えば、消費税である。私が小学生の時、百円ショップで買い物をすると、百八円だった。そして、私が中学生になると百十円に変わった。消費税は、何のために税率が変わっていくのか不思議で仕方がなかった。

私には、七十五歳になる祖父がいる。祖父は、地元の木を伐採して原木を作り、自然の中で育て、香りの良い地元産に拘った椎茸を栽培している。その椎茸は、地元の道の駅などで販売している。祖父は、

「道の駅の説明会でインボイス制度についての勉強会があつてな、登録をせんとあかん。」と話していた。私は、何の事を言っているのか意味がわからなかった。調べてみると、インボイス制度とは、売り手が買い手に対して正確な適用税率や消費税を伝えるための手段で、令和五年十月から導入される制度である。

税金は支払うものであつて自分が国に納めていると言う認識は低いように感じる。しかし、祖父は、

「働いている者は、しっかり納税する義務がある。いつまで、働けるか分かん。元気な間は、仕事するんや。」

と話していた。私が大人になり働いた時は、祖父のように納税することが社会に貢献することに繋がると思う。

祖父は、お酒が大好きで仕事の後のビールは、欠かすことができない。そのビールなどのお酒にも酒税や消費税がかかっている。

「お酒の種類によつてな、かかってくる税率も違う。今は、これがいいんや。」と言つて上機嫌でビールを飲んでいる祖父は、物知りだと思った。酒税には、酒類の製造方法などに注目して分類し、それぞれの税率を決めている。私も二十歳になつてお酒を飲めるようになれば、一緒にお酒を飲みたい。

そんな元気な祖父も三年前に病気で入院していた時期がある。手術を受け今では元気に仕事ができるまで回復した。その時にも医療費の助成を受け、高額療養費制度を利用した。この制度は、高額な医療費を一定の金額までの支払いに抑えてくれる、とてもありがたい制度だ。世界には、治療を受けられない人達もいる中で、安心して医療を受けられる。それを可能にしているのは、税金があるからだ。日頃から納めている税が社会全体を助ける力となり、自分を助けてくれることに繋がる。

税金は、公共施設や学校の教科書、医療費、コロナワクチンなど様々なことに使われている。普段、当たり前のように生活している中に、たくさんの税の恩恵を受けている。税金は、国民の一人一人がお金を出し合い日本をより良くしようとする素晴らしい制度である。税金がその時代に合った税率に変更するのは、暮らしを支えていくために必要だと思う。私は、祖父が元気に暮らせるのも税金のお陰であり、とても感謝している。だから、私もしっかりと納税をして社会に恩返ししたい。

自然を守る税

平安女学院中学校3年 杉浦 希歩

日本は山と海という大自然がたくさん存在している国です。私は先日、母の実家へ帰省した時に家族でハイキングに行きました。都会の空気とは違い、涼しくて日頃の疲れをリフレッシュすることが出来ました。また、景色がとても美しく、山だからこそ見られる植物たちにも出会うことが出来ました。美しい景色の中で、ふと「山や海の自然を管理する費用は何から出ているのだろう？」と疑問に思い、調べてみると税金が関係していることが分かりました。

まず自然環境に関する税として、「環境税」があることを知りました。環境税は、地球温暖化に効果があるとされ、欧州を中心に広まっている税です。日本では、地球温暖化のための税として「炭素税」が出来ました。その他にも、山を守るための「森林環境税」があります。その税の中で、各地の森林を整備する「森林環境譲与税」があり、それが使われて守られています。整備には国土の保全、水源の涵養、土砂崩れ防止などのために行われていると知りました。また私が住んでいる京都府でも、「豊かな森を育てる府民税」があると知って、驚きました。取り組みとして、整備や保全はもちろん、資源の循環利用や森林の大切さを知り、理解してもらうための活動をしていると知りました。楽しそうな活動の様子から私も、「参加してみたいな」と興味を持ちました。

色々と調べた中で、私が一番衝撃を受けたのは、海に関する税金がないことです。山に関する税は多いとは言えませんがあります。ですが、海に関する税は一切ありませんでした。日本は四方を海に囲われており、日本にとっても山と共に大切な存在です。私は山と同様、海にも税を設けるべきだと思います。

そこで、私が提案するのは「海洋保護税」です。最近数は減ってきていますが、まだスーパーの肉・魚のトレイなどで、プラスチックは多く使われています。プラスチックをエサだと思い、飲み込むことで死んでしまっている海の生き物もいます。ひどくなれば、プラスチックを飲み込んでしまった魚を食べることで、人間が病気にかかることも出てくると思います。また、海岸に落ちているゴミをボランティアとして、拾ってくださっている方がおられます。そのようなボランティア活動のおかげで、海岸はきれいに保たれているのです。しかし、もうその方たちに頼るだけでなく、みんなで協力し、きれいにすることが大切だと思います。海をいつまでも美しく、全ての生き物にとって安全な場所にするために海洋保護税が必要だと考えました。

私は今まで、環境税について知りませんでした。今回、初めて環境税や森林環境税が国民の生活を支えてくれたと知り、感謝しかないなと思いました。これからは、税についてしっかりと学び、社会と自然に貢献できる大人になりたいです。

人を助けるための税

常翔啓光学園中学校3年 糸満 くらら

私には三十七日間生きた姉がいます。私は会ったことがないので、これは両親から聞いた話です。

私の姉は二〇〇五年一月十三日に誕生しました。定期健診で異常が見つかり、予定より早く帝王切開で生まれたそうです。生後十九日の時点で見つかった病気は、心臓病や心不全など八個で、この症状はなんと十万人に一人という確率なのだそうです。もし、完治させるなら、アメリカの病院に行くしか方法がなかったそうです。しかし、生後まもない姉には無理だと断念し、日本でできるかぎりの治療をすると決意しました。姉はたくさんの治療や手術をくり返しましたが残念ながら、一カ月少して亡くなってしまいました。でも、母は「お姉ちゃんはたくさんの人に何度も助けられて、見守られて幸せそうやったよ。」

と言っていました。今回、税の作文を書こうと考えていると、姉はもしかしたら周りの人だけでなく、国民全員に支えられていたのではないかと思いました。前に母が言っていた「うちは、お姉ちゃんの何百、何千万の医療費をみんなが税金として払ってくれて助けてもらってんで。だから、感謝をして税金を払わないとあかんよ。」

という言葉思い出しました。やはり、姉はもっとたくさんの人に支えられていたのです。

今回これを書くにあたり、医療に関する税について少し調べてみました。なんと健康医療費・福祉費に一年間に使っている額は、六千億以上だったのです。私の住んでいる大阪の制度では、十八歳以下は一医療機関ごと、一日当たりの自己負担額は最大五百円で良いというものがありました。さらに三回目以降の自己負担はありません。この助成金は税金から出ていて、みんなが支え合って成り立っているものと分かりました。思い返してみると、しっかりと税金の使い道について考えたことがないと気付きました。

私は正直、税金ってなんかめんどくさいなと思ってしまっていました。だけど、姉のように苦しんでいる人を、私が出しているほんの少しのお金で助けられているのかもしれないと思うと、少しうれしくなりました。私は今まで人の役に立ったと思えることがあまりなかったので、もしこれで少しでも誰かの役に立てていたらいいなと思います。人それぞれ、税に関して色々な意見があると思います。私は、少しでも誰かのためになっているかもしれないと思い、気持ちよく税を払うことのできる人が増えたら、良い社会になるのではないかと思います。

それは夕食中突然起こりました。妹が首をかきむしるように苦しみ出したのです。私たちの心配の声も届かない様子で、みるみるうちに顔と全身まで真っ赤に腫れ上がりました。慌てふためき母はすぐのような思いで救急車を呼び、妹は救急病院に運ばれ適切な治療を受けることができました。診断は食物アレルギーによるアナフィラキシーショックでした。病院に到着した時は、内部まで腫れ上がった気道はふさがれかけ、呼吸困難に陥っていて、後数分到着が遅れていたら命の危険があったそうです。医師からは「今後もこのような発作が起これば迷わずすぐに救急車を呼んで下さい。」「必ずですよ。」と念を押され、三十分の間で生死を分けることを説明されました。

日本では救急車を呼んでもお金はかかりません。税金が使われているからです。これは特別なことなのです。救急車は妹のような急病から、脳梗塞や心臓病のような一分一秒を争う沢山の人たちのまさに命綱です。しかし、アメリカではこの救急車を呼ぶのに十五万円前後もの費用がかかるそうです。もし日本でも同じ費用がかかれば、呼ぶのをためらいこの命綱を断ち切られてしまう人も出てくるでしょう。妹ももしあの時すぐに救急車を呼べていなければ……。その命は尽き、残された私たち家族の人生をも大きく変えていたに違いありません。妹の命は紛れもなく、税金とそれを納めてくれた人たちのお陰で救われたのです。日本の税金制度がどれだけの恩恵を私たちに与えてくれているかを痛感しました。

また大阪市には「子ども医療費助成制度」があり、ここにも税金が使われ〇～十八歳までの子どもが少ない費用で病院にかかります。いつも病院の会計の時決まって「助かるわ。」と言っていた母のその言葉の意味が、今はよく分かります。

持病を持つ祖母が不安を抱く現在のコロナ禍では、無料で四度にもわたるワクチンが受けられ、特別定額給付金も交付されました。この突然起こった国難においても税金が重要な役割を果たし、沢山の人を助けています。

皆が納めた税金は、今日も日本中を巡り、尊い命を救い、必要とする皆の役に立っています。皆で皆を守り、助ける社会は素晴らしいし、誇らしいです。税金の意義を実感した今、税金とはむしろ、「納めなければならないもの」ではなく、「納めるべきもの」であると強く感じました。

少子高齢化や自然災害など、この先様々な問題が見えますが、この税金がこれからの社会に救いをもたらしてくれることは間違いありません。私たちの未来のためにも、一人一人が税金に対し正しい知識を持ち、誰もが支え助け合えるこの社会をしっかりとつないでいかなければならないのです。

妹が救われたように、納税という形で私も一人でも多くの誰かを助け、社会に貢献できる一員になりたい。そう心より願います。

「税金」という形に変えて

加古川市立加古川中学校 3 年 北尾 大珠

クローゼットの中には、端から端まで、教科書がびっしり並んでいる。一番端の教科書は、「こくご一」である。兄弟の分もすべてそろっている。そして、教科書と一緒に、母がファイルに入れて、大切に保管しているものがある。それは、小学校の入学の日に給与された教科書が入っていた紙袋である。これは、「教科書給与用紙袋」というらしい。

はじめてもらう教科書に、わくわくしたあの日、「この教科書はね、みんながお金を出し合って、一人一人が同じようにもらえるの。みんなのおかげなんだよ。みんなの中には、あなたも入っているのよ。あなたのおかげで、誰かがこうやって、教科書をもらえてるの。嬉しいね。」と、母が僕に教えてくれたことを今でも覚えている。小学一年生の僕は、税金の存在を知らない。このときはただ、誰かにもらった、誰かにあげたことが嬉しかった。

高学年になる春休み、いつものように、一年間お世話になった教科書をクローゼットの中にしまっていたら、母が、一冊の教科書の裏表紙と、あの紙袋の裏面に記載されている言葉を僕に見せて、それを読んでもらった。そこには、「税金によって無償で支給」「国が無償で配布」と書いてあった。母は、「無償」という言葉を指差して、この言葉の意味を聞いてきた。僕は、辞書で調べて、「ただのこと。」と答えると、母は、『無料』は、『ただのもの』で、『無償』は、『心のこもったプレゼント』みたいな感じかな。」と言った。

それを聞いた僕は、税金はお金ではなく、国民の気持ちなのだと思った。そして、毎年、教科書がもらえることが当たり前なのに、感謝することが大切だと気づいた。そういう気持ちが僕を大きく成長させると、思えるようになった。それ以来、四月に新しい教科書が配布されたら、まず、教科書の裏表紙の無償給与制度の意義を読んで、感謝しながら、名前を丁寧に書いている。

そして、クローゼットの中の謎が解けた。母が教科書を大事に保管しているのは、ここにある教科書の数だけ、たくさんの人の貴重な税金が使われ、支えられていることを、いつまでも心に留めておいてほしいからだろう。

あと数年後、納税者になる僕は、平等に教育を受けられる幸せを、「税金」という形に変えて、子どもたちに届けたい。一人でも多くの子どもたちに、生活を支えてくれている税金に、人に、ありがとうの感謝の気持ちを育んでほしい。そして、僕を支えてくれたすべての人に、今度は自分が恩返しする番だ。

小学生の頃から身長が伸び、体も大きくなった。でも、背負う教科書の重さの感覚はずっと変わらない。たくさんの人の期待や希望がぎゅっと詰まった幸せな重みを感じながら、僕が歩んできた九年間。もう少しで、義務教育が終了する。幸せな重みを感じられるのもあとわずかだ。今日も、教科書一冊一冊、かばんに詰め込みながら思う。「ありがとう。」

税は未来

加古川市立平岡南中学校 3 年 阪上 友里

「税は社会の会費です。」

正直、どういうことだか全くわかりませんでした。社会って会費を払わないと居られない場所なのかと衝撃を受けました。学校でもらったファイルに書いてあったこの言葉は、私の税への意識を大きく変えました。

税が会費とは何なのか、調べてみました。財務省のウェブページによると、私たちが税を払う理由は、年金、医療、水道、道路、教育、警察、消防など「公的サービス」を受けるためなのだそうです。私たち子供が当たり前にサービスを受けられるのは、国が広く薄く大人から税を集めているからという事を改めて認識しました。これは、きちんと税を納めていないときちんとサービスを受けられないということでもあります。では、生活が苦しい人からも豊かな人と同じ量を取るのが税なののでしょうか。

どうやら、税には貧富に関係なく納めるものと、そうでないものがあるそうです。例えば消費税。これはものを買ったすべての人に当てはまり、買った分税も多くなります。それに対し、所得税は、給料から一定の割合が引かれるので、人によって税に差が出ます。このように、平等に集めるものと公平に集めるものを使い分けることが、私たちの幸せな生活につながる鍵だと思いました。集めなければいけない税を、どの人からどの程度集めるのか。国はこの問題に常に意識を向けるべきであり、税によって苦しくなる人がいないよう注意を払うようにしてほしいです。

税には、私たちの生活を左右する力があることがわかりました。ですが、ただ何も考えず税を納めるだけでは、よりよい公的サービスが受けられないと思います。よりよい生活を送るには、選挙で、税を正しく使い納めた分だけ還元される社会を作ってくれる政治家を選ぶことも大切だと思いました。18歳で成人となった今、私たちのような若い世代も、政治に参加するための準備が必須です。税の使い方、一つの選ぶポイントになるのではないかと思います。

「税は社会の会費です。」

この言葉を読んでから、私の税に対する意識は、ただ多く払うだけの訳のわからないものから、選挙で注目するポイントにまでになりました。税というものは、遠いようで生活に直結するものだったのです。

これから先、成人して、自分でお金を稼ぐようになったら、しっかり税を納め、自分が受けられる公的サービスを適切に利用しようと思います。そうして、私たちの生活をより豊かにしてくれる、正しい税の使い方をしていく社会を作ること、幸せな未来はきっとやってくるでしょう。

森林環境税について

宇陀市立大宇陀中学校 2 年 萬世 啓士朗

僕の住んでいる奈良県は県全体面積の七割が森林におおわれていて、全国でも第五位の森林県だそうだ。実際僕の家周りも山に囲まれていて、僕はこの自然豊かな場所がとても気に入っている。しかし今日本ではその豊かな森林が様々な問題を抱えている事を知った。

夏休みのお盆前、僕は祖父に誘われて私有地の山と一緒に歩いた。その時祖父から山について色々な話を聞いた。

昔は林業も盛んで山の木も高く売れたので山を持っている人達はどんどん木を植えた。そして良い木を育てるために混み入った木を切り倒す“間伐”という作業を行ったそうだ。そうする事で地面に光が当たり木の育ちも良くなり、根っこもしっかり張るので土砂崩れや風雪災害も防げていた。

しかし現在は林業経営も厳しくなり、間伐を行える人も少なくなってしまった。そのために山の整備が十分行われなくなり、管理が不十分な森林が増えてきているらしい。

一緒に歩いた山もうす暗く、木が生い茂り、地面に光が当たっていなかった。祖父は、この辺りの山は、近いうちに部分的に木を切ってそこに地域の特性に応じた広葉樹を植える予定だと話していた。これは将来的に手間のかからない森林を育成する事を目指して行う県のモデル事業だそうだ。木を無償で提供する代わりに、県が整備費用を負担してくれる。その費用に奈良県独自に導入した「森林環境税」があてられているという。調べてみると奈良県だけでなく、各都道府県でも森林づくりを目的とした税制度が導入され、森林を守るための色々な取り組みをしている事が分かった。そして二〇二四年からは国税としても「森林環境税」が導入され、その財源で森の整備を適切に行い、自然災害の防止や後継者の育成資金などにも使われるそうだ。インターネットで見ていると、地方税と国税で重複して徴収されることに批判的な意見もあった。森林の少ない地域に住んでいる人達は自分には関係ないと感じているかもしれない。しかし大規模な土砂災害では都市部への被害も及ぶため森林地域だけの問題ではない気がする。

そして近年SDGsの関心の高まりによりSDGsの達成には森林の整備が欠かせないとも言われている。

今の日本にとって必要な税があるからこそ今後、その使い道や活用方法に注目していきたいと思う。

ふるさとの思いとふるさと納税

和歌山県立日高高等学校附属中学校 3 年 吉成 日和

去年の冬、私の両親がふるさと納税を利用したと聞いた。ふるさと納税とは、納税をするといっても寄付の一種と言ってもいいだろう。自分の出身地に限らず全国の応援をしたい地方自治体に納税することができる。また、自治体によっては地域の施設の優待券や宿泊券など様々なものが「お礼品」としてもらうことができる。

私の父は大分県出身で、毎年一度は必ず帰省するのだが、コロナ禍ということもあり長らく帰省ができていない。そこで帰省ができない代わりといっちはなんだが、ふるさと納税を利用してみようということになった。それに父から納税するとお礼品をもらえると聞き、私もそれには「ふるさとに税金を払って、特産品をもらうことができるなんていいな。」と思い賛成したが、ふるさと納税の仕組みがよく分かっていなかった。そこで私は、言葉自体は聞き馴染みのある言葉だが、納税をされた税金は何に使われているのだろうと疑問に思った。

調べてみると、ふるさと納税で納税をする際にその使い道を本人が選択できるようになっている自治体もあるそうだ。ふるさと納税によって集められた税金は自治体によって異なるが、子育ての支援や交通環境の整備、農林業や地場産業の復興など様々な用途で使われていることが分かった。それだけではなく震災の復興を目的に寄与されている人もいることに私は感動した。

ここ最近の出来事では、令和四年三月十六日に起きた福島県沖を震源とする地震において、宮城県登米市は最大震度六強を記録した。停電や断水、道路の陥没等、ライフラインに大きな被害を受けた。その被害の一つで気になる記事を見つけた。昨年放送されたNHK連続テレビ小説「おかえりモネ」のロケ地にもなった長沼フートピア公園でシンボルとして長年親しまれてきたオランダ風車「白鳥」の破損の被害を受け、早期復興を目指しふるさと納税を通してクラウドファンディングを行っている。寄付した後はその地域の食事券などがお礼品として返ってくる。だが、この記事の応援メッセージというコーナーにはお礼品だけを目的とせず、公園のシンボルを心待ちにして一刻も早い復旧を願っていると何件ものメッセージが寄せられていた。人々が一丸となって復興を願い、行動をしている姿というのは本当に素晴らしいものだと感じた。

日本は地震も多く、災害が絶えない。だがその度に人々が互いに手を取り合い、寄り添って、今の日本を築き上げてきたことこそ日本の誇りだと思う。

私はまだ納税をすることはできないが、将来は一納税者として税金に知識と関心を持って税金を納めたいと思う。そして、社会人となればふるさと納税を利用して、微力ながらも私達の生活を支えられるそんな人に私はなりたと思う。

私は、この夏の書道コンクール「中学生の税についての書写」に応募するにあたって、「納税準備預金」という課題を選んだ。この字を書いてみたい、という単純な思いで書き始めたが、筆を持ちながら、ふと考えた。納税準備金って、どういうものだろう。

納税準備預金とは、国税や地方税の納付に充てることを目的として、金融機関に預けるお金のことだそう。納税する時に資金がないと慌てないために、別に口座を設けて預けておくことで、利子が非課税になったりするメリットに加え、安心して納税することができる仕組みだ。現在は、この制度を廃止している金融機関があるので注意が必要だが、考え方として、納税のためのお金を別に確保しておくことはとても大切なことだと思う。書道を通じて、また一つ、大切なことを覚えることができた。

親から自立して、社会人として生きていくことになった時、私達は納税の義務が生まれる。納税は国民の三大義務の一つだから、当然のことだ。私達が安心して暮らせるのは、警察や消防の存在があるからであり、水道や道路などが誰でも公平に使用できるのも、国民から集めた税金があるからこそだ。また、私達が教育や医療を差別なく受けられたり、老いた時には介護サービスに支えてもらえるのも税金のお陰なのである。身近なことでは、今年の四月から萩市の中学生は給食費が無償になった。中学生は塾や部活でお金がかかる時なので、とてもありがたい制度だと思う。そして、ここにも税金が充てられていることに、私達はもっともっと感謝しなければならない。

税金とは、「社会の会費」であると聞いたことがある。とても納得のいく言い換えだ。社内の一員として生きていくならば、会費を払うのは当然であり、支払期限を守らなかったり、払おうとしないことは、社会全体に対する迷惑なのだ。会費も払わずに日々を安心して暮らそうなんて、虫のよすぎる話である。社会人ならば、社会に迷惑をかけてはならない。

私は将来、自分が税金を払う側になった時、お金を気持ちよく納め、そしてすっきりとした気持ちで生きていける自分でありたいと思う。そのためにも、自分なりの納税準備預金は抜かりなくしておこう。また、十分に理解した上で納税をするために、税についてもっと知識を深めたいと思う。税金は「取られるもの」ではなく、「納めて当然のもの」と自分が心から思えるよう、社会の動きや税金の使われ方にしっかりと目を向けていきたい。

七月二十日、第二十六回参議院選挙があった。新聞には各党の公約が記されており、それを見た僕は、特に消費税についての減税を公約として掲げる党が多い印象を受けた。正直税金については、昔、百円玉を握りしめ初めて百円ショップに買い物に行ったあの日からあまり良い印象を持っていなかった。だから消費税の減税に、僕は賛成していた。

そんな中、母が新型コロナウイルスに感染し、僕たち家族は一週間の外出自粛を余儀無くされた。僕の家は育ち盛りの三人兄弟を擁しており、すぐに家の備蓄が無くなってしまうのは目に見えていた。日に日に不安や焦りは募り、心に余裕はなくなっていった。そのせいか、兄弟と喧嘩をすることが増え、家の雰囲気はだんだんと暗くなっていった。家の備蓄はあと少しになり、止むを得ず外に買い物に行くことも視野に入れ始めていた。が、ある日家にダンボール三箱分の生活支援物資が届くと共に、状況は一変した。ダンボールには食料品はもちろん、マスクやティッシュペーパーなど不足していたものがびっしり入っていた。久しぶりに僕達はお腹いっぱいになるまで食事を摂ることができ、満足感と安心で満ち満ちとした気持ちになれた。

母の症状が落ち着き、事が一段落した後、あの日のダンボールについて調べてみることにした。すると、あれは保健所から送られてきたものだということが分かった。さらに調べていくと、あの三つのダンボールは税金で賄われていたということが分かった。僕はそのとき、小さい頃によく見ていたアニメの主人公を思い出した。その主人公の、お腹の空いている人々に自らを犠牲にして食べ物を与える、そんな優しい姿が大好きだった。僕はそんなヒーローに強い憧れを抱いていた。今回の出来事を通して、それはおとぎばなしなんかではなかったのだと知れた。このとき初めて、税金ってすごいんだな、と思った。今までうっとうしかった税金に対してのイメージは百八十度変わった。

僕は今、消費税の減税について反対だ。買い物をするときや財産を相続するとき、手元に残るお金は減ってしまうかもしれない。だけどその分、困っている人を助けてあげられるかもしれない。困っている人から見ると、税金を納めている僕たちはヒーローに見えているかもしれない。「かもしれない」でも十分。ただそれを想像すると、当たり前買い物をして税金を納めることが特別誇らしいことに思った。誰かのヒーローになることも、案外悪くないかもしれない。

誰しも一度は、「本当に“税金”って必要なの？」と考えたことがあるでしょう。私も昔は、“税金”と聞くと嫌なイメージを持ってしまっていました。

七年ほど前のある日、一〇〇円のおこづかいをもらった私は、うきうきしながら近くのスーパーマーケットに行きました。ところがほしかったおかしは一〇八円ばかりでほとんど買えなかったのです。しずんだ面持ちで家に帰ると、心配した母が

「みいちゃん、どうしたん？」

と私にたずねました。それで私は、今日あったことを事細かく伝えました。すると母は、

「そっか、消費税のことも考えて渡せば良かったなあ。」

“消費税”を初めて聞いた私は、

「消費税って何？」

と聞きました。母は答えてくれましたが、その頃の私には、あまり意味が分かりませんでした。でも、“税金”の嫌な記憶はずっと残っていました。

あの出来事から数年後、小学校で税金について学ぶ授業が始まった。そこで、私の“税金”に対するイメージが、大きく変わりました。特に、税金の具体的な使い道を知ったことが大きかったからのように思います。最初は少し憂鬱な気分で聞いていた私ですが、

「この学校にあるほとんどの物が税金で作られているんだよ。」

という先生の言葉で「“税金”って凄い！！！」とイメージが一八〇度変わりました。

あの授業が無ければ、乏しい知識と少しの体験だけで“税”のことを判断したままだったのかと思うと、自分で払う税金が少ない内に、考えを改められたのはとても良かったと思っています。その時は、それで終わりましたが、今回この作文を書くにあたって“税”についてもう少し調べてみると、また新たな発見がありました。それは、“消費税”は広く公平に税金を負担しようという趣旨のものだということです。税で悲しい思いをした自分視点では、所得の無い子供等も払わなければいけないのにどこが公平なんだと言いたい気持ちをおさえて読み進めていくと、そこに答えはありました。

「収入が多いからと一方的に多くを支払わなければいけない所得税より、たくさん買った人が多くの税金を支払う消費税の方が意味公平だ。」
なんだかしてやられた気分になりました。

悔しいですが、こうしてみると私の成長のとなりにはいつも“税金”がいました。苦い思い出もありますが、新しい発見をあたえてくれます。私にとって、“税”は『自由』です。税金によって守られている行動の自由はもちろん、私にとっては『自由な発想』というのもあります。だから私には“税金”が必要です。

正しい納税は父の叶えた夢の続き

さぬき市立さぬき南中学校 3 年 佃 幸樹

我が家の押し入れの中にしまってあった昭和 63 年度の卒業アルバム。少し色あせた緑色の表紙をめくると、過ぎた日の昭和の香りがしたような気がした。アルバムの扉を見た私の目を釘付けにする昭和のエモーショナルな風景。今は廃校となり取り壊されたかつての校舎。校庭の片すみで堂々と存在感を示している大きなイチョウの木。そして更にページをめくるとアルバムに映っていたのは、コロコロと太っていて日焼けした笑顔の少年。あ、お父さんだ。35 年前の私の父だった。

父は将来の夢を書く欄に「車屋になりたい」と個性的な文字で書いていた。

そこから時は進んで 18 歳になった父は、ある大きな企業に就職した。そこで 10 年間、自動車の钣金と塗装に携わる仕事を続けた。会社では仕事に必要な技術と、人間関係のほろ苦さと、お客様に喜んでもらえる幸せを学んだそうだ。そしてその 10 年間の修行の経験は何事にも変えられない宝物となったそうだ。

29 歳で独立し、法人として会社を立ち上げ自社工場を持ち、車屋になる夢を叶えた父。心に決めていた事があったそうだ。それは国民三大義務である「納税の義務」を正しくする事だ。

前に父は私にこう話してくれた。

「お父さんの仕事でな、一番大事な事は信頼と信用のある会社にする事や。信頼はお父さんの職人としての技術力や。信用は、お金を稼いだら正しく税金を納める事や。信頼はお客様に、信用は世間様に向けてあるんや。」普段はひょうきんな父だが、この時は真剣に私に自分の信念を教えてくれた。

また、父の会社は有限会社なので年に一度国や地方に法人税も納めている。そして納税額や消費税の支払い期日、確定申告等もうっかり忘れないように税理士さんを雇いきちんと経理を管理してもらっているのだ。理由は夢を掴んだからこそ正しく納税したいから。夢を叶えたからこそ、その夢を継続させたい。納税の義務を果たしたいと父は言う。

「2 年前、コロナの影響で売り上げがかなり落ちた事があったんや。でも、お父さんが困った時に真っ先に助けてくれたんは国だったんや。」

そう、国から持続化給付金を頂いたのだ。仕事が激減して苦しかった期間、父の会社は税金によって助けられた。それは、父が納税の義務を果たしているからこそ、お金を受け取る権利があるのだ。納税する事で誰かを助けたり、助けられたりしているんだと思う。

令和 4 年度の国の税収のトップ 3 は消費税、所得税、法人税だ。父はこれらの全てを正しく納税しており、私は父を誇りに思った。

「いやあ、しっかり働いた後のビールはうまいわあ！あ、お父さんこのビールの税金もちゃんと納めたで！酒税な。」

そう言って笑う父の姿は、あの日コロコロと太った少年が見た夢の中にいる。

平等に医療と教育を受けるために

今治市立北郷中学校 3 年 越智 直太朗

僕の母子手帳には、出生時に早産児、新生児仮死と書かれている。お腹から出たら「オギャー。」と泣くはずが、声を上げず、看護師さんが慌てた様子で、別室へ運んで行ったという。その後、適切な処置が行われたおかげで呼吸をするようになったが、一ヶ月近く、NICU（新生児集中治療室）に入院することとなった。そこには、赤ちゃんの呼吸や心拍、体温を管理するための特別な機械や設備が整っており、先生や看護師さんが二十四時間体制で、治療やお世話をしてくれたと聞いた。早産で生まれた僕は、呼吸中枢が未熟なため、時々呼吸が止まることがあったからだ。呼吸が止まると、機械が警告音で知らせるため、すぐに対応してもらうことができた。おかげで、僕は今、元気に生活できている。しかし、そんな設備の整った場所に、一ヶ月も入院していたならば、金銭的に大きな負担になったのではないかと思う。だが、日本では、乳幼児医療費助成制度や、その他の公的制度を利用すれば、医療費は、ほぼ発生しないと聞いた。僕は、なんだかホッとした。

日本では、生まれた赤ちゃんのうち、四パーセント（二十五人に一人の割合）が、NICUに入ると言われている。もし、医療費を全額負担しなければならなかったら、高額な費用を払えない家庭も出てくるだろう。そうなったら、生まれた命をどうするかという究極の選択を迫られることになるかもしれない。そんなことが起こらないようにするためには、助成制度を守る必要がある。そして、制度を守るためには、皆がきちんと税金を納めることが大事になってくる。

税金は、僕が通う学校でも、あらゆる所で使われている。校舎の建築費、教室の備品、教科書やタブレット。一昨年から設置されたエアコンもその一つだ。エアコンがついたことによって、酷暑でも、快適に学習に取り組むことができるようになった。塾に行けば授業料がかかるが、小・中学校は、皆が無償で授業を受けることができる。こんなふうに、僕たち子どもに税金が使われる理由は、しっかりと勉強ができる環境をつくり、教養を身に付け、文化を育みながら、日本の未来を担ってほしいという思いからだろう。

今の僕が、社会に対して出来ることは少ない。しかし、病院で助けられ、学校という安心して勉学に励める場所があることに感謝し、一生懸命勉強し、将来、少しでも社会の役に立てる人間になれるよう、努力することはできる。

日本には様々な税がある。そして、僕たちの命や生活を支えてくれている。そこには、多くの納税者の力がある。次は、自分たちの番だと思う。この先もずっと、みんなが平等に、教育や医療が受けられるように、僕は、将来就職して、納税という形で恩返しをしていきたいと思う。それが、僕のような子供たちの未来を守ることにつながると信じて。

故郷の豪雨災害から学んだ税金

福岡市立高取中学校 3 年 山口 桜介

私の親戚の住む福岡県の朝倉市や東峰村、大分県に大きな被害をもたらした九州北部豪雨からこの夏、丸五年がたった。当時小学四年生だった私の記憶にも、衝撃の光景が未だに鮮明に残っている。観測史上最も多い雨が降り、山の至る所で土砂崩れを起こし、大きな木を根こそぎ倒し、濁流となって民家を襲った。幼いころ遊んだ豊かな自然や田畑は流木やがれきで破壊され、道路や橋、川も壊され、目を疑うような変わり果てた景色に子どもながら心が痛んだ。あの時、孤立した集落には自衛隊がヘリコプターで援助に入り、行方不明者の捜索には警察や消防、自衛隊が入り、被災者の支援には全国から自衛隊員が駆け付け、被災地の復興には多くの土木作業員が対応にあたった。いても立っても居られず私も二回、果物畑に積もった土砂のかき出し作業のボランティアに参加した。

これらの復旧復興作業には多くのお金がかかり、多くの税金が使われていることを知り税金の重要性を知った。活躍した自衛隊や警察、消防の活動費や人件費、装備費の多くは税金でまかなわれており、すなわち、私たちが納めている税金も使われてきたのだ。例えば、自衛隊にかかるお金は国の防衛予算であり、当時約五兆円の防衛予算の一部がこの豪雨災害のためにも使われ、自衛隊によるヘリ救助や重機を使った捜索や給水活動などの支援に充てられていたのである。

この豪雨災害の農業関連の被害額は福岡県で約一一九億円、道路や橋などの土木関連被害額は朝倉市で約一三二億円、東峰村で約二〇億円とも言われ、そのお金はどうするのだろうか、本当に復興は出来るのだろうか、と私は絶望の思いになっていた。

あれから五年が経ち、朝倉市の被災した道路や河川は原型復旧工事がほぼ完成し、国が五年間で約一六七〇億円をかける緊急治水対策事業も完了に近づいているという。ここまで早く復興が進んだ背景には、農業関連被害を激甚災害に指定し、復旧工場の国の補助率が約八〇%から約九五%に引き上げられたことや、土木関連被害を局地激甚災害に指定することで復旧費用の補助率を約八五%に引き上げたこともあると知った。このことにより、復旧工事に早く取りかかることができただけでなく、農業ハウスの再建や農機具の購入など生活再建の費用補助にもつながった。

私はこのことを知り、個人ではどうにもできないことが国の支援によってスピーディーに前進し、日本の底力につながっていることを学んだ。その力の源こそが我々の納めている税金である。

ところで、わが家では父や母がよく「税金をとられた」と言っているが、税の仕組みや使われ方を知ると、税は「とられる」のではなく、「納める」ものだという思いも強くなった。我々の生活に役立っている税の捉え方も家族で見直したい。

御年九十二歳の曾祖父、御年八十八歳の曾祖母。まだまだ元気な二人を家族で介護している。今でこそ、介護保険の恩恵を受け二人共快適な生活をしているが、一年前までは大変だった。その実体験を書いていきたいと思う。

二人はとても頑固で最高のコンビネーションを持っている。一人が嫌がる事は二人共、満場一致の嫌。ケアマネージャーさんの説得も空しくデイサービスに行くのは気まぐれだし、介護ベッドも

「日本人やから布団が良い。」

と、頑なに拒み和室に布団という昔ながらのスタイルで生活していた。何も聞く耳を持たず、頑固に、自由に、元気に、気ままに。

転機となったのは、夏のうだるような暑さ。

「エアコンは勿体無い、扇風機で上等。」

そう言って私達がつけたエアコンを、すかさず消す。オン、オフ。オン、オフ。これを一日何十回と繰り返し、とうとう軽度の熱中症になり、二週間夫婦二人で入院する事になってしまったのだ。水分補給が不十分だったのか、無理矢理にでもエアコンを付けて見張っておけば…。後悔の念が押し寄せる。

そんな時だ。ケアマネージャーさんが提案してくれた「自宅大改造計画」。エアコンの件のお説教は主治医の先生にお任せして、私達は自宅をより安心して介護のできる場所へと変えましょう、そう笑顔で励ましてくれた。それから退院までの約二週間は何度もケアカンファを行い生活動線を考えながら介護福祉用具のカタログを見て部屋を作りあげていった。

「こんな物まで借りれるとね。」

曾祖父と曾祖母は部屋を見渡ししながら目を輝かせた。転倒防止に取り付けた突っ張り式の手すり、ソファ横の補助手すり、長時間寝ても体が痛くなりにくいベッドとマット。私達を呼びたい時のワイヤレスチャイム、曾祖父の三点杖も月々格安でレンタルでき、壁の手すりや入浴の椅子、段差を無くすスロープは一割負担で購入できた。少子高齢化が進む中、本当に有り難い制度だと痛感した。曾祖父母が、祖父母が、両親が、北九州市の人々が納めた税金のおかげで安心して曾祖父母が暮らせる環境作りを行うことができたのだから。税金は、目に見えない形の無い、どこか自分とは無縁な物と感じていたけれど、私の住む町、北九州市を見渡すと普段目にする公園や道路、施設や毎日のごみ出し、美しい町並み、生活のありとあらゆる物が税金によって支えられている。子どもから、曾祖父母の様な高齢者まで、みんなが笑顔で暮らせる街作りを行う税金。人と人との支え合いで明るい未来を作る制度を体感した私は、目の前に広がるこの街をより良くする為に、今日から一步一步前進していこうと思う。いつの日か大人になった時にはきちんと納税をして、今度は支える存在になりたい。

「税」と生きる

北九州市立尾倉中学校3年 江口 このみ

私は税金に対してあまりいいイメージがなかった。私の知らない誰かのために、私が払った税金が使われている。そう考えると、少し不満だったのと思う。しかし、ある出来事が私の考えを変えてくれた。

それは、兄がコロナウィルスに感染したことだ。兄は家から離れた地域で働いているため、一人暮らしである。だから、感染したと分かったとき、私は不安になった。もし、自宅療養中に体調が悪化すると誰にも頼れないのではないだろうか。買い物に行けない中、食事はきちんと取ることができるだろうか。様々な不安が募る中、宿泊療養施設の存在を知った。自宅療養が困難な人が、ホテルなどの宿泊施設で支援を受けられる場所だ。親の勧めもあり、兄はこれを利用することになった。利用している間は、毎日食事を用意してくださったり、看護師が体調確認をしてくださったりした。これらは全て無償で提供されていた。税金が使われていたのだ。私はそのことを知ったとき、今まで自分が考えていたことが恥ずかしく感じた。兄は、多くの人が払った税金によって支えられたのだ。それから、税の仕組みや問題について調べるようになった。

ニュースを見ていると「脱税」という言葉をよく耳にする。脱税とは、納める必要がある税を納めないことである。原因は大きく二つあると思う。一つは、知識不足だ。税について理解が薄いと、自分が税を納めていないことにも気付けない。無知であることは怖いのである。大人になったとき、知らなかったと言わないために、私たち子供も税について学ぶことが大切だと思う。もう一つは、自分の利益を優先する気持ちだ。お金が欲しいという欲から脱税に手を染めてしまう。しかし、日本には納税の義務があり、脱税は決して許されることではない。脱税をする人を減らすためにも、税に対して前向きな考えを広めることが解決策の一つだと思う。

税を納めることは、「優しさ」と「感謝」を納めるという意味だと思う。「優しさ」は税金を必要とする人や地域に届いてほしいという願いを込めて。「感謝」は税を納める人に、私の暮らしを支えてくれて、ありがとうの気持ちを込めて、私たちが生きる社会は税を通して支え合っているのだ。税金がなければ、学校や消防、救急活動などが当たり前存在する社会ではなくなってしまう。当たり前を守り続けるためにも税は必要である。

私は兄の出来事をきっかけに税に対する意識が大きく変化した。苦と感じていた税を前向きに捉えるようになった。私の納めている税は、消費税だけである。しかし、私にできることは、税を納めることだけではない。税について学び、考えたことを周囲に伝える。これが、今の私にできる最大の社会貢献であり、税と共に生きる鍵となると思う。

我が街、平戸の税収を考える

佐世保北中学校 1 年 平賀 士圓

僕の将来の夢は平戸市役所の職員になって平戸市をよりよくするというものです。そのため僕は今、将来に役立つ情報として平戸市の課題や、解決した課題をどのような方法で解決したのかなどを徹底的に調べています。税についても興味があったのでそれをもとにこの作文を書きたいと思います。

僕が特に興味を持ったのが平戸市の税の収入についてです。収入は令和二年で約二五九億円でした。二五九億円の中で平戸市の自主財源、いわゆる平戸市が自ら確保しているお金はなんと全体の約二五%の約六五億円しかないのです。残りの七五%は国からもらう地方交付税、県からもらう県支出金などでまかっています。これはかなり深刻な問題だと僕は考えます。なぜなら、地方交付税などの依存財源は条件付きでもらうのがほとんどだからです。例えば、国から一億円の学校教育用のタブレット端末の地方交付税が送られてきたとします。そしてこの一億円はタブレット端末以外の用途には使えないのです。とゆうことは平戸市が自由に使えるお金は、二五九億円の収入の中でもたったの六五億円だけなのです。だから例えば市民から「公衆トイレをもっと多く建設してほしい」などの要望が来たら簡単に受け入れることはできないのです。また平戸市はどんどん人口が減っているので市民税の納入額も減ります。すなわちこれからもどんどんと地方交付税に依存してしまうと予想されるのです。

これを解決する方法は二つあると思います。一つ目は平戸市の人口を増やすという解決方法です。市の人口が増えれば当然市民が市に納める市民税も増えます。しかし、人口を増やすということはかなり難しく僕も完璧な答えは出せていません。けれども二つ目の解決方法が平戸市を救うカギになると僕は考えます。それはふるさと納税の寄附額を上げるという方法です。平戸市は二〇一四年にふるさと納税が全国一位になりました。その年の納税額は約一四億円、その翌年は全国七位で市の中では最高の二六億円でした。僕は最初、「一位だった年の返礼品をまた使えばいい」と思いました。しかし、ほかの市町村が平戸に負けないうにと自分の町の特産品を最大限にアピールしているので人気が自然と落ちてしまうのです。だから使い回しはできません。そこで僕は、平戸でしか味わえないもの、すなわち自然体験活動をふるさと納税の対象にすればいいと思います。例えば「沢登り招待券＋キャンプ場宿泊券」などと気軽に平戸に旅行に来ることができるようなものを返礼品にしたほうが良いと僕は考えます。

ここまで話してきたのはあくまで僕の意見です。この中にも何かしらの欠点などがあるかもしれません。このような市全体に関することは一人で解決するのは難しいのです。みんなで話して行動に移す、それが一番大事だと僕は考えます。

沖縄旅行で考えた税金のこと

熊本大学教育学部附属中学校 1 年 小島 万和

「わあ、いた！」

ここは沖縄県国頭村にあるヤンバルクイナ生態展示学習施設「クイナの森」だ。夏休みの家族旅行で私は初めて本物の山原水鶏（ヤンバルクイナ）を見た。全長三十五センチメートル、体重五百グラムの彼の名前は『クー太。』想像していたよりもずっと小さかったが赤い目とくちばし、胸から腹にかけて白黒の縞模様のクー太はとても美しかった。山原水鶏は国指定天然記念物で、その保護や活用には文化庁が関わっているそうだ。タブレットで『天然記念物』を検索すると、単に保護活動だけではなく、天然記念物に親しみ、教材として活用するための施設の整備も含む制度であることがわかった。こうしてクー太を見て、ガイドの方から説明を受けることができるのもその制度のお陰だと思った。その後、私たちは沖縄本島最北端の辺戸岬へ車で向かった。途中、山原水鶏の描かれた「動物注意」の標識を何度も見た。道路上で起こる野生動物の死亡事故をロードキルといい、山原水鶏のロードキルも増えているというガイドさんの話を思い出し、胸が痛んだ。

『やんばる国立公園』と書かれた看板が見えた。国立公園って何だろうと思って再度タブレットで検索すると、すぐれた自然を守り、後世に伝えていくところで、国が指定し、保護・管理を担っていると環境省のHPにあった。遊歩道の脇には亜熱帯植物が緑を輝かせ、真っ青な夏空には入道雲、エメラルドグリーンの海がとても綺麗で、私は何度もタブレットで写真を撮った。駐車場から岬まで家族みんなで歩いたが、舗装された遊歩道があり、岬には安全柵もあったので、五歳の妹も安心して絶景を楽しむことができた。帰りの車中、私は撮った写真を見ながら、父に言った。

「国立公園ってすごいね。やっぱり国のお金って偉大だね。」

「そうだね。だけど国のお金ってことはみんなが納める税金が使われているってことだよ。税金をちゃんと納めているパパが偉大ってことかな？」
運転中の父が笑いながら言った。父との話で私は小学生の夏休みに法人会の主催する税の勉強会に参加したことを思い出した。買い物体験で消費税の仕組みを教えてもらったのだ。「万和も消費税を払っているから偉大だよ。」と私が言うと、家族みんなが笑った。

飛行機や車、タブレットで旅行を楽しみ、山原水鶏や綺麗な海に心を踊らせ、家族の笑顔があふれた沖縄旅行。私達が発達した生活を保ちながら自然を守ることの難しさを感じたが、だからこそ私達自身がその解決策を考え、実行していかなければならないと思う。税は科学技術の発展だけでなく、自然環境の保護にも役立っている。税を考えることは環境問題の解決にも繋がる。この偉大な税を最大限に活かすことが我々の責務だ。

「税金のおかげで」

志和池中学校 3 年 堤 福仁

僕は、脳性麻痺の病気で、車椅子生活です。そのため、障害児福祉手当と特別児童扶養手当というお金を国からもらっています。これは、みんなが一生懸命に働いて国に税金として納めたお金から、いただいたものです。僕はそのお金を、足の装具や歩行するための杖や車椅子等、僕の生活に必要な物に使っています。

僕が成長する度に、足の装具は、毎年新しく作ります。車椅子は、三、四年毎に、新しく作ります。どちらも十万円以上かかり、車椅子は、三十万円以上の費用がかかります。それでも、税金のおかげで、僕は一割負担の支払いで済みます。とてもありがたいです。

しかし、僕はついつい、物を雑に扱ってしまう所があります。車椅子に乗っている時、周りをよく見ない物にぶつかったり、急ブレーキをかけたりしてしまいます。その度に、父や母から、「車椅子は、大切に扱いなさい。この車椅子は、みんなの納めた税金で買ってもらったんだよ。」

と注意をされます。

初めて車椅子に乗った時、自分一人で動きたい時に動けるということに、うれしい気持ちでいっぱいになりました。そんな車椅子生活になって、もう十年経ちます。今では、車椅子が、僕の物であるという事が当たり前になっています。僕が、今こうして生活出来ているのは、たくさんの納税者のおかげでもあると思います。

日本には他にも、僕のような障害者に使われている税金や税金の減免制度等がたくさんあります。調べたら、僕の身近では、自動車税減免、J R 運賃の割引、有料道路通行料金の割引、航空運賃の割引、バス運賃の割引、公共施設の使用料、駐車場料金の割引等があります。これも、税金のおかげ、たくさんの納税者のおかげです。

税金は、国民の「健康で豊かな生活」を実現するために、国や地方公共団体が行う活動の財源になるそうです。人は一人では生きていけません。特に、僕たち障害者は、人の手助けが必要です。税金は、社会で生きていくための「会費」だと思います。

僕は車椅子生活で歩くことはできません。それでも、リハビリを頑張って、生活の中で自分で出来ることを増やして、勉強もして、大人になって、ちゃんと働けるようになります。僕が働いてもらったお金で、税金をちゃんと納めて、国民のために使ってもらいたいです。

税金は支え合い

沖縄県立開邦中学校 3 年 中村 有佐

「あ、そうそう。このピンクの紙、忘れずに持って行ってね。」

私はある病気を抱えている。特に直接命に関わるような大きな病気ではないが、去年から治療を続けている。しかし、自分に合う薬が見つからず、毎月通院をしなければならない。私の場合、一回受診し、薬を受け取るだけで一万円近くかかってしまう。治療するために必要なのは分かっているが、それを親に毎月払ってもらうのは、少なからず後ろめたさがあった。この病気にかからなければ。そんな治療に対して少し悲観的になっていた私の気持ちを変えてくれたのは、一枚のピンクの紙だった。

私が住む地域では、今年の四月から、こども医療費助成制度の対象が中学校卒業までの児童へと拡大された。これまで通院する場合の医療費の負担は三割だったが、ピンクの証明書を病院で提示すれば、全額負担してくれるようになったのだ。このことにより、私の病気への後ろめたさは軽減された。治療に対して前向きな気持ちになれたのだ。

これは、「税金」があってこそのことだ。もし税金がなければこのような制度は作られなかっただろうし、私の気持ちの変化も起きなかっただろう。もしかしたら、治療に対しての負の感情が増えていたかもしれない。このような制度のおかげで治療に対しての負担が減った親や子供も多くいるだろう。また、私のように病気に対して前向きに向き合えるようになった人もいるだろう。

このような出来事から、私は税金の大切さを改めて感じさせられた。また、以前は、税金は大きな事業で使われているのだろうと遠い存在のように感じていたが、こんなにも身近で私達を支えてくれていたのだと気付けた。また、税金を納めることは、誰かを勇気づけ助けられることと同じで、目には見えない人と人との支え合いなのだと思う。正直、消費税が引き上げられた時は少し不満もあったが、それだけ支えられる、助けられる人が増えたのだと考えると、税金を納められることに対して、誇りを感じられるようにもなった。

私は今、税金があるからこそ、学校に通えて学習もでき、怪我や病気になれば医療機関を受診し、治療を受けられる。これは、今、税金を納めてくれている人がいるおかげである。だからこそ、私は将来、税金によって今を支えてくれた全ての人達、これからの未来を担う次世代の人達に対して、恩返しやサポートの意味として、税金を納められるようになりたい。そして今後、税金を通して支え合いの心が広がってほしいと思う。

私の家族を支えた税金

千歳市立富丘中学校3年 板坂 優衣

あなたは、「幸せ」と聞くと、一体何を思い浮かべるだろうか。

私の家は母子家庭だ。母は、私が4歳の頃から、ずっと一人で私と姉を育ててくれた。母の仕事の都合で私はそれまで通っていた幼稚園から保育園に転園することになった。転園してまもない頃は、友達が一人もない保育園に行くことを毎朝のように嫌がって泣いていたことを、今でも申し訳なく思っている。

母子家庭になってから、環境の変化を感じることは多々あったが、生活に不満を抱いたり、不自由だと感じたりすることは一度もなかった。それは、小学校に上がってからも同じだった。小学校に上がってからは、援助についての書類を目にすることが多くなり、自分の家が母子家庭だから、税金から援助を頂いているということを知ったが、こういった内容なのかまでは知らなかった。

ある日、中学3年生で行く修学旅行にかかるお金の額を知り、心配になり母に聞いてみた。すると、「就学援助制度」という学用品費や給食費、修学旅行費など、就学に要するさまざまな費用を援助してくれる制度にお世話になっているということを知った。私の知らない様々なところで、数えきれないほど沢山の人の税金によって、私たち家族の生活は支えられていたのだ。さらに、私が日々の生活に不満や不自由を感じることはなかったのは、「就学援助制度」によって、最大限の援助を頂いていたからだを知った。

私は、このことを知ってから、税金を払ってくれている全ての人々に対しての感謝の思いと同時に、もっとはやく自分の生活を支えてくれている制度について知ろうとすべきだったと後悔をした。

私は、「幸せ」ときくと、「日々の日常」ということを思い浮かべる。「日々の日常」は、決して当たり前のことではなく、身近な人はもちろん、遠く離れた誰かなど、様々な人の支えによって成立しているものなのだというのを、税金の使われ方を通じて学んだ。

私は、私の就学を支えてくれている人々の思いにこたえることができるよう、社会に役立つ知識をつけ、貢献していきたいと思う。

そして、自分が税金を払う立場になったときには、誇らしい気持ちでいようと思う。私が払う税金は、いつか誰かの支えとなるはずだから。

祖父母と私をつなぐ税金

中山町立中山中学校 3年 今田 寛花

私には大好きな祖父と祖母がいます。祖父母は私が部活動や勉強で良い結果を収めることができた時に、誰よりも一番喜んでくれます。一方で、私が落ち込んでいたり、悩み事を抱えていたりした際には、親身になって私の話を聞いてくれます。祖父母が私のそばにいてくれるだけでなんだかほっとします。そんな祖父母は私にとってかけがえのない存在です。

しかし、二人とも持病をかかえています。そのため、毎日三回、沢山の種類の薬を飲んでいきます。例えば、がんや肺炎の進行を抑制するための薬などがあります。中には一錠四千円以上する高価な薬もあります。これらの薬は、祖父母の命をつなぐ大切な薬です。しかし、沢山の種類の薬を飲んでいる分、薬にかかる費用も多額です。そのため、収入の少ない年金暮らしをしている祖父母には支払うことが難しい金額です。

しかし、国が社会保障の一貫として医療費の一部を負担しているため祖父母は安心して薬を飲むことができます。このように、国では社会保障の一貫として、一般または低所得の七十五歳以上の高齢者の医療費の九割を負担してくれています。さらに、祖父はデーマービスにも行っているため、医療費だけでなく介護費も一部国に負担してもらっています。日本に税金があるおかげで祖父母は命をつなぐことができます。そして私は祖父母とお話をしたり、一緒にご飯を食べたりして楽しい時間を過ごすことができます。

もし、日本に税金がなかったら、きっと祖父母は今まで生きてこれなかったと思います。今、私がこうして祖父母と楽しい時間を過ごすことができるのはまぎれもなく税金のおかげです。

世の中には、増税に対して不満を抱く人もいます。しかし、少子高齢化が進む今、国が負担する医療費や介護費などが増加しているのは事実です。そのため、それにともなって税金が増加するのは仕方のないことだと思います。税金は払って終わりではなく、その自分が払ったお金が回り回って自分だけでなく自分の家族や大切な人の支えになっているのだと思います。

私にとって税金とは、祖父母と私をいつまでも一緒にいさせてくれる大切な存在です。年齢を重ねて一人暮らしをしたり、自分でお金を稼ぐようになったりすれば支払わなければいけない税金も増えていきます。その時には、私の祖父母がしてもらった社会保障を次は祖父母の代わりに私が誰かにしてあげたいです。そして、国民全員が安心安全な生活を送ることができるように私も協力していこうと思います。

税と向き合う

三条市立大崎学園 9 年 齋藤 陽稀

「税金」について考えても何も思い浮かばなかった私は、インターネット等で調べたところ、日本には四十種類以上もの税金があり、国民全員が納めています。その中でも私達にとって一番身近な税は消費税です。今まで何気なく納めていた消費税ですが、そのお金はどこで使われているのかというと、医療などの社会保障関係費や、道路や建物を整備するための公共事業費、教育や科学技術のための文教及び科学振興費など、私達のためになるようなものばかりでした。

中でも、税金の歳出予算が一番多いものが社会保障関係費です。これは、医療・介護や福祉、年金などの経費です。つまり、大きなケガや病気になった時、高齢者や子供の医療費などを税金が補い、安い料金で安心して国民が健康を維持することができます。

私は小さい頃、病気がちでしたが、この制度のおかげで高いお金を払うことなく何度も病院を利用することができたと両親から聞きました。また、私の祖父は腎臓の病気のためほぼ毎日病院に通っていますが、高度な医療を安心して利用できるのも、税金があるからではないでしょうか。このように、私達が納めている税金は、安心・安全で暮らしやすい日本にするため、あらゆる場所で使われています。

そんな、私達の暮らしを支えている税金ですが、税金の支払いとなると、「正直面倒だ」とか、「払いたくない」という不満の声がある一方で、より多くの国の負担を望む声をニュースで多く聞くことがあります。この矛盾する背景には高齢社会の問題と、コロナウイルスの流行が大きく関わっていると考えます。

税金は、主に働いている二十～五十代の人が多く納めています。その一方で高齢者も納めているものの医療や介護などで、税金を利用しています。そんな高齢者が増加する現代では、社会保障関係費が年々増加しています。

加えて、コロナウイルスの流行により、医療やワクチン接種などの対策や、大きな影響を受けたお店やサービス業などの支援のために、多くの税金が使われています。そのため、今後税負担が増える可能性があります。

この矛盾や不公平感を解消するため、みんなが、税金の負担方法や、使い方について、考え、今の社会に合った方法を考える必要があると思います。

税金は、私達が何気なくあたり前だと思っていたような所に使われ、暮らしを支えてくれています。その反面、納めるという事は、時に大きな負担を背負い、不満が生まれる事もあります。大事な事は、お互いに支え合いより良い社会をつくっていくために、税金が正しく使われ、国民のために役立っている事を知り、税金を納める対価とそのありがたさを私達自身が実感し、税と向き合うことです。そして国民全員が社会の一員として税を納めるということが、何より大切だと思います。

「別所線が、再開したよ」そう言う祖父の声は明るくて、電話越しでも、笑顔が想像できた。「やったー。良かったね。」私まで、とても嬉しくなって、思わず大きな声が出た。

上田電鉄別所線。それは上田駅から別所温泉駅間を結ぶ鉄道路線だ。私も祖父母と家族で別所温泉に行ったときに使い、赤い鉄橋は私の思い出の中にある。上田市に住む祖父は毎週、この路線を利用していた。

しかし、三年前の十月。台風十九号により千曲川橋梁が崩落し、運休になってしまったのだ。母から、祖父が時間をかけバスで行っていることを聞いたときは、安心と心配が交ざって複雑な気持ちになった。それが二〇二一年三月に、運転を再開したのである。祖父の電話で、そのことを知った私達家族は、とても温かい雰囲気にも包まれていた。

それから一年以上が経ち、神奈川県土木費のうち二十五・五パーセントが河川海岸費を占めているということを知った。その費用、約二百七十二億円は公共事業に使われる税金のうちの一部なのだ。そのグラフを見た後に、一つの考えが生まれた。もしかして、上田電鉄の復旧にも税金が関わっているのではないだろうか。そう思い、早速調べてみた。

すると、そこには知らなかった事実があった。国土交通省が新たな制度を導入したのだ。この制度により、上田電鉄が保有する鉄道を市有にすることを条件に千曲川橋梁再建が行われていた。交付税措置などで、九十七・五パーセントを国が負担するという政策がとられていたのである。

それまで漠然としたものだった税金が何に使われているか、ということが、少し自分に近付いた気がした。上田電鉄別所線の復旧。これにより、祖父を含む多くの人々の生活が守られたと思う。「復旧復興してほしい」そう思ったのは、きっと私も含めて、その地域の人だけではなかったのではないだろうか。そんな願いを税金は叶えてくれたのだ。

生活・思い出。納税や消費税による税金は、私たちの大切なものを支えている気がする。笑顔、安心。税金は、私たちの幸せを守ることにつながっていると感じる。被害を受けたものや地域の復旧復興。そこには、思いやりがある。所得税の再分配。そこには、助け合いがある。公園や小中学校。そこには、期待や希望がある。そして、そのすべてに人とのつながりがある。そう思っている。

教科書を開けば、私たちが考えれば、学べば、その度に未来が生まれる。可能性が広がっていく。だから、どこまでも駆け抜けてみせよう、と思う。いけるところまで。少子高齢化や人口減少の進行、公債残高の増加。今後、多くの課題に直面するだろう。それでも、きっと私の生きる日本は、持続可能な社会だ。明るい社会だ。そのために、課題に向かっていくのだ。今を信じて生きられる未来を必ず歩けるようにしよう。

僕らの生活を守る税

入善町立入善西中学校3年 草切 琢吾

僕には、兄と姉がいる。僕にとってとても大切な存在で、必ず一番最初に食べたい物ややりたい事を聞いてくれる。僕は、末っ子だから優しくしてくれるのかなと思っていた。

僕は幼い頃、家族旅行で行った東京ディズニーランドで兄や姉と歩き方が違うことに両親が気付いたそう。心配になり、病院受診することになった。僕の体は、タコのように柔らかく、足首、手首など、体の関節ごとに普通の人がそり返すと痛みを訴える範囲まで医師に曲げられてもニコニコしていた。医師は、首をかしげ「レントゲン写真をとみましょう」と言った。すると、踵骨の位置が通常じゃないところにあることが分かった。医師から「この骨の位置だと普通は歩けないんだけどね」と言われ、つま先立ちやスキップなど、医師から指示された運動をこなした。医師から運動機能には問題がないが、手術と装具のどちらかの治療方法を選択するように両親に告げられた。母からは、小さい体に手術は負担であるから装具を使用する治療を選択したことを聞かされた。幼い頃は足底板、今はインソールを使用して足の負担を軽減させている。幼い頃から病院へ通院し、成長するたびに装具の変更が必要になる。治療費は、相当な金額になったのではないかと思った。僕は現在、中学三年生になった。僕が、これからも成長していくためには相当なお金がかかるんだろうと思う。母にこっそりと「小さい時の治療費、装具のお金、すごいかかったんでしょ」ときいた。母はニコニコしながら「ゼロ円よ。国に守られているからね」と答えてきた。ゼロ円とは、どういうことなのか。現在も風邪、野球でのケガなどで病院に受診する時、両親は「ピンクの紙持っていかなん」と言う。ピンクの紙、イコール「子ども医療費受給資格証」のことである。この紙を病院受診の時に提示すると治療費、薬剤費が免除される。つまり、ゼロ円のシステムである。自分達で治療費を支払っていない分、どこから支払われているのか。僕は、子どもの医療について調べてみた。僕たちが生まれてから受けている乳幼児健康診断や予防接種、毎年春にある学校での健康診断は、無料のものがほとんどである。医療費の全てを助成してもらっている。税金でまかなわれていることを知った。今、僕が何の支障もなく大好きな野球を続けられることができるのも幼い頃に医療費負担を感じず、足の治療を受けることができたからである。僕達の生活は、税金と深く結びついていて消費税が上がっても、自分達の生活に還元してもらっている。僕は、身をもって税金のありがたさ、大切さを学んだ。将来、自分達の子供も同じように国に守ってもらえるように、税金制度を知り、しっかり税を納めていきたいと強く思った。

三年後の選択

名古屋市立振甫中学校 3 年 重松 若奈

平成から令和になった事をつい最近の事のように感じている人は少なくないだろう。令和になってから三年がたつ。あの頃、まさか三年後世界を揺らす戦争が起こるとは誰も予想していなかった。

私は今年で十五歳だ。後三年で十八歳になり、選挙権を持つ。私達が誰を選ぶかによって日本の未来は大きく変わる。子どもを育てやすい社会にするのか、自然災害や他国から国を守る力を高めていくのか、私達の一票がこれからの日本を左右することになる。十八歳の時にそれだけ難しい判断を迫られる。たった三年で私は判断できるのだろうか。私達はこの三年間で日本の事世界全体の事を考えることのできる多くの知識が必要となるのだ。

私は誰もが住みやすい日本であって欲しい。ただ、それを実現するには、そして、国を作っていくには、お金が必要だ。国のお金の集め方は税金という形だ。はたして今、国の予算は足りているのだろうか。令和四年度一般会計予算を調べると五十%以上を公債、つまり国民から「借金をしている」状態になっていた。借金は今後どうなっていくのだろうか。色々な疑問が沸いてきた。疑問を解くには今の税金のしくみを理解することが必要だと感じた。

以前公民の授業で税金は公平と公正（平等）のしくみから成り立っていると教わった。

公平の考えに基づいた税には、「所得税」などがあり、これらの税は納める人の収入や家族の人数などの状況によって税金の金額が変わってくる。公正（平等）に基づいた税には「消費税」などがある。これは年齢や収入などに関係なく誰もが同じ税率で税金を納めるものである。

今年の選挙で、公正（平等）な税金の代表格である消費税をなくしていこうという意見を聞いた。片方のしくみだけで国民は本当に公平公正感を感じられるのだろうか。片方のしくみだけで予算は足り、借金は解消されていくのだろうか。税金を減らす公約は、たくさん聞いたが、足りない部分の補い方を提案する人は少なかった気がする。

これからの日本をどうしていくのかにも、色々な考えや方法がある。意見を自由に発言できるのも、日本の良いところだ。その複数ある意見の中から大切な物を選んでいくのが私達なのだ。私が未来の日本を動かす国民の代表者を選ぶ要素として税金の仕組みや使い方の考え方は大きな部分を占めるものになるような気がする。

後 3 年、「日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給」される教科書で勉強させていただこう。

生活と自然を守る税へ

学校法人神戸女学院神戸女学院中学部 3 年 山口 紗来野

毎年夏になるたびに、私は家族と近所の川に蛍を見に行ったことを思い出す。なぜ「思い出す」のかというと、今はもうその光景を見ることはできないからだ。ある年、青々とした草が生い茂っていた堤防はすべてコンクリートで舗装され、住处を失った蛍たちも、それ以降は姿を見せなくなってしまったのである。

税金は、主に上下水道のようなライフラインの安定した供給や、道路整備といった、いわば公共サービスの充実などに使われている。しかしながら、あくまでこれは我々人間が安全かつ幸福な生活を営むためのものである。勿論それは私たちが暮らす上では欠かせないものであり、そこについての批判的な意見は一切抱いていない。ただ、生物多様性という言葉がしきりに叫ばれるこの時代に、私はこの豊かな生活と、自然を守ること、この二つの両立を目指すべきなのではないだろうか考える。

例えば最初の蛍の話にこの「両立」を組み込んでみる。堤防の舗装は我々の安全な生活のためには不可欠なものだ。しかし、ただ舗装をするだけだと、蛍が生きるために必要な環境がすべて失われてしまう。ならば、工事は行いつつも、せめて一部だけでも自然をビオトープとして残してみたらどうだろうか。言うだけなら容易いと言われてしまいそうだが、このまま人間本位の開発が進められ、動植物が追いやられる社会になってしまっただけではいけない。せつかく我が国はたくさんの美しい山々や森林に恵まれているのだから、自然と共生していくことができる社会の実現こそが、今私たちが早急に達成しなければならない目標だと思う。

税金を納めることは、しばしば感謝をすることに例えられる。それもそのはずで、税とは普段私たちが当たり前のように享受している、公共サービスという恩恵への対価なのである。だが、私たちの生活は決してそれだけで成り立っているわけではないと思う。「母なる大地」とも呼ばれるように、生き物としての私たちを守っているこの緑豊かな環境にも、感謝していくべきである。環境保護に力を入れ、自然があふれる社会を守っていくことが、自然に対して私たちができる「感謝」だろう。

しかし、この感謝は税無くして実現することは難しい。国民一人一人がきちんと納税することで初めて成り立つのである。この幸せな暮らしを守り、今日も私たちを支えてくれている自然への恩返しをするためにも、これからもしっかり税を支払い、納めていくことで、少しでも力になればと思う。そして、いつかまた蛍たちが暗闇の中で静かに光り、元気に飛び回るあの美しい景色が見られることを切に願う。

税への感謝と納税の意義

岡山県立岡山大安寺中等教育学校 1 年 友信 丹琴

「税金」これは私たちがものを買った時や親が働いてくれた時に個人や会社が国に納めているお金である。このことは一般常識であるため、ほとんどの人は知っているだろう。

しかし、使われ方を知っていても税金の重さに不満を持つ人が日本には数多くいるようだ。実際、世論調査の結果によると現在納めている税金に負担を感じている人は七三・五パーセントもいる。そして、自分の収入に比べて税の負担額が大きいことや税金のしくみや徴収の仕方が不公平だということに不満を持つ人が多いことも分かった。けれども私たち学生は全国の人々が納めている税金によって生活が支えられている。消費税は私たち子どももよく払っているが、学校や医療関係のことはほとんどが国の税金によって支払われている。教科書や校舎だけでなく、先生方のお給料も全て税金から支払われているため、学生の頃から税金に親しみを持っている人は少人数だと思う。そのため学生は税金の使われ方を知らずに払っていることがよくあると思うが、大人の誰もが知っているとも限らないだろう。何となく知っていたとしても毎日のように払っているお金に関心がないことは決して良いことではなく、むしろ知っておくべき大切なことだ。だから税金に対する正しい知識を得られるように税金に関することを学習できる場を設けていくことが今後必要になると思う。それによって学生の頃から税に親しむことが増えるため大人や社会人になってから税金に対する不満が軽減され、快く納める人が増えたり学生が税金によって支えられていることを当たり前思わず、働く人に感謝できるようになることが増えたりするだろう。そして政治について考える機会が増えて、経済が回りやすくなることにもつながるため国が活性化するだけでなく、効率よくなり安心した生活を全ての人が送れるようになると思う。

今私は教科書を無償で提供してもらえたり、学習を受けられている。しかし、これは誰かの負担によって実現できているため私も税金の使い道を正しく身につけ、大人や社会人となり、税金を払う立場になったときは税金を納めることに負担や不満を持つのではなく、誰かのために行動できることに喜びを感じて快く納め、自分の税金で誰かが幸せになれるよう、願える人になりたい。

世界と繋がる私たちの税金

松山市立南中学校 3 年 梶谷 知花

私はこれまで、海外で起こっている出来事をニュースで見ても、あまり気に留めていなかったんだと気付いた。今年二月に始まったロシアのウクライナに対する軍事侵攻に関しては、多くのことを考えさせられた。

コロナ禍の不自由があるとはいえ、日本に住む私たちは普通の生活をしている。突然の戦争によって、ウクライナの人達の生活は、私が想像するより悲惨なものだろう。何か力になれることはないかと、考えることはあったが、何も実行できない自分を情けなく思うこともあった。

そんな中、ふと流れるニュースが目にとまった。武器をもたない日本は軍事支援はできないが、医療や食料など、別の方法で支援をしているという内容だった。そのお金はどこからきているのだろう。それも、税金ではないか。私も少し関わっているのではないかと思った。

ニュースや国の発表によると、現時点で日本は、防弾チョッキやヘルメット、衛生資材や医療用資器材等の提供。無償の三億ドルの緊急人道支援（保健、医療、食料、保護、復旧等の分野における支援など）。借款で六億ドル（七七二億円）の財政支援。その他、日本への避難民の受け入れや、ウクライナ人留学生に対する奨学金の給付などの、さまざまな支援を行っている。

最近のテレビ番組で、「税金を支払うと、あなたの税金は〇〇に使われました。ありがとうございます。と給与明細に書かれてあると納得するし、気持ちよく納税できるよね」という話があった。まさに同感だった。お礼を言ってほしいわけではないけれど、例えば私の払った消費税がウクライナの人達の助けになっているのであれば、こんなに誇りに思えることはない。

調べていく中で、外務省や国税局のホームページを見ることとなったが、作文を書くというきっかけがなければ、それを見ることはずっと先だったかもしれない。

日本は今回だけでなく、これまでも飢餓や栄養不足に苦しむ発展途上国や、災害の起こった国に対して支援を行っていることも改めて知った。社会の授業で学んだODAがこれだ。同様に私たちも、これまで日本で起こった災害などにおいて、世界各国から支援を受けてきた。

コロナ対策など、日本の財政も余裕ではないようだが、自分だけ、日本だけがよければそれでいいという考え方は恥ずかしい。私たちの税金は、目に見えているものだけではなく、私を含めた誰かのためになっている。世界の人たちが安心して生活できる未来に繋がっていると忘れずにいたい。

私にとっての税

大川市立大川桐英中学校 3 年 田毎 綾花

「いってきます。」

制服姿の女の子がそうやってドアを開ける。彼女が歩く道路はゴミであふれ、信号機がない。整備されずボコボコとしたコンクリートにつまずき、バックから荷物が出る。荷物を拾っているときに気づく。入ってたはずの財布がない。だけど彼女は警察を呼ばない。いや、呼べなかったのだろう。そんな彼女は、とても暗い顔をしていた。

「このように税のない世界は不便なことばかりなんです。」

小学六年生の私は、税について学ぶ授業でこんなビデオを観た。でも、三年前の私にはあまりにも非現実な世界で税の大切さがあまり分からなかった。しかし、あることをきっかけに、税について考えるようになった。それは、祖父の入院だった。

二年前、祖父は持病により突然倒れた。幸い容体は安定し、私は祖父のお見舞に行った。久しぶりに祖父に会えた私は、学校の話や部活の話など、沢山の話をした。その時に祖父が言った

「税金には感謝せないかな。」

私はあまりピンとこなかった。なぜなら、ニュースで増税にみんな否定的な意見を言っており、税とは国民が頑張って働いたお金を奪うことだというイメージがあったからだ。その考えと祖父の言葉はあまりに対照的で、私は税について知りたくなった。祖父は週に三回、人工透析を受けている。その額は一か月で約四十万円。しかし、そのほとんどが税によって補助されているようだ。祖父が倒れたときに、すぐにかけてくれた救急車も、運ばれた病院も、税により補助されていることが分かった。税があるから私は今、こうやって祖父と話すことができているのかもしれない。そう思うと心がしめつけられた。今まで知らなかった税の世界。私はいろいろな所で税に助けられていたのだ。教科書、ワクチン接種、消防、警察、ゴミ収集車、私が好きな公園、私が大好きな学校。どれもこれも土台には「税」があった。私が払っていた税にはちゃんと意味があったんだ。そう思うと、私たち国民はどこかで繋がっているような、支え合っているような気がして嬉しくなった。もちろん、税に対してマイナスな考えを持っている人もいるだろう。だけど、私にとっての税は「ヒーロー」だ。だって、影で誰かの笑顔を守り、誰かの安全を守っている。そして、私に物事を多様な角度で見ることの大切さまで教えてくれたのだから。

「いってきます。」

制服姿の私はそうやってドアを開ける。私が歩く道路は緑であふれている。点滅している信号機に急がされるのが私の日課だ。整備された道路で見回りのパトカーと通りすぎる。私が敬礼をすると警察官も返してくれる。気持ち良いそよ風に吹かれる私の表情は、もちろん笑顔だ。

笑顔のものは

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 3 年 日高 真緒

私は、コロナウイルスが流行するまで毎年、妹の運動会の応援に行っていました。

私の妹は知的障害があるので養護学校に通っているのですが、そこに広がる光景は驚くものばかりだったのです。

まず、手や足が不自由な方が通えるように全てがバリアフリーでつくられていました。階段があるところには、合わせて手すりやスロープもあります。次に体育館に行ってみると、そこにも驚くような設備がありました。母から聞いたのですが、冬でも床が冷たくなならないように床暖房がつけられ、より快適に運動を楽しめるそうです。最後にグラウンドに行ってみました。私の通っている中学校とは違い、芝生とトラックで出来ていました。足の不自由な方でも活動しやすいように工夫したのだと思います。こうした隅々まで行き届いた配慮と工夫により、体の不自由な方も学校生活を送ることができていることが分かりました。

しばらくして、「こんなに設備が立派な学校って、いったいいくら位かかっているんだろう」と思い、母に尋ねてみました。

「きっと多くの税金が使われたんだろうね。」と母が答えました。

そこで初めて聞いた税金という言葉。今まで税金と聞くと大人のやりとりだと思い、子供の私には少し遠い存在のように感じていました。しかし、私や家族、友達を含め、全ての人々が納めてきた税金が、こんなに立派な養護学校に変身したことにととても感激しました。

私は、妹の弾けるような笑顔が大好きです。チャームポイントだと思っています。今日も我が家では、妹の笑い声が部屋中に響いています。

妹は知的障害を患っているので、できることが限られていきます。だけど私たち家族は、できること、できるようになったことに注目し、その喜びを分かち合っています。

妹が安心・安全に過ごしていただけるのも、多くの方々に支えられてのこと、いうならば税金のおかげです。

税金はあらゆる面で使われ、たくさんの困っている人を助けてくれています。私も生まれてから今まで数えきれないくらい、税金に助けられ、育てられてきたんだと思います。今は国を支える納税ができていない私ですが、税金のありがたみを感じながら、立派な社会人になりたいです。そして、私の成長や妹を支えて頂いた感謝の気持ちを持って、これからも続く明るい社会に貢献したいと思います。

母は買ってくれなかった。小学校二年生のあの日、大きなジンベエザメのぬいぐるみを買いたいと言った僕に「税込みでいくらになるか計算できたら買っても良いよ」と母は言った。僕が計算できるはずがないと思って、「買えない」とは言わず、消費税計算の話を持ち掛けたのだ。数学の先生だった祖父と生活していたので、算数は得意だった。そうは言っても、当時の僕には定価九千七百円と八パーセントという消費税率の計算はそう簡単ではなかった。しかし僕はぬいぐるみ欲しさのあまりに店内で時間をかけて税込み価格を計算した。今でも母は笑いながら「計算できたのに買わないでごめんね。」と言う。この時から消費税は身近な存在だ。

数学の夏休みの宿題で僕は友達と一緒に浦添市の税金について調べた。僕は消費税しか知らなかったの、隣の市で議員をしているおばから税金について教えてもらった。例えば、僕が通っていた小学校は建物が古くなったので新しく建て直したが、誰が建築会社にお金を払ったのか。ゆいレールを作ったのは誰なのか。学校から渡されている I Pad は誰が買ってくれたのか。など多くの身近なモノは税金と結びついているということが分かった。市町村に入る税金は大きく分けて二つ。一つは使い道が決まっている収入で国や県から入ることが多い、もう一つは自治体が自由に使い方を決めることができるもので、主に市民から直接集めた税金である。市議会議員はこの税金の使い方を監視したり決定したりするそうだ。父の給与明細を見せてもらおうと、所得税と住民税という項目があった。こんな風に大人達が税金を払うことで自治体にお金が集まり、自治体はその集まったお金を僕達の生活の為に使う。

10 月に出産予定のいとこが明石市に引っ越したいと言っていた。兵庫県明石市は子育て支援に力を入れているらしい。ホームページを見ると、他の市町村ではやっていないような特徴的な子育て支援がいろいろあるようだった。浦添市のホームページを見ると、やはり教育や子育て支援について力を入れていて僕たち子どものことを考えていることが分かる。また、浦添市は美術館があったり、立派な図書館があったり、芸術文化に触れる機会も多い。こんなふうに税金の使い道で、地域に特徴がでてくることが分かった。

そして、税金の使い方を知ることは、その自治体の政治家が何を大事にしているかが分かると思う。その政治家を選んでいるのは、選挙権のある大人たちだから、税金を納めることと同時に政治に興味を持つことも大事だと思う。今回、僕は税金について学んだおかげで政治にまで関心を持つことができた。同時に、政治に関心を持って「こんな浦添市にしたい」と思っても、税金が集まらなかったら何もできないことも知った。税金は、僕たちの夢や希望をかなえる大事なもののなのだ。

幼き日の思い出

苫小牧市立啓明中学校 1 年 近藤 芦羽

「うちにくるのは、支払いか税金の請求書のハガキだけだね。」と僕が小さい頃郵便受けに新聞と郵便物を取りに行くお手伝いをしていた時、母へ渡すと言うお決まりの言葉でした。税金なんてなければいいのにね、と何もわからない僕が言った時、間髪入れずに母は「うちは、お父さんが教師だから、税金でありがたく生活させてもらっているの。税金がないとご飯も食べられなくなるんだよ。」と言いました。「僕も大人になったら税金を払うようになるんだね。」と言うと母は突然何を思ったか近所の駄菓子屋へ僕を連れて行き、カゴに好きな物を三百円分いれてみてと言いました。ゼリーにスナック菓子、ひものついたあめと……。あつというまに三百円になりました。ところが、レジで三百円のはずが三百二十四円となりました。数え間違えたのかと小さな手でもう一度、確認しだすと母が、子どもだってお買い物をする時、税金を払っているんだよ。それが消費税で、当時は八%払うことを知りました。僕も税金を払ったと思うとなんだか少し大人になった気がしました。すると、他にはどんな税金があるのかが気になりはじめ、父や母に質問責めをした記憶があります。そんな僕に両親は、実物を前に説明してくれるようになりました。公園や図書館・市役所に体育館、消防車や救急車、パトカーも見に行きました。僕は生活していくうえで必要なものは、もしかしたらほとんどが税金に関係しているのではないかと予想しました。ゴミステーションに出したゴミを収集車が回収してくれるのも……。どう説明してくれるかを楽しみにしていると市内の大きなクリーンセンターへ連れていってくれ、ゴミを燃やす所を見ながらよく気がついたねとほめてもらいました。その夜、体の弱かった僕は、喘息発作がでて救急病院へ行きました。せきが止まらず、苦しい中、もしかしてこの病院も税金なのだろうか……。と気になりつつもいつのまにか眠ってしまっていた。母は税金を払うのは大変だというけれどそれ以上に沢山の恩恵を受けていることを知り、税金は僕達が生活していくうえで必要不可欠なものだと子どもの頃教えてくれた事に感謝しています。僕は小さい頃の体験から税に興味を持つようになり、中一になった今でもふと、これは税金に関係しているのだろうかという疑問に思うと調べる事が習慣になっている。

僕の将来の夢は父と同じく教師になることです。国民が、一生懸命働き、支払われた税金がお給料になるんだと思うと、より仕事への責任と、お金の大切さ、ありがたみを感じます。こうして、何不自由なく生活できているのも、税金のおかげです。いつか僕が結婚し子どもができれば、あの時の両親みたいに税金について楽しく教えたいと思っています。その日まで、僕ももっと税金について学び理解を深めていこうと考えています。

毎年八月十五日。私は大きな供養塔の前で踊る。独特の太鼓の拍子に笛と鉦。跳びはねると鳴る鈴の音、五色のしごき帯が軽やかに、そして華やかに翻る。

「田代念佛剣舞」。祈祷と先祖の供養を兼ね、五穀豊穡、家内安全などを願う舞。私が住んでいる地区に、約二一〇年、江戸時代から伝えられてきた郷土芸能だ。回向（供養）を目的とする儀礼的な「御墓踊」は、剣舞の創始者の墓所、初盆を迎えた家の墓前で、戦時中でも欠かさず踊られてきた。また、円陣となって踊る「舞台踊」（剣舞）は、地区の集会所や、数多くの芸能祭で披露されてきた。

父に連れられていった稽古場で、この剣舞と出会い、物心ついた時には、もう踊っていた私。初舞台は三歳の時。単純に踊ることが楽しかったし、父の喜ぶ顔を見るのも好きだった。踊ることが好きだという父の血が私にも流れていると実感できる喜びが、私の一番の原動力だったように思うが、十四歳になった今でも、私は踊ることが楽しくて仕方がない。太鼓の音が聞こえてくると、胸が高鳴る。上手に踊れた時の高揚感・達成感は格別だ。

しかし、それだけではないもっと大きく強い思いが、今、私の心の中にある。

現在、多くの民俗芸能が過疎化や少子高齢化のために、存続の危機に直面している。私の住む地域も例外ではなく、剣舞保存会の会員は年々減少し、踊り手の不足が課題となっている。先祖の方々が代々大切に受け継いできたものを守りたい…、絶対に途絶えさせてはいけない…、その責任が私にはある…。

最近、文化財の保護にも税金が使われていることを知った。生活や風土とのかかわりの中で先人たちが生み出し、現在まで守り伝えてきた有形・無形の文化財を、国民の財産ととらえ、確実に次世代に継承していくために、調査研究や記録作成、修復保全などに努めるほか、発表の機会の提供などにも税金は使われている。私たちが年に何度か出演する発表会や郷土芸能祭も、県主催のものだったり、県の助成を受けていたり…、自分たちの活動が税金とつながっていることがわかると、税金というものを身近に感じるようになった。そして、とてもありがたいことだと思った。

二年前、「田代念佛剣舞」は「岩手県指定無形民俗文化財」になった。指定されたからといって、私たちの踊りが変わったわけではない。昔からの踊りを大切に守り続けていくだけだ。しかし、気持ちの面では大きく変わった。私たちが守っているのは「県の文化財」であり、私たちの活動を納税者である岩手県民が応援してくれているのだと思うと、うれしくなるし、身の引き締まる思いにもなる。

私は今年も、先祖への敬慕、未来への責任、応援してくれる人への感謝の気持ちを胸に、心を込めて踊る。私の誇りである「田代念佛剣舞」が、納税者をも励ます舞になるといいと思う。

星になった祖母

白岡市立南中学校 3 年 藤野 花凜

昨年、病気のため人工透析を三十年近くしていた私の大好きだった祖母が亡くなりました。祖母は七十七歳でしたが、人生の後半の大部分を透析をしながら生活するという大変過酷な生涯でした。一週間に三回ほど病院に行き、半日かけて血液をきれいにしていました。この祖母の命を繋いでいた「人工透析」とは、どのような仕組みで行われているのでしょうか。

人工透析を行う人の大部分は主に腎臓を悪くした人たちで、放っておくと体に老廃物が溜まり、死にかかわる危険な状態に陥るそうです。そこで機械を使って人工的に血液から老廃物を除去し、きれいになった血液を再び体内に戻していきます。これらの医療行為の費用は通常の場合、ほとんど自己負担がない形でできるそうです。祖母も身体障害者一級の手帳を持っており、薬代なども安く済んでいました。これらすべてにかかる医療費の多くが「税金」で賄われています。この税金のおかげで祖母は生き延びることができました。そして中学生の私も、祖母の最期の十四年間を共に過ごすことができました。

もしも人工透析の費用を支払わなくてはいけない場合、月にすると約四十万円ほどかかるそうです。年間にすると五百万円です。そのような大金はきっと支払うことができず、祖母の命をつなぐことはできなかったでしょう。このようなことを知るまでは、私は税金はできれば払いたくないと思っていました。まさか大切な祖母の命が、私たち国民みんなが払っている税金で支えられているとは夢にも思わなかったからです。身体障害者一級の人への医療費の助成は人工透析や薬代だけではなく、交通機関やタクシー料金の割引、車椅子などの福祉機器の無料交付といった幅広い範囲で行われています。本当に手厚い福祉サービスに感謝すると共に、改めて税の大切さを実感することができました。

世の中には税金など払いたくないと思っている人がいるかもしれません。そのような考えが浮かんではしまうのはなぜでしょう。それは、税金の本来の使い道への認識が甘いのかかもしれません。人が生きていく上で欠かせない福祉や教育、公共事業などあらゆる場面で税金が使われています。ところがそれらのサービスは当たり前なことだと思ってしまい、税金で賄われていることを忘れてしまっているのではないのでしょうか。救急車や警察官が来てくれること、教科書が無料なこと、道路を整備してくれることなど全て、税金を用いているのです。それらをきちんと認識していれば、払いたくないと思うことはないはずです。

祖母が亡くなってから、まもなく一周忌を迎えます。私は墓前で皆様に支えてもらった祖母のことを思い出し、元気な姿を見せてあげることが一番の供養だと思っています。いつか私も納税するようになって、誰かの役に立つことができたら嬉しいです。

税金に感謝

旭市立第二中学校 3 年 伊藤 日葵

「俺は、高額納税者になる。」「え、どうやって。」「農業を儲かるビジネスにする。」弟が目を輝かせて夢を語れるようになったのは、税金のおかげです。

私には双子の弟がいます。弟の蓮也は、国の難病に指定されている「成長ホルモン分泌不全性低身長」と言う病気です。この病気は甲状腺ホルモンや、成長ホルモンの分泌が不足する事で身長の伸びが悪くなります。

なぜその病気がわかったかという、と、保育園の年長の頃から兄弟で身長の差が目立ち始め、一年に二回の健康診断でも一センチも伸びておらず、他の子供よりも身長が低い事でいじめを受けるようになりました。年少の頃は人を笑わせる事が好きで、我が家のムードメーカーだった蓮也が、小学校に入ると表情が暗く無口になり、泣いて帰ってくることもあって心配になった母が、かかりつけ医に相談し、検査を受け、病気である事がわかりました。

この病気の治療に有効な成長ホルモン注射は非常に高価な薬で、一本十万円、年間百万から七百万円かかります。母子家庭の我が家には、とても払える金額ではありません。先生は、「高額療養費制度」を進めてくださいました。医療費の負担が重くなりすぎないように年収に応じて支払いの上限額を設定している制度です。又、旭市には子供医療費助成制度があり、これらの制度を利用することで、ホルモン注射一ヵ月、三十万円は無料で受けられ、母はとても感謝しています。

私は、中学三年で税について勉強し、社会保障費が国の一般歳出の約三分の一を占める最大の支出項目だと知りました。私達の健康や生活を守るために欠かせない公的サービスですが、少子高齢化や新型コロナウイルスの支援金や助成金が増え、財源の確保ができず消費税の増収分が全て充てられています。増え続ける社会保障に私達が働いて納税できる時がきたら、皆で高齢者を、国を支えていく大人にならなければと強く思いました。

蓮也は八年間、希望と期待を持ち毎日ホルモン注射を打ち続け、その結果、中学二年生になった今、標準身長に達する事が出来ました。今は、別人のように性格も明るくなり、友達も沢山できて勉強や、部活動を頑張っています。特に、家業の農業に関心を持ち、農繁期には積極的に手伝い、祖父からコンバインの運転を教えてもらっています。

蓮也は、将来農家を継ぎ、儲かる農業を目指し沢山収入を得て、沢山税金を納め、自分のような病気をもった子供達や障害をもった人達、困っている人達の役に立つ高額納税者になりたいそうです。

このように人の役に立ちたいと言う蓮也を私は頼もしく思います。皆が豊かに安心して暮らしていくために必要な税金は、人の心まで成長させてくれました。私達家族は、税金に心から感謝しています。

富山市立南部中学校 2 年 梶谷 知香

「ちゃんと探しなさい！」あるとき、教科書をなくして、母にこっぴどく叱られた。

「教科書は税金で子どもたちに配られているの。大切なもののなのよ！」

「税金がなんだっていうの・・・」

とブツブツ言いながらやっとのことで探し出すと、教科書の裏を母は指さした。

「え？」と思って見ると、小さくこんなことが書いてあった。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

あわててほかの教科書を見してみる。どの教科書にも全く同じ言葉が書かれていた。

「税金」と言われて思い浮かぶのは、所得税や何かを買った時にかかる消費税のこと。しかし、教科書に税金ってどういうことだろう。

気になって調べてみると、学校で支給される教科書は全て、税金によって無償で私達に届けられていることを知った。教科書だけじゃない。学校施設、エアコンなどの設備、パソコンや机椅子などの備品、給食費の補助、さらには水道費や光熱費まで、税金によって支えられているのだという。

祖母に聞くと、こんな話をしてくれた。

「私が子どもの頃（昭和 30 年頃）は、教科書は自分たちで買わなければいけなかったんだよ。だから、中には教科書が買えなかったり、学校に行けなかったりする子がいた。税金のおかげでそういう負担が減って、みんなが平等に教育を受けやすくなったんだよ。」

教科書を自分で買う時代があったなんて信じられないと思った。さらに調べると、「義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律」によって昭和 38 年から無償化されたのだそうだ。

新学期、教室に入って席に座り、新品の教科書を開く。友人と登下校で渡る横断歩道は塗り直されていて、白が目には鮮やかだ。ひび割れていた道路もこの間の工事で直された。近所の小学校の古くなった塀もいつのまにか新しくなっている。私達の日常を、税金が支えてくれているのだ。

学校だけではない。中学生の私も小学生の妹も医療費が無料なのだという。それも税金のおかげだ。

「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ・・・」と言われると、ちょっとプレッシャーだけど、たくさんの大人たちに見守ってもらっているような温かな気持ちになってくるから不思議だ。中学生の私は、今は税の恩恵を受けるばかりだ。だからこそ、学校生活を思い切り楽しみ、頑張って勉強をし、将来は社会に恩返しができるような大人に成長したいと思っている。

変わった景色

豊川市立東部中学校 2 年 平松 来海

私の家のすぐ近くには、一つの公園があった。その公園は、雑草が伸びきって遊具にはスプレーで落書きがされており、遊んでいる人を見たことがないくらい人が近寄らない公園だった。

しかし、ある時その公園の工事がはじまった。約半年間の工事が終わると今までの公園と違った落ち着いた雰囲気の良い公園ができあがっていた。この公園はどうやって誰のお金でできたのだろうか。国や地方公共団体が税金を資金源として施工し完成させたものだった。この工事のおかげで、公園には毎日たくさん子ども達が来て楽しそうに遊んでいて地域の雰囲気も以前と比べものにならないくらい明るくみんなの笑顔が絶えない空間にみちがえていた。また、公園にはベンチやストレッチ器具、ランニングコースなどがあるため子どもだけでなく大人の人もよく来るようになった。

ある日、近所に住む年下の女の子と遊んだ際、彼女は「あの公園で新しいお友達が沢山できた。」と話してくれた。彼女は人見知りが激しく、小学校に入ってもなかなか友達ができずにいた。しかし、公園に行くことで会う機会が増え、打ちとけることができたのだ。彼女のお母さんも「公園が新しくなって本当に良かった。」と喜んでいた。

私は税金が嫌いだった。余分にお金を取っているだけだと思っていたからだ。しかし、税金によって変わった公園のおかげで静かで寂しい雰囲気の地域から、毎日楽しそうな声がきこえてくる明るい雰囲気の地域へと変わった。公園以外は昔と変わらないけれど家の窓から見える景色は以前よりも何十倍も明るく変わった。税金の使い道によってこんなにも変化があるのだと知ることができた。そして、他にどのような事に税金が使われているのかが気になったので調べてみると想像以上に小さなことから大きなことまで税金が使われていたのだと知り、今まで税金なんて必要じゃないと思っていた自分が恥ずかしくなった。

そして身近な生活の中でも気づいたことがあった。わたしたちが支払う税金。それが多くの人の手助けになる。そして自分も気づかないうちにいろんな人に支えられていると。

かつての私のように税金というとマイナスのイメージをもっている人がいるだろう。近々、消費税率が上がることを懸念する声も多い。少子高齢化が進む中、これからの若者にかかる負担確かに大きい。それでも、税金によって助かる命や税金のおかげでうまれる笑顔は計り知れないほどあり、税金によって今ある私たちにとってのあたりまえの暮らしができているのだ。税金は損なんかではないのだということを大勢の人に伝えていきたい。

「この国に生まれてよかった。」

大阪市立天王寺中学校 3 年 請田 絢子

朝もやの中、背中に円盤を載せた飛行機が離陸していきます。早期警戒管制機、一千キロ以上も飛びながら監視を続け「何も起こらないのが最高のご褒美」という地味な仕事だとフロントのお姉さんが教えてくれました。浜松市のホテルでのことです。お姉さんの笑顔から地元の誇りなのだと思います。

テレビでウクライナ情勢の報道が続きます。その中でジャベリンという対戦車ミサイルを知りました。日本にもあればいいのにと思っていたら、国内メーカーが開発を済ませ、一千セット以上が既に配備され、操作要員の訓練も終わっているとのこと。一体だれが用意したのだらうと驚きました。

新型コロナの治療薬の候補を即座に見つけ出したのはコンピューター富岳でした。世界最高峰のコンピューターが作られていたことも大きな驚きでした。

これらのおかげで私たちの日々の生活は守られ安心と安全を与えてくれます。早期警戒管制の日々の運用も、対戦車ミサイルやコンピューター富岳の開発も、声高に叫ぶことなく、自らの務めを果たす人々の地道な努力が集まり積み重なってきた結果です。一人の天才の力でもなく、一人の英雄によるものでもありません。その人達の努力を支え続けて実現させてきたのは、多くの人々によって納められた税の力です。納められた税を基礎として、その基礎の上に安心・安全な社会が築かれているのだと知りました。

「納める」という語は、『古くはヲサメルであり、物事をきちんと整理して、筋道にかなったようにするのが本来の意味であり、心の乱れをヲサメル、身をヲサメル、家をヲサメル、家をヲサメル、「用意ヲサヲサ怠りなし」などと使われる。物事の筋道を整える力がない、つまりヲサがない年端のいかない者をヲサナイという。そして、人の上に立つ者についていえば統治・行政を行うことであり、下の者の立場でいえば、定められた税を出すことで筋をきちんと通して安心させることを意味していた。』と国語学者の大野晋氏は述べています。国を治めるのも、身を修めるのも、争いを収めるのも、税を納めるのも同じ意味だったのは新しい発見でした。ヲサメルとは、あるべき姿を実現することなのです。

私の子とその子達が、他国の侵略に脅えることもなく、砲弾の音に身をすくめることもなく、未知のウィルスにも果敢に立ち向かえる国に暮らして欲しいと願います。

私は心に決めました。しっかり勉強して、ちゃんとした資格をとり、可能な限りの技術を身につけ、職業人として働くことで社会に貢献します。それは同時に税を納めることでこの社会を支える一員になることです。

「この国に生まれて良かった」と心の底から思います。

私の教科書と税

米子市立湊山中学校 3 年 高野 佳穂

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

学校で配布されるすべての教科書にはこう記述されている。その通り、義務教育である小・中学校の教科書はすべて税金によって作られ、配布されている。私はこの事について印象に残る体験をした。

小学六年生、最後の学習発表会。どんな劇をするのだろうとわくわくしていたが、知らされたのは、教科書無償運動についての人権劇をするということだった。「何それ」というのが正直な感想だったが、練習が始まった。他の皆も考えたことは同じだったのか、最初の演技にはぎこちなさがあった。だが、本番に向けて練習を重ねるうち、セリフを言うとき自分なりに身振り手振りをつけて演技する人が増えていった。ナレーターだった私も、観客に伝わる話し方を試行錯誤した。

教科書無償運動は、部落差別を受けていた人々が憲法二十六条二項にある「義務教育は、これを無償とする」という部分にのっとなって、教科書が無償にするべきだと訴えた運動である。貧しさや権力、反対派の意見など様々な苦労の末に教科書が無償化された。このことに感心し、皆の劇が熱を帯びてくると同時に私は、これまでの教科書の使い方について考えていた。劇に取りかかるまで、教科書のページが少し折れたり破れたりしても私は気にしなかった。友達が落書きしている様子を見ても何も思わなかった。そんな自分を思い出し、何をしていたのだろうと思った。昔は当たり前でなかった教科書を大切にしないのは教科書に込められた人々の思いを踏みにじることだと感じた。そして教科書を大切に扱おうと決めた。

そのうえで迎えた本番は、全員の思いがこもった納得のいくものになったと思う。私にとってあの劇は教科書に対する意識を変えるきっかけとなった。

中学3年生になった今でも、毎年教科書が配布される度にあのことを思い出す。私たち学生ができること、それは教科書が無償化された経緯を知り、感謝して学ぶこと。それから、教科書を大切にしながら使いこむこと。せつかく一人一冊ずつもらえるのだから、自分なりの教科書にしていくのがよいと私は思う。大切なのは、私たちの次の世代も等しく勉強できるように、納税することである。私たちの日常生活は税によって支えられている。このことを忘れずに生活することが今の私たちに必要なのである。私はみんなの生活を守り支えるための納税ができる人になりたい。

税金とは、消費税や所得税、ガソリン税等の様に、取られてしまう悲しいお金だと私は思っていました。しかし、その税金の遣われ方について父と話しをした事もあり、一度深く考えてみる事にしました。

私が通っている中学校の色々な設備、教科書、また、日常的に利用している道路や公園などの公共施設、税金が遣われ維持されている所はたくさんあります。その中でも、私が着目したい点は救急車です。父は北京市出身で、中国の税金の遣われ方を聞いてみました。中国では救急車の利用が全て有料との事です。救急車が現地に到着するやいなや、

「あなたは救急車の利用料金が支払えますか？病院の費用も支払う能力がありますか？救急車に乗る事ができるほどあなたはお金を持っているのですか？お金を払わなければ救急車に乗せる事はできません。」

と、最初に問われるのだそうです。利用料金を直ぐに支払える人もいれば、そうではない人もいるでしょう。私も持病のぜん息発作により、クループ咳が止まらず息苦しくなり、徳島市消防局東消防署の救急車にお願いをした事があります。その時に私が少しでも安心ができるようにと、優しく心を砕いて下さいました。しかし、中国では容態や安否を尋ねる前に、救急車の利用料金や病院の支払い能力について先ず尋ねるのです。支払える事の確認が取れ、実際に支払いの確約が取れた後に、ようやく病院へと搬送をして貰えるのです。その人に支払い能力がなければ、親兄弟親戚や友人に借金をして乗せてもらうか、もしくは乗る事自体を諦める他ありません。その費用の内訳はというと、要請をした基本料金と、その場所から病院まで往復の距離に応じての料金が加算される仕組みだそうです。その他にも、人件費やガソリン代金等の費用も上乗せをされるようです。距離に応じての料金と言うのは、タクシー利用に似ています。

日本では、市町村に納められた自治体の納金により、救急車の利用は一切費用が掛かりません。その時の出動条件にもよるようですが、一回出動する度に、四万五千元ほど必要だそうです。無料だからと言って昼間の混雑を避けるため、夜間外来へタクシー代わりに救急車でやってくる患者もいると、ニュース報道で見たことがあります。安易な救急要請をするその裏で、一刻を争うような患者が助からないなどと言う様な事があるかも知れません。最近で言うと、新型コロナウイルス感染症に罹患した患者の命綱が、救急隊員さんと救急車なのです。自分たちがいつ罹患するかどうか分からない中で救助活動をして下さっているのです。いたずらや面白半分で救急要請をする人がこのまま増えて行くと、自治体の税金で維持しまかなうことが難しくなってきます。自分たちの命を救い、また、命の選別をされないためにも、自分たちの納めている税金を大切に遣って行きたいと思います。

「ルワンダの涙」

南島原市立深江中学校 3 年 宮崎 悠花

この夏、私はカナさんという一人の女性に、ワークショップで出会いました。十九歳のカナさんは、高校生の時にアフリカのルワンダという国に留学し、それ以来、ルワンダの子供たちとその親を支援する活動を行っています。

一九九〇年代に起きた内戦や大量虐殺で多くの血が流れた国、ルワンダ。内戦終結後は、農業改革やインフラ整備、IT産業の振興などにより「アフリカの奇跡」とも呼ばれた復興を果たした国として今は知られています。しかし、奇跡の復興を遂げた国と言われていても、いまだにそこでは涙が流れ続けています。働く場所に恵まれない若い母親たち。極度の貧困から、捨てられてしまう子供たち。学校にも行けず、字も書けず、働くすべを持つこともできず、やがて大人となっていく少女たち。カナさんは、そんなルワンダの子供たちの夢を叶えるために支援活動を行っている、と私に話してくれました。

ルワンダと日本の暮らしが、なぜこんなに違うのか私は深く考えさせられました。日本では大人になると働く場所が誰にでもあります。どんなに貧しくても、子供を捨てる親はいません。子供は誰でも学校で学ぶことができ、将来の夢に向かって必要な学習をしています。

日本には、どんな人でも安心して豊かに暮らせる社会がつくられていて、それは税によって支えられているということに気づきました。また、「累進課税制度」というものがあり、所得が多い豊かな人が多くの税金を負担し、その分で所得が低い貧しい人の税負担を軽くしているのです。また、社会全体でお互いに生活を支えあう「社会保障」という制度があり、働く場所の確保や、親が働いている間の保育が必要な子供に対する保育サービスも充実しています。こうした社会保障制度の費用は、主に税金でまかなわれているのです。

私たち日本人が安心した生活が送れるのは、税金のおかげなのです。私たちが生きる現代社会は、人、もの、お金、情報が国境を越えて行き来するグローバル社会です。中学生の私は、カナさんのようにルワンダの現地で支援をすることはできませんが、ルワンダのことを思い、支援していく活動はできます。カナさんを通じて、ルワンダの子供たちに洋服や文房具を送ることができます。そして、この日本で税の制度に感謝しながら、一生懸命今を生き、将来、国際貢献できる大人になる力をつけていきたいです。ルワンダの子供たちの夢が叶い、うれし涙が流れることを祈りながら。

感謝感謝

都城市立西中学校 1 年 山並 蒼依

七月二十四日は、十年前百才の天寿を全うした曾祖母の命日。明治生まれの曾祖母はとても強い女性だったそう。夫を早くに亡くし、女手一つで子ども三人を大学まで出した。

熱中症で入院した九十二才までは、一人暮らしをしており、その後、施設に入所した。百才の誕生日から、自宅介護に移行し、祖母と暮らすようになった。

母の里帰り出産のため、曾祖母が亡くなるまでの約三ヵ月間を一緒に暮らした。

「ブーウさんがね。」

と、曾祖母の「くまのプーさん」の読み聞かせに、二才の私が笑い転げた記憶がある。

家の周りを散歩するときは、私が手を取って先導した。曾孫と一緒に歩ける喜びだろうか、微笑んでいる写真がある。

弟の誕生を知ると、酸素ボンベを引きながら産婦人科まで行った。亡くなる四十日前のことだ。曾祖母は涙を流し喜んだ。

私の七五三用の着物の腰上げをするぐらい元気だったのが、次第に食べる量が減り、ベッドに横になっていることが増えた。

「蒼依がいない。」

探し回る母たちの心配をよそに、私は曾祖母のベッドで並んで寝ていたそう。その姿が幸せそうで、とても嬉しかったと祖母は言う。

命が尽きようとしているとき、

「ばあばあちゃん、起きて。」

と、私は何度も何度も大声で呼びかけた。枕元には「苦しまないできれいに死んだらいいが。長いこと大変だったね。有難う。感謝感謝」と書かれた紙片が残されていた。

曾祖母が大往生できたのは、生きる気力を失わなかったからだが、加えて社会保障制度に守られていたことも、大きな要因である。

施設に入所できたのは、介護保険サービスがあったから。健康保険では、急な病気でもすぐに診察を受けられ、必要とあらば入院できた。さらに申請すれば高額医療費制度も受けられ、費用負担が抑えられた。

調べてみると、社会保障の財源は消費税であることが分かった。税収が景気の変化に左右されにくく安定しているからだ。

今回の参議院議員選挙では、「増税反対」という言葉をよく耳にした。私も、服や文房具などを買う際に、表示されている価格より支払額が増えてしまう消費税には、損した感じを受ける。更なる増税は反対だった。でも、曾祖母に思いをはせたとき、税金により救われる人がいることに気づいた。社会は助け合う構図になっているのではと考えるようになった。また、自分自身も医療費の分野では助けられていると感じる。

税金を払うことは国民の義務。「義務」というと高圧的な感じがするが、何の財源になっているかを勉強することで、優しい感情も起こる。仕組みをしっかりと学び、感謝して生活していきたい。

私の父は飲食店を経営しており、朝から晩まで私たちのために仕事に励んでくれています。しかし、二〇二〇年、新型コロナウイルス感染症の流行により、お店は時短営業や休業要請を何度も受けることになりました。お店を開けなければお客さんは来ないし、来なければ収入にはなりません。父はこの状況が続くと厳しいと、頭を抱えていました。私もこのままだとお店が潰れて、今までの生活ができなくなるのではないかと心配でした。

新型コロナウイルス感染症から二年が経った今、私はこれまでと変わらない生活ができています。それはなぜかという、父が様々な助成金を受けながらお店は変わらず営業できているからです。

例えば「うちなーんちゅ応援プロジェクト」で沖縄県からの給付金で、お店の経費を賄えたそうです。また新型コロナウイルス感染症の影響を受けている事業主が従業員に支払う休業手当等の一部を助成する制度「雇用調整助成金」では、何度休業しても、従業員の雇用を守り、金銭面の安心感を得られたいと話していました。これらの全ての助成金が税金から出されていると知りました。

私は今まで「税金」というものは中学生の私には関係のないものだと思っていました。しかし、コロナ禍において父のお店は税金に支えられて安定できています。もし「雇用調整助成金」などがなければもしかしたら今頃経営がうまくいかず生活までもままらなくなるかもしれません。コロナ流行によって父の仕事、私達家族の生活は「税金」によって支えられていたことを知りました。その他にも、私の生活で身近な税の使い道として、家で顔を洗ったり、お風呂で使う水を毎日使えるのは、税金を使って水道の整備をしているからです。また、学習に必要な教科書やタブレット、実験用具等にまで「補助金」というかたちで税金が使われています。給付金等を不正受給したというニュースを見ると少し腹が立ちました。税金は私達が健康で文化的な生活を送るために国民みんなで出し合っているお金です。それを本当に必要とする人や事業に使われるべきだと思います。

中学生の私にできる事はまず、税について正しい知識を得ることです。年々、納税をする人が減少しているので、「納税の義務」とは何かをしっかりと理解していきたいです。私が大人になってもその後も豊かで安心して暮らせる未来のために税金を正当に納められる人になりたいです。

日本を担う将来の私たちへ

北海道教育大学附属函館中学校 2 年 中尾 名歩

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

一字一句違わず小中学校の全教科書に記載されているこの言葉は、私が七年前から何度も何度も見聞きしてきたはずの言葉だ。この言葉を聞くと、自分が日本の未来を託されている一人なのだと自覚する。

この言葉を気にするきっかけとなったのは、中学一年生の冬、小学校の教科書を整理していた時だった。当時あまり気にしていなかったこの言葉は、今使っている中学校の教科書にも記載されている。親が教科書のお金を支払っているわけではなく、税金で賄われているというのは知っていた。だが、税金は誰がいつ、どのように支払っているのか、教科書だけでなくどのようなことに使われているかなど、詳しいことは知らなかった。そこで、税金について、観点を教育に絞り、調べてみることにした。

すると、税金のうち五パーセントを教育や科学技術の発展のための項目が占め、思っていた以上に国が教育に力を入れているということを知った。教科書だけではない。机や椅子、給食、先生方の給料、校舎の建設まで。小中学校で行われる教育に関わるほとんどのものが、日本の国民の方々の努力によって支払われているのだ。

私は今まで、教科書を雑に扱ってきたと思う。パラパラ漫画を描いたり、歴史上の人物の顔を塗り替えたりなど、暇さえあれば教科書で遊んでしまっていた私にとって、その事実は知っているようでよくわかっていなかったことだ。自分が日本で生きていくためだけでなく、自分たちが日本を守っていくためにも、重要なことを「義務教育」として今ここで学んでいるのだ。そう考えると、教科書の裏面にひっそりと書かれ続けているこの二文には、より重みのある深い意味を感じる。

これからの日本がどのような国になるのか、税金がどのような仕組みになるのかは、今の私にはわからない。だが、今義務教育で学んでいることを仕事に活かし、自分が受けてきた恩恵のバトンを次世代に引き継ぐことができるよう、精一杯努力しようと思う。

また、私が何かを買うだけで、税が納められる。私が働くだけで、税が納められる。私が生きていくだけで、税が納められる。たった一人の私だけでも、税を納めることで見知らぬ誰かを救い、救われている。無自覚のままに助け合っているこの関係を大切にしながら、日本の将来の担い手の一人として成長し、生きていきたい。

つなごう未来へ

会津若松ザベリオ学園中学校3年 大森 和佳奈

「わー、こんなに。」

私は母と小さい頃の写真などを見ている時に、それと一緒に母子手帳を見せてもらった。見てみると、健康診断の結果や予防接種などたくさん受けていた記録などが書いてあった。これらが無料で受けていたことを知りおどろいた。この母子手帳も交付されたものだとは母から聞き、なぜ無料で受けられていたのか調べてみるとすべて税金で賄われていたことを知った。

中学生の私にとって、「税金」と聞かれたら今まであまり深く考えたことはなく「消費税」ぐらいしか思いつかないくらい、知識もなくすごく遠い存在のように思っていた。しかし調べれば、調べるほど案外身近な存在だということが分かってきた。

私達が病気やケガをした時、病院で心配なく治療を受けられ、救急車が必要な時でも、一一九番に電話すれば、無料で病院まで運んでくれる。しかし、海外では、救急車は有料のことが多く、その多くは高額のことが多いそうだ。すべての人が移動する距離の遠さに関係なく無料で利用できる日本の救急車は本当にすごいし、安心できると思った。この安心も税金で賄われ、多くの人の命を救い、またそのサービスをあたり前のように受けることができる。

それだけではない。警察や消防、道路、信号、ゴミの収集など安心して生活できる基盤を作っている税金。今まで知らずに暮らしてきたが、税金に支えてもらっていたんだと感謝の気持ちでいっぱいになった。あたり前と思っていたことも、一生懸命働いて納税して下さる方がいて、たくさんの恩恵を受けているということを忘れてはいけないと思った。

私は小さい頃から食物アレルギーがあり、食べられる物に少し制限がある。誤ってアレルゲンを口にしてしまうと、口が赤くはれたり、かゆくなったりしてしまうからだ。何かあればすぐに病院へ行くことができるのも、税金のおかげだ。私の住む市では子ども医療費の助成があり、0才から十八才まで医療費を補助してもらえる。このような税金を財源にした社会保障制度があるから元気に過ごすことができると思った。本当に感謝しかない。

そう考えると、この税金がなかったら無料で受けられていたものも全額負担しなくてはならなくなり、収入の少ない人は費用負担が心配になり生活ができなくなる可能性もあるのではないだろうか。どんな立場にある人も取りこぼさないようにみんなで支えあうという制度が税金であると感じた。

今、私は多くの納税者に支えられて恩恵を受けている立場だが、あと数年で成人する。納税することは、私達の生活を豊かにし、支え合えるということを経験することで、次の世代へつなげていける。そうすることが豊かな未来につながれると思う。私もしっかり成人したら納税をし受けた恩恵を未来へつなげたい。

未来へつなぐ「当たり前」

富岡市立富岡中学校3年 濱田 すみれ

「このままだと将来、さらに消費税が増えそう」コロナ禍での給付金制度のニュースを見て親がつぶやいた言葉です。「今の子供達が社会に出たときの負担が重くなるよ」その言葉を聞き、ショックを受けました。現在行われていることが次世代に大きく影響しているのです。今までは、現在の国の状況や課題など、経済的な物事に興味を持つことはあまりありませんでした。しかし現在の取り組みが私達の将来に大きく関わってくるとなると、自分達が社会人になり、社会の一員として世の中を動かしていく立場になった時のために現在の状況について知っておかなければならないと感じました。

学校の租税教室では、税がない世界はどうになってしまうのかということ学びました。税のない世界では色々な公共施設がきちんと整備されず、危険な状態で放置されるということは聞いたことがありました。しかし、それ以外にも裕福な家庭しか学校に行けなかったり、警察や消防隊を呼ぶのにもお金がかかったりなど、とても多くの身近なものが税によって支えられているだと驚きました。「税」というたった一つの制度がないだけで、世界がほぼ逆転してしまうのです。私達の「当たり前」は税によって保たれているのだと感じました。また、税という制度は千年以上前のはるか昔から定められていたのだということを歴史で学びました。私達の祖先の時代から税というものはずっと身近にあり、私達の世の中を支えてきたのです。そんなにも昔から税があったということからも、税金は人々の「当たり前」な暮らしを実現するのに必要な制度なのだということが分かります。

そして、昔から続いてきたためか今の社会では、税によって保たれているこの安定した状態が「当たり前」という感覚になっています。税が上がり続けているこの状態も、これから生まれてくる子供にとっては消費税10%が「当たり前」となり、もっと後に生まれてくる子供には消費税15%が「当たり前」となっているかもしれません。そうなると、次世代の人々はどんどん負担が大きくなります。それを防ぐには、やはり税の無駄使いをなくすなど、今ある税金を大切に慎重に使い、税を増やす必要がなくなるように取り組まなければなりません。

現在、国は多大な借金を抱えていたり、少子高齢化が進んだりなど、税を上げざるを得ないような状況です。その状況を打破する具体的な対策を出すのはとても難しいことですが、私達の知恵を出し合い、少しでも安心して暮らせる未来の「当たり前」をつくっていくことが大切だと思います。よりよい「当たり前」な生活を未来へつくりたい、そのために一国民として税についてさらに知っていこうと思います。

くらしを支える税

南房総市立富浦中学校3年 鈴木 俊祐

小さな頃から、私は図書館が好きでした。週末になると訪れては、司書さんの読み聞かせを聞いたり、分からないことがあると本を使って調べたりしました。無料でたくさんの本を読むことができ、それだけでなく借りて持ち帰ることもできる、これは図書館だからこそできることです。図書館は、私にとって心地よく読書を楽しむことのできる、お気に入りの場所です。

調べてみると、私の住んでいる市の図書館は、バリアフリーや多様性の視点からも考えてつくられていることを知りました。例えば、車いすを使っている方のために階段や段差のある所にはスロープが設けられていたり、海外の方でも利用することができるように多くの言語に対応した案内システムや本が用意されていたりします。たくさんの場面で様々な人々が、過ごしやすいつと感じられるように工夫がされていました。

このような、素敵な場所をつくるには莫大な費用がかかります。そのお金はどこでまかなわれているのでしょうか。それは、税金です。

先日、私の中学校で租税教室がありました。その教室の中で、今までの自分が多くの場面で税金に支えられていたことを感じました。警察や消防、ごみの収集と処理などの公共サービス。医療機関で診察を受けた際の医療費助成制度。交通の安全を守るために行われている信号機や道路の整備。これらの費用がすべて税金によってまかなわれていることを知り、驚きました。

税金がなかったらどのような世の中になっているでしょう。その世界には、おそらく学校も役所も図書館でさえありません。私たちは今と同じ生活を続けることができないのです。日常の中で不安や危険に出会うことが増え、それらを個人の力で改善していくしかなくなってしまいます。

今まで私は、税金なんてたくさんのお金を払って、自分たちの負担になっているだけだと考えていました。しかし、世の中への税金の役割や貢献を知ったことで、自分が納税をする意義とその大切さを感じました。税金が私たちの生きる世の中を支えているのです。

私は、まだ未成年者であり中学生でもあるため、多額の納税をしたことはありません。しかし、大人になるにつれて、多くの場面で税金を納めることになります。その時のためにもこれからは、どのような種類の税があり、世の中でどのように活用されているのかを、学んだうえで納めていきたいと思いました。

私たちが普段利用している公共施設と制度は、大人の方々が納めてくださっている税金のおかげで、利用することができるものだと思います。これから、感謝の気持ちを持って、納税の義務を果たすことのできる大人になりたいです。

父の命を救った税への感謝

日本大学第一中学校3年 立花 綺杏

私は、「税金」について深く考えたことがなくて、それは、私には関わりのないものだと思っていました。自分の身近にある税は何だろう？と、インターネットを使い調べた時、救急車のことが頭に浮かびました。

私の父は、私が中学の受験勉強真っ只中、三年前の八月六日に職場で倒れ、救急車で運ばれました。生死をさまよい、大手術をして長い入院生活を送りました。その後、無事に退院できたのですが、退院して二日後に自宅でまた倒れ、母が慌てて一一九番に電話をかけて、その時も救急車で運ばれました。最初に倒れた時も自宅で倒れた時も、一刻を争う事態だったので、迅速で丁寧な対応をしてくださった救急隊員の方達には、深く感謝しています。

二度もお世話になった救急車が、税金によって賄われていることを初めて知りました。日本は、どんな状況であっても無料で利用することができるそうです。「日本で生活をしていると、無料で救急車を利用できるのが普通だと思っている人はたくさんいるんじゃないかな。」と母が言っていました。では、日本以外の国とどのような違いがあるのだろうか。少し興味を持ちました。日本は、一回の出動で約四万五千円の費用がかかるそうです。人件費やガソリン代、メンテナンス代、救急車内に設置されている医療機器や物品代など。これら全てが税金で賄われています。海外は有料の国が多くあることを知り、とても驚きました。アメリカでは、ニューヨーク消防局によって救急搬送されると十四～十六万円の費用を請求され、更に、距離が一キロメートル増えるごとに千円ずつプラス、酸素投与の場合は七千円プラスになるそうです。シンガポールでは、病状が重症か軽症かで料金が変わり、ドバイでは、搬送先の病院が公立なら無料、私立なら有料になるそうです。日本のように無料で利用できる国は、イタリアやイギリスなど少数であり、世界的に見ても珍しいと言われていることが分かりました。

父の話に戻りますが、手術や入院、通院で高額な医療費を請求され、中学受験を諦めるべきか悩んだ時期がありました。その時は、家族皆がお金のことを一番不安に思ったからです。日本には「医療費控除」という所得税を軽減する制度があり、連動して住民税も低くなるそうです。医療費が全て戻ってきたわけではありませんが、このような制度があるおかげで、支払うべき税金の軽減をしてもらえた。有難かった。と両親は言っていました。

日本は、税金の恩恵を受けていることがたくさんあると思います。そのことを知ることができて、私は初めて税の大切さを実感しました。父は、私の知らないたくさんの人達が納めた税金によって、支えられ助けられました。その感謝の気持ちを忘れず、将来、社会人になった時は、しっかり税金を納めていきたいです。

「Happy」を分け合う

能登町立松波中学校3年 脇田 麻結

過日、学校のタブレットで税について友達と調べていた時、「税金の使い道」とかかれた図の中に「海外支援」という語句を見つけた。気になって調べてみると、海外支援とは開発途上国の自立の支援のため、その国に資金を送ることだということが分かった。

すると友達は歓喜の声を上げた。見返りを求めず他国のために資金を送る我国日本に大きな誇りと感心を受けたという。対して私は誇りも感心も感じる事ができず、なんともいえない気持ちだった。なぜなら、社会科の授業で税について学んだ時、日本が多額の借金をしているため国民から税金を集め、その一部を借金返済にあてているときいたからだ。自国の借金返済も危ういのに関国に援助できる金があるのか気になったし、他国に援助していることで借金が一向に返済されず、だらだらと自国の税金を高くしているのかと思うと多少の苛立ちを覚えた。

けれどもその多少の苛立ちは一通の手紙によって恥じらいへと変わるのである。

その一通の手紙とは、アフリカに住むある男の子が私の父にあてた手紙である。父は、ワールド・ビジョンという貧困と不公正を克服する活動を行う国際NGOに参加していて、一日百五〇円の寄付をしている。手紙の差出人の男の子は父が支援したチャイルドであった。手紙を読む父の顔があまりにも嬉しそうだったため、私も中身を見せてもらうことにした。まだ学校で習っていない英単語や文章構成で、かいてあることはほとんど分からなかったものの、「I am very happy」という文をたくさん見つけた。私はこの時、とても温かい気持ちになった。

私は以前、自分の金の出費と、自国の借金返済のことしか考えていなかった。それは自己中心的な考えだったと恥ずかしく思う。私たち一人一人の少ないお金を必要としている人は世界中にたくさんいる。その人たちのためにだれでも力になれることができる海外支援は素晴らしいことだと思う。

もちろん、日本であつめた税を全て海外支援にあてているわけではない。どこかのだれかが納めてくれた税金で私は今、たくさんの教科書を持ち、勉強に励んでいる。反対に、私が納めた税金の一部がどこかの町の橋や道路を造っているかもしれない。

このように、税は国や地域をこえて、人と人とを結びつけるはたらきがある。また、そこに温かな交流を生み出す。

私たち人間が豊かな生活を送るには、納税は必要な義務である。自分のため、人のために納税を続けていきたい。

税と共に生きる

清水町立清水中学校3年 野垣 真由佳

私は、心臓に基礎疾患を持っている。生まれてから間もないころに手術をした。母が、生後六ヶ月だった私の、母乳の飲み具合と、尿の排出量の異変に気付き、私を病院へ連れていってくれた。私は今回初めて、そのことを聞くことができた。私が今、こうして生きているのは、この時に母が早く病院へ連れていってくれたからなんだと思い、感謝の気持ちでいっぱいになった。

私は今でも、心臓の動きに異変がないかを検査し、飲み薬をもらうために、三ヶ月に一回、その手術を受けた病院にかよっている。しかし、こんなに毎回検査などをしていて、どのくらいお金がかかっているのか心配になり、父に聞いてみた。すると父は、

「中学三年生までは受診料は、国の税金で賄ってもらえるんだよ。だから大丈夫だよ。」

と言ってくれた。私はそれに、安心したのと同時に、興味を持ち、そのことについて、調べてみた。それは「就学児医療費助成制度」というもので、小学一年生から中学三年生は健康保険の適用される医療費を市町村が負担してくれるというものだ。ちなみに私は清水町に住んでいるため、十八歳まで、医療費を支えてもらえる。税金はとても素晴らしい仕組みなんだということを私はそれを知って思った。

税金という制度が充実していないある国では、救急車を呼ぶのに九万円ものお金がかかるという。そのお金を理由に、救急車を呼べず、命を落とす人もいる。私は、そんな人が一人でも減ってほしいと思う。私のように、治療を安心して続けていられるのも、当たり前前の事ではないのだと、改めて、この作文を書き知ることができた。私は国に支えられて生きている。そう感じた。

しかし、現在の日本では、少子高齢化社会のため、働き手が減り、高齢者が増えている。二〇〇〇年には、高齢者一人に対して、働く人が三・六人だったのだが、その比が二〇六五年には、高齢者一人に対し、働く人が一・二人になってしまうと予想されている。これではいずれ、遠くない未来、税の制度が崩れて無くなってしまうのではないかと不安になった。この、人々の生活を支えてくれる素敵な制度が少しでも長く続いてほしい。

私たちが学校で使う教科書や図書館の本があること、そして医療費や、私たちの生活を守ってくれる警察官や消防隊員さん、お医者さん、影ながら私たちの町をきれいに保ってくれるごみ処理員さんがいることは当たり前ではない。みんなが払っている税金は必ず、誰かを助けるために、国を豊かにするために使われている。だから、税は大切なのだ。

夢の後押し

倉敷市立船穂中学校 1 年 河合 彩吹

私の叔母は、スイートピーを育てる花農家だ。農業を始めて、今年で4年目になる。農家になる前は、まったく違う職種の会社に勤めていた。叔母が、農業を始めると聞いて、妹である私の母や、祖父や祖母もとてもおどろいていた。私も、ずっと勤めている会社があるのになど不思議に思ったし、軌道に乗るまでの生活費などは、どうするのだろうと心配もしていた。それを、叔母にたずねると、「2年間の研修期間から、自分で農業を始めて、軌道に乗るまでの5年間は、国からの補助が出るんだよ。」

と教えてくれた。調べてみると、「農業次世代人材投資事業」という次世代を担う農業者を目指す人に対し交付される補助金があることを知った。そしてそれは、税金でまかなわれていることも知った。国からの補助に加え農業を始めるにあたって必要な設備や資材を購入したり、スイートピーを育てるための肥料を購入したりする際にも、市からの補助が出るということも教えてくれた。それを知って、こういう所にも税金が使われているんだとおどろいた。もし、この補助金がなかったとしたら、本当に一から自分の力だけで農業を始めなければならなかったと思う。そうだとすると、長年勤めていた会社を辞めてまで叔母が農業を始めていたかも分からない。

この補助金のおかげで叔母は、農業という新しいことにチャレンジする機会を得ることができたと思う。私も叔母の手伝いでビニールハウスでのスイートピーの手入れや、農業マルシェでスイートピーを売ったりもした。マルシェでたくさんの人に叔母が育てたスイートピーを手にとってもらい、みんなにきれいだねと言ってもらって、とてもうれしかったし、楽しかった。叔母の育てたスイートピーでたくさんの人が笑顔になり、なんだか私までほこらしい気持ちになった。そんな体験ができたのも、叔母が思い切って農業にチャレンジしたからだ。その大きな決断をしたのも、この税金でまかなわれる補助金の力も大きいと思う。そして叔母だけでなく、これから農業者を志すたくさんの人たちの後押しになるだろう。私たちが納める税金で、未来ある誰かの夢を叶えるためのお手伝いができるかもしれない。その誰かが育てた物で、別の誰かを笑顔にできるかもしれない。そう考えると私も誰かの役に立っているんだと思えてなんだかうれしくなるし、ほこらしい気持ちになる。

六月、私の母と妹が新型コロナウイルスに感染した。そして、家族全員が濃厚接触者になって、父は単身赴任のため、私が朝昼晩のご飯を作らなければならなくなった。はじめのうちは楽しんでやっていたものの食料も少なくなりわたしができるメニューも、もうなくなった。近くに住む祖父も協力してご飯を運んでくれたがあと八日間もどうすればいいのかと途方に暮れた。そんな時、玄関前に大きなダンボールがどんと二つ置かれた。母に開いてみてと言われ、中を開けてみると、たくさんのレトルト食品と飲み物、そしてビニール袋や消毒液などの日用品、デザート缶詰まで入っていた。後で母に聞いてみると、それは、税金でコロナにかかった人に送られてくる救援物資だったそうだ。私は、小学校での学習で、税金はすごく大切なものと知っていたけれど、実際は、消費税などで払うことばかりで自分の生活に役立っているという実感はなかった。しかし今回のことで、税金にとっても助けられた。援助物資が届かなければ、私たち家族の十日間の自宅待機生活はどうなっていたのだろうと感じた。援助物資以外にも毎日の健康確認の電話をしてくださった保健所の方々への給与、コロナ治療のための薬、濃厚接触者のPCR検査など、この一件だけでも、たくさんの税金で賄われている。コロナの予防接種も無料で受けることができ、そのおかげで重症化する人が少ない。私の母や妹が軽症ですんだのも、そんな国の制度のおかげなのかもしれない。もし税金がなかったら、私たち家族は、コロナにかかった上にお金が大量にかかって大変だったことを知って、税金は本当に大切に困っている人を助けてくれる命綱みたいなものと身をもって実感した。

調べてみると税金は、健康や生活を守る社会保障費、道路や住居などを整備する公共事業費、教育や科学技術の研究の文教、科学振興費、国の防衛のための防衛費、海外援助などの経済協力費などに使われているそうだ。税金は日本のことだけではなく、海外の救助までしていて、とてもびっくりした。

わたしはこれまで、何も考えずに平和で豊かな暮らしを送っていて、税金によってこの生活が維持されているなどということは考えもしなかったが、わたしたちが今、普通に学校に通い、家族と幸せな生活を送ることができているのは税金のおかげだということを改めて考えることができた。これから、私は困っている人たちやみんなのため、そして私自身のためにもしっかり働いて、きちんと税金を納める人になりたいと思う。私の払った税金が誰かを助け、誰かが払った税金が私を助けてくれているというのが税金の仕組みだ。実際に、助けられた私たち家族のこの経験を忘れずに毎日を過ごしたい。そして、この制度が平等に困っている人にしっかり届いて、みんなが幸せになれる税金になってほしい。

希望の預託

福岡教育大学附属福岡中学校3年 福田 愛斗

入学からコロナに苦しんだ僕もついに中学三年生となり、僕自身もつい先日、野球部を引退した。よく言われることではあるが、引退してから気づくことは多い。その中でも一番「自分はたくさんの支えで野球が出来た」ということを感じた。僕は、部長をしていたが、一年間やり抜くことが出来たのは、周りの人のおかげ以外の何者でもない。顧問の先生方、最高の仲間、家族や友達、多くの人の支えでここまでやってこれることができた。

話は変わるが、現在甲子園が行われている。三年間という時間を費やし、各県百にも及ぶ学校や家族、ベンチに入れなかった仲間の思いを背負い、一発勝負を全力で戦う姿こそがルールが分からない人々をも感動させる。その裏には多方面から支えがある。今大会、選手や監督から「試合が出来たことが嬉しい。皆様に感謝です。」という今まで聞くことのなかった言葉を聞くことが圧倒的に増えた。コロナ禍で試合を行うことすら困難ななか、甲子園を開催できるのは、審判や運営の方々、仲間のために頑張るベンチ外の選手たちなど様々な人に支えられているからだと痛感したのだろう。これらの行動は言ってしまうと、「希望の預託」だと思う。周りの人は頑張ってもらいたいと願いを託すように選手を支え、選手は全力で頑張りを託してくれた恩返しとして見る人に希望や感動、笑顔を与える。

そして、税金は最大規模の「希望の預託」だと思う。税金は法律に基づいて国に預託しているお金だ。税金の使い道といえば、まず自分たちに身近なものである、小中学校で配布される教科書だろう。多くの教科書には、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」と記されている。他にも、学校のイスや机、プールや遊具など僕たちが普段過ごしている学校の様々な設備に税金が使われている。これによって僕たちは安心して充実した楽しい学校生活を送ることができる。そして、子どもたちは大人たちが期待をこめ納めた税金によって育ち、大人になる。そして大人になった人たちが昔の大人の期待に応え、豊かな日本を創る。そして、その大人たちが納めた税金で新たな子供が育ち、将来また新たな日本を創る。

このように、税金を通して大人たちは将来の日本を担う子供に「希望の預託」を行う。今は自分が「大人たちの希望を預託」されているので、この期待に応えて、より良い日本をつくり、将来は自分が「子供たちに希望を預託」して、もっと平和で安全なより良い国、日本をつくっていききたい。

「ありがとうございました。」

笑顔でそう言うと正面には屈託のないキラキラとした笑顔があった。その笑顔が目に入った瞬間、達成感や清々しさが一気に押し寄せてきた。隣には他のお客さんの注文を真剣に焼いている母の姿があった。母もこの気持ちを日々感じながら頑張っているのだろうか、そんな事を考えながら母を横目にお客さんが立ち去るのを見送る。そして再度忙しい仕事に戻る。仕事と言って良いのか分からないが私は少し母のお店を手伝っている。母は焼き鳥屋を経営している。お客さんが多い日に私は手伝いに行っている。閉店の時間になるともうくたくたで、足が棒になる。でもその時間になると母と今日の注文内容や最近の出来事をゆっくり話す事ができる。仕事の途中でも話したりするがやはりこうやって話すのが一番良い。疲れが取れる。私が後片づけをしている時、母は必ず伝票の売り上げを確認し合計の金額を出している。私はそれを疑問に思っていた。ある日私は何の税を払っているのかこの作文をきっかけに聞いてみる事にした。すると、思っている以上に払っている税がたくさんあって驚いた。まずは私も払った事がある消費税、次にその地域に住む人達が地域社会の費用を分担する住民税、さらに国の費用を分担する所得税、自動車の排出量に応じて課税される自動車税などがあった。その中でも母は普通の会社員とは払い方が違う税がある。それは先程の住民税と所得税の二つだ。会社員の方々はお給料から引かれているが、母のような自営業をしている方々は自分自身で計算をしなければならない。金額の合計を出しているのはそのためなのかと、初めて納得した。こうやって一人一人がきちんと納めている事で私たちの生活が支えられ、安心安全に暮らせている事を改めて実感した。現在では人口減少や少子高齢化などにより、一人にかかる額が増加するなどの様々な問題があるが、私はそれに他人事と思わずしっかりと向き合っていきたい。母の事を知ってからはお客さんからお金を受け取る際、以前よりも感謝の気持ちを持つようにした。持った所で大した変化は無いかもしれない。けれど私はそうしなければと強く思った。私の見えない所でいつも頑張って生活を支えてくれている母が居るから。今でもあの忘れられない笑顔を見れる。やりがいを感じられる。私が誇る自慢の母だ。入れば感じる力強い熱気、いつも圧倒される。視界に入った大量の伝票。今日も忙しくなりそうだ。いつも通りお客さんが来て下さる。ありがたい事だ。

「ありがとうございました。」

笑顔でそう言うと正面にはまた屈託のないキラキラとした笑顔があった。私の大好きな笑顔だ。今日はいつもよりその笑顔がなぜか優しく、輝やかしく見えた。目にこびりついて離れないくらいに。

被災地にできること

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校 3年 土屋 日和

私の名前は「日和」です。私は、宮城県石巻市に生まれました。そこは東日本大震災で大きな被害を受けた場所です。石巻市には人々のシンボルである日和山があり、神社もあります。そこから見える景色は太平洋が一望に見られとても美しいです。その地にちなんで父母が日和と名前をつけてくれました。その麓にある門脇町・南浜町という場所は多数の民家をはじめ、大きな工場や市立病院などもありましたが、震災で壊滅状態に陥り、多数の犠牲者を出しました。震災が起こった時、日和山に登った多くの人々の命が助かったといえます。この夏、私はその地に行き、震災の跡地を見てきました。山のすぐ下の門脇小学校は、津波の後に火事が起き、今は震災遺構として残されています。そこを見た時、震災の恐ろしさを肌で感じました。震災から十一年経った今、日和山から見る景色は復興が進み、公園や道路、橋が出来ていて、震災前とは変わった景色が広がっていました。とてもすばらしい景色でした。ここまで復興するには、自治体や政府からの支援、国民の税金が使われ、更にボランティアの人々の活躍、そして建設業に関わった多くの人たちの努力があつてのことだと思います。

これからますます日本は地震による津波だけでなく、気候変動などの影響で大雨による洪水や橋の倒壊、土砂災害、家屋の損壊など多くの災害が発生して来ると思います。そのため復興に多くの資金を必要とするはずです。

私たちは、災害と税金の関係性を考えていかなければならないと思いました。その具体例の一つとして「復興特別所得税」というのが挙げられます。この税金は東日本大震災の復興の施策に必要な財源を確保するために作られたもので、東日本大震災の後、平成二十五年から令和十九年まで二十五年間払い続けるそうです。実際にこの税金は所得税が課税されている国民が払っています。災害に遭遇しない地域にいる人は税金を払いたくないと思うかもしれませんが、日本という一つの国の助け合い精神からみればたとえ災害に遭わなくても「復興特別所得税」を払うという協力が特に大切であると思います。

私が今まで学校での避難訓練をはじめ、防災グッズを揃えてみたり、実際に被災地を訪れ話を聞いたりすることで自然災害の学習をしてきました。ですが今回、税金と東日本大震災の関わりを調べることで災害復興には多くのお金が必要と知り、いつもとは違う観点から災害の恐ろしさを感じる事が出来ました。

自分が大人になって税金を払うことになったら、「復興特別所得税」が、東日本大震災の被害を受けた場所の復興に協力出来ると誇りに思って払っていきたいです。

被災地が少しでも早く復興できるよう願うと共に、納税という形でも被災地を支援していきたいです。